無職転生　～領主になったら本気だす～

華氏使うな

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

サウロスが転移事件を未然に防いだＩＦ。

原作第五章・四十八話のパウロの発言が実現した世界です。エリスを抱いたのをフィリップに利用され、ピレモンが失脚してルーデウスが当主になります。

意図せぬ形で当主を押し付けられたルーデウスの明日はどっちだ?!

目次

プロローグ
プロローグ「ターニングポイント」 1
少年期　領内掌握編
第一話「初顔合わせ」 9
第二話「嫁舅戦争？」 14
第三話「ミルボッツへの道」 24
第四話「戦いの予兆」 30
第五話「領主館の戦い」 36
第六話「砂上の楼閣」 43
第七話「助っ人、ギース」 52
第八話「一息」 57
第九話「貴族的なチート？」 62
間話「ロキシーの旅」 70
少年期　新婚旅行編
第十話「新婚旅行の始まり」 75
第十一話「約束」 81
第十三話「シル村」 86
第十四話「新婚旅行は終わらない」 97
第十五話「森の謎」 103
第十六話「独白」 110
第十七話「ｖｓ北王ウィ・ター」 114
間話「魔大陸へ」 120
第十八話「神の気配」 127
第十九話「出頭命令」 135

第二十話「茶番」 141
少年期　魔大陸編
第二十一話「遭遇」 150
第二十二話「魔大陸グルメツアー」 158
第二十三話「再会」 166
第二十四話「大王陸亀を狩れ」 172
第二十五話「神を名乗る詐欺師？」 178
第二十六話「痴情」 184

プロローグ

プロローグ「ターニングポイント」

「ルーデウス」

ある日のこと。俺はサウロスの爺さんに呼び出されていた。普段のやかましさは何処へ行ったのやら。

神妙な表情をしながら話しかけてくる。

「すみません、どういったご用でしょうか？」

「実はな……」

サウロスの話は、良く分からなかった。

あまり要領を得ていないというか…本人も良く分かってないみたいだ。

なんでも、数年前から紅い何かが空中に浮かんでるらしい。今まではどうにも出来ないので放置していたが、俺のファイアーボールの話をエリスから聞いて、なんとか出来るかも、と考えたようだ。

「ワシは、どうにもあれが恐ろしい物に思えてならんのだ。そこでだ、ルーデウス。魔法か何かであれを打ち落とすことは出来んのか？」

ふむ。

出来るか出来ないかで言えば、多分当てることは出来る。

問題があるとすれば、当たったところで壊すことが出来るのか。更に悪く考えるなら、それがトリガーとなって何かしら悪いことが起こるかもしれないことだろう。

例えば、あれがなんかの封印だったとか。

「当てることは出来ると思いますが…大丈夫なのでしょうか？」

「分からぬ。だが、壊さないで何かが起こる可能性よりも、壊して何かが起こる可能性の方が低いだろう。元々、無かったのだからな。古い物とは考えにくい」

まあ、一理ある。
でもなぁ…なんだか、軽率な気がする。
「分かりました。ですが、先に少し調べたりしても宜しいでしょうか。何か手がかりがあるかも知れないので」
「そんなことはもうワシもやっとるわ。……まあ、結論はなるべく早めに頼むぞ」

結局、あれについて何かが分かることは無かった。
似たような事例ですら、だ。逆にそれが不気味さを際立たせる。
ハッキリ言って、俺は壊すべきではないと思う。
似たような事例がないと言うことは、あれが特別な物だという証拠だろうからだ。
例えば、あれが何らかの封印だったとすれば、まんま同じでは無いにしても似たような形にはなるだろう。形には意味がある。
自動車にはミニバンがあったり、リムジンがあったり、はたまた消防車なんて物もあって、見た目は千差万別でも、見れば自動車と分かるし、車輪もエンジンも付いてない物は自動車とは言わない。
それと一緒だ。
あれは、オンリーワンの存在なのだ。
うーん、我ながら説明が下手くそ。

とかなんとか考えてみたが、実はあまり意味はない。
一番偉いのはサウロスの爺さんだからな。
やれと言われたら、やるしかないわけで。
まあ、一応言っては見るけど…

うん、無駄でした！
「ここら辺の上か…？」

数日後、俺は凄く長い棒を持ちながらウロウロしていた。目測で、ある程度の位置を測るためだ。
端から見たら凄く間抜けに見えるだろう。
因みに、エリスはお留守番だ。危ないかも知れないからな。

おおよその位置に見当を付ける。
（よし、ここら辺だな）
手に魔力を集めてファイアーボールを打つ。爆発したら叶わないので、サッと事前に用意してた堀に隠れた。
炎が打ち上がって行く。お、直撃した。
その直後、紅い何かにピシッっと筋が入って、割れてしまった。空中で破片が飛び散るが、途中で消えてしまう。

偉く拍子抜けだ。
なんもなきゃ良いんだがね。

そんなことを考えていたが、1日、一週間、一年と時間が経って…
俺の十歳式が終わってから二ヶ月もする頃には、すっかり忘れてしまっていた。

俺が11歳になる直前。エリスからアプローチを仕掛けられた。
「ごめんなさい、ルーデウスの気持ちも考えられなくて…」
と、ちょっとバツの悪そうな顔で、かつ恥ずかしそうに言われた。
昨日は全然普通そうだったのに、突然すぎてちょっと状況が飲み込めない。
俺も日頃から落ちねえかなぁ、とか冗談で考えてたからこそ、全くそういうムードは無かったと思う。
「ど、どうしたんですか、急に」
普段ならガっついてただろうし、今でもガっつきたいけど、俺は

却って冷静になっていた。
俺にはシルフィだっている。決められないからこそ、鈍感系を志していた筈だ……！
すると、エリスは恥ずかしそうに髪の毛を握って…
「い…嫌か、にゃん？」

――――

素晴らしい夜だった。
ＨＡＨＡＨＡ。童貞諸君、おはよう。
いやぁ、君たちにも教えてあげようじゃないか、あの快感を。
わざわざ風呂に入ってきたのか、普段と違って女の子らしい香りがしてて…

「ルーデウス、、その、おはよう」

まだ小さいながらに、でも柔らかさが感じられるソレを堪能するんだ。
すると、可愛らしい顔を真っ赤にさせて…デュフ……

「あら、あらあらあら…今日から貴方も本当に息子なのね！」

いや、ここから先は言えないなぁ（笑）
事前知識無しで君たちにも初めてを味わって欲しいだけなんだ、ホントだよ？
「ルーデウス!!なんだ、その締まりのない顔は！シャキッとせんか!!」

ん？何、どうした？
自慢するなって？ちょっと良く聞こえないなぁ、ハッハッハ。
ごめんなさいね、ちょっと俺、昨日の感触を思い出すのに忙しくて、

外野になんか言われててもちょっと分からないんだ。
「あ、明日からノトス家の当主だから。宜しく」
はいはい、聞こえない聞こえない（笑）
なに、ノトスがなんだって？
明日から当主？はいはい、なるほどねなるほどね…
え？
…当主？
……え？
――――
私たち……入れ替わってる?!
朝起きたらピレモンとかいう赤毛の怪物を彷彿とさせる奴と（立場が）入れ替わってました。
ちょっと良く分からないですね。私も分かりません。
俺、昨日何したっけ？
朝起きて、授業して、剣教えられて、中央から来たとかいう貴族数人に挨拶して、エリス抱いて…
やったことと言えばこの位だ。全くもって可笑しな点がない。
思い出せ……思い出せ……
記憶を深く掘り下げるんだ。
夜遊びしてるロキシー、依存するシルフィ、だらしのない顔のパウロ、ボコボコにしてくるエリス、優しいエリスって…いや、遡りすぎだよ！
（あっ、いや、遡りすぎじゃねえ！十歳式でなんか言われてた！）
なんだっけか、フィリップが言ってたんだ。エリスを抱けばどうの

こうのって…
　え、あれってエリスに婿入りしたらボレアス家継げるもねって位のフワッとした話じゃないの？ノトスどっから出てきたの？

「え……え……？」
「おや、どうしたんだい？」
（どうしたもこうしたもあるかよ！）
「あの…え…どういう、、」

「ああ、どうしてそんなに早く動けたのかってことかい？それなら簡単だよ。ピレモンは第二王女派だからね。アスラ王国の主要な派閥は第一王子派だ。首をすげ替えるって言ったら、快諾されたよ。
　でも、私はジェイムスに追われた立場。ボレアスが第一王子派だと言っても私までは信用出来ないらしい。自棄になって第二王女派に付くために、第一王子派を騙して当主の交代を画策した話に乗らせて、その後に証拠つきで告発されると立場がないからって、どれだけ本気なのか確かめさせて欲しいって言われたんだ。つまり、私じゃなくボレアス家自体との繋がりをハッキリさせろってことだね。だから、数人の確認するための信用が置けると思われてる貴族を連れてきて、夜に確認させたんだ。ついさっき、王都から知らせが届いたよ。失脚させたって。ピレモンも後ろ暗いことは沢山あったし、領民からも嫌われてこそ居ないけど好かれてもおらず、家臣からの求心力があったタイプでもなかったからね。
　今までは失脚させても後釜に据える奴が第二王女派じゃ意味がないからって放置されてたけど、ルーデウスが明確にボレアス派だって分かれば話は別さ。
　薮蛇になりかねないと分かっててても、全力でつつきに行くのが貴族って物なのさ。それに、父上がエリスのことを大事にしてるのは有名な話だ。そのせいで手が付けられないって話とセットでね。だから、父上に話を通さなくても勝手に相手がフィットア領主の意思だと勘違いしてくれるって寸法さ。私はノトスの後ろ楯が得られてハッ

ピー。エリスは甲斐性ある夫が手に入ってハッピー。君は可愛い嫁さんと、上級貴族の地位が手に入れられてハッピー。素晴らしいだろう？

って訳で、前々から準備してたから出来たんだね。エリスに関しては簡単さ。ちょっとばかし、女に捨てられる男の気持ちを教えてあげれば、ね？

そういうことだ。安心してほしい。ノウハウは教えるよ。勿論」

なんかメッチャ長文で言われた。

つまりどういうこと？貴族のおじさんたちにセッ〇ス覗かれてたの？

てかあんなに唐突だったのはフィリップがけしかけたからなの？

え、てか貴族って…俺が？

「いや、無理無理無理無理!!無理です！」

「もう遅いよ。それに、前々から言ってただろう？」

（言われてねえよ！）

「ま、そういうことだから。とは言えどもまだ君も子供。重祚も可能だから、一旦パウロに家督を譲っても良いかも知れないね。」

バタン！とドアが閉じられてフィリップは出ていってしまった。

嘘だろ……？

――パウロ視点――

手紙含めて１２歳まで接触を禁じてた息子から手紙が届いた。アイツは上手くやっているって話だったが、どうしたと言うのだろうか。

「ゼニス、リーリャ！ルーデウスから手紙だ！」
「本当！」
ゼニスとリーリャがニコニコしながら歩いてくる。ノルンとアイシャが居るとしても、やっぱり、息子との接触が出来なくて色々と溜まってるらしい。全員で覗き込むのも面倒なので、声に出して読む。
「えー、なになに…？」
『背景、パウロ様。
貴族の女に手を出すな、という父様の忠告が今、身に染みております。
お嬢様を抱いたら何故かノトス家の当主になってしまいました。
でも貴族とか無理です。なので父様に全て任せます。後は頼みました。詳しい説明はロアでします。
～親愛なる息子、ルーデウスより、ノトス家当主パウロ＝ノトス＝グレイラットへ愛を込めて～
ｐｓ．ついでに、婚約者が出来たこともここに書き加えます。』
「舐めんな」
もしかすると、息子はバカなのかも知れない。
あの時は笑っていたが、我が身に降りかかるとは……
昔言ったセリフを思い出しながら、固まってる嫁二人を尻目に俺はそう思ったのだった。

少年期　領内掌握編
第一話「初顔合わせ」

「ルディ！」

パウロ達が来たのは、あれから三日後のことだった。
凄く疲れた顔をしている。やっぱり親だな。お揃いだもの。
「父様。お久しぶりですね。会いたかったですよ。」
「挨拶は要らない！早く説明してくれ！」
「あ…はい。えっとですね…」
俺はパウロに事情を説明する。
エリスと恋仲になったこと。そしたらフィリップに利用されてノトス家を継ぐことになってしまったこと。
で、11歳の俺にはどうしようもないから、パウロに全部任せたい、当主の座も譲る、ということを伝えた。

「……はぁーー、、、バカか！」
パウロがキレた。
気持ちは分かる。父親から逃げ切ったと思えば、今度は息子が家督を持って追いかけてきたのだ。
「で、でも……僕にノトスを押し付ける計画なんて、知らなかったんですよ。精々、ボレアスになるのかなぁ、位にしか思って無かったんです」
「お前なぁ…」
驚きが一週回って呆れになったらしい。
黙りこんで、ウンウン言いながら俯いてしまった。
「…シルフィちゃんは、どうするんだ？」
「え、えっと…」
忘れてたと言えば、嘘になる。
頭の片隅にはあったのだ。考えないようにしてたけども！

答えに窮して黙ってしまう。１１歳の少年が、「相手から迫られたのでつい…」なんて言ったって、下半身に支配されたやべえ奴でしかないだろう。
パウロは俺の沈黙をどう受け取ったのか分からないが、深く、深くため息をついた。
「あのなぁ、突然そんなこと言われたってどうしろってんだ？それにさ、もうちょい考えてヤろうぜ？ちょっと考えれば面倒なことになるって分かっただろ。お前なら」
グチグチと言われる。全くもって言い返せない。
すると、ゼニスが割り込んできた。
「貴方の血よ」
「それにシルフィちゃんは……え？」
パウロが硬直する。
「だから、貴方の血よ」
「いやいやいや！そんなことは……」
急速に青くなる顔を見るに、思い当たる節があったらしい。パウロのことだ。当然、数人位貴族の娘も頂いてるのだろう。
これに関してはパウロは全く関係ない気がするが、この世界では血への認識が重いらしいからな。
「ルーデウス坊っちゃんなら、いつかなされると思って居ました」
喜色満面の笑みを浮かべてリーリャが言ってくる。
どういう意味だ、コラ。
そんなに女にだらしないと思われていたのか。
事実ですね。すんません。

そうこうしてる内にパウロの怒りが静まったようだ。己の血の過失具合が大きいと思ったのかも知れない。
「…これから、どうするんだ」
「その……出来れば、父様にノトス家を継いで貰いたく…」
「……息子のケツ拭くのも、親の努めか…
分かった。ただ、お前にも仕事はして貰うからな」

「勿論です」
パウロの表情は諦めに満ちていた。
…ちょっとばかし嬉しそうなのは、気のせいだろう。
――――
「パウロ、久しぶりだな」
「ギレーヌ…師匠なら、もうちょっと面倒見てやれよ…」
「他ならぬ主人らの望みだからな。ルーデウスも乗り気なら、止める理由なんてない」
「そうかい…」

あの後、パウロはフィリップやサウロス、ギレーヌに挨拶をしていた。サウロスには喜ばれ、フィリップには何か釘を刺されていた。
そして今、かつての仲間のギレーヌに食って掛かってる訳だ。
どうやら、あちらでは俺も乗り気だったと思われてるらしい。
いや、全然そんなことないからね！勘違いしないでよね！…割とマジで。
で、フィリップらの話によれば、どうやら俺達グレイラット家は、ミルボッツ領の領都に引っ越すことになったらしい。
「そういや、エリスちゃん？だっけ？婚約者の紹介もしてくれよ」
何処となくくたびれた様子のパウロに話しかけられた。色々と畳み掛けられて疲れたのだろう。
気分転換と息子のことが気になるってのが半々のところか。
「分かりました。ちょっと探して来ますね」
「おう」

いきなりこんなことになって、エリスとはピロートークどころか、殆んど喋れてなかった。
ヤった相手に放置されてていい気分はしないだろう。殴られなきゃ良いんだけどな。
――――

「フンっ！」
ボコボコにされました。トホホ…
「今さらどの面下げて話しかけて来たのよ！」
「いや、すんません。忙しくて…いでっ」
また殴られたよ。チクショウ、結婚生活も前途多難そうだなぁ…
「おーい、ルディ！って……」
あ、やべ、パウロに見られた。
あーあ、見る見る内に顔が死んでらぁ。
連れてくるだけならメイドにでも頼めば良いのに、わざわざ自分で探しに行ったのは、エリスに先に大人しくするよう伝えて、
「宜しくお願い致しますわ…」
「おっ、良い子だなぁ」
的な感じで、せめて嫁のことだけでもパウロの心負担を減らす計画を立てていたからだ。
それがむしろ真逆の結果に繋がってしまった。

絶望的な表情のパウロにクイクイっと手でジェスチャーされる。
「なぁ、流石に、もうちょっと相手は選んだらどうなんだ…？（ボソ）」
小声で耳打ちされた。
パウロからしてみれば、エリスは抱いたら、
フィリップに政治利用され、要りもしない高位貴族の位を押し付けられ、挙げ句の果てに暴力的、なんていうとんでもない事故物件に見えてるようだ。
「よく考えると、ちょっと酷いですね…（ボソ）」
こうして羅列してみると、中々凄まじいな、エリス。いや、実際は可愛いところもあるんだけどね？そういうところも含めて好きに…
ってあれ、パウロが何故か飛び退いた。どうし…
「ブホェッ！」
殴られた。聞こえてたんかい！

避けたらしいパウロは唖然とした表情でエリスを見ている。
エリスは避けられて不満のようで、メチャメチャキツイ目でパウロのことを睨んでる。
パウロ視点では義父に暴力を振るう嫁、エリス視点ではいきなり陰口を叩く義父。
…大丈夫かなぁ、これ……？

因みに、後でパウロとエリス両方に似たような内容の愚痴を言われた。それを聞いて仲良くなれそうだとちょっぴり安心したのは、また別の話。

第二話「嫁舅戦争？」

「……」

「……」

き、気まずい…

ひとまず俺の取りなしで落ち着いたが、お互いに会話がない。そりゃそうだ。初対面があれじゃあな。

パウロもパウロで大人げない。こういうときは普通、大人の方から歩み寄る物だろう。少なくとも、本気で警戒するのはやりすぎだ。目が盗賊と相対したギレーヌより鋭いぞ。

ただ、エリスはオーラが凄まじいからな。覇気ってやつ？強者って感じがビシビシとするから、気持ちは分からんでもない。

でもね、エリスさん。普段よりちょっと…いやかなり覇気が強いのは気のせいだよね？

まあ、お互いに警戒してるだけで害意がある訳じゃないから、一線を越える大きな問題になりゃしないだろう。

とは言えども、間に挟まれる俺の身にもなってほしい。何が悲しくて嫁姑戦争ならぬ、嫁舅戦争を見なきゃならんのだ。

「ルディのお嫁さんはここね！」

ナイスタイミング！ゼニスとリーリャがやってきた。

ゼニスはニコニコニコニコ、不気味な位にニコニコしている。

親孝行すると親ってのはこんなになるのか。やってみると案外良いもんだな、こんなに喜ばれるなんて。…パウロ？妹に任せた。

「あら～、可愛い子じゃない！エリスちゃんだっけ？宜しくね！」

「お、おいゼニス…」

「あら、どうしちゃったの？そんな険しい顔して」

ゼニスのテンションが可笑しい。

「あの、母様、どうしたのですか？」
「久しぶりにあった息子が可愛らしいお嫁さん連れてきたのよ！嬉しいに決まってるでしょ！」
ふむ、分からん。禁欲後のオ○ニーみたいなもんか？
ま、そんなことはどうでも良い。
重要なのは、空気が軽くなったことだ。
これを利用して、一気にパウロとエリスの仲をくっ付けよう。題して、恋のキューピッド作戦だ。
義父と嫁の良好な仲をなんて言うのか知らないからこんな名前にしたが、パウロのことを考えると、ちょっぴし不安というか、嫌な気持ちになる。
まあ、パウロも息子の嫁に手を出すほど落ちぶれてはないだろうし、エリスは多分、ギリギリパウロの対象外だろうから問題はない。
…大丈夫だよね？
……深く考えるのは止めよう。考えを戻そう。
えっと、空気を元に戻す作戦だっけか。
「それじゃあ、折角の機会ですし、エリスになんか質問してみませんか？まずはお互いのことを知ることから始めましょう！」
「あら、良いわね！何訊いちゃおうかしら！」
「僭越ながら、私も宜しいでしょうか」
ゼニスとリーリャが乗ってきた。
第一フェーズ、成功。
エリスの反応は…悪くない！どうやら、母二人の方の印象は良かったらしい。
この感じなら、なんとかなるだろう。
…頼む！
「じゃあじゃあ～、ルディとのアレ、どうだった？」
「!!」
ゼニスさん?!?!
ゼニスに背後から刺された。
前世は関わりが少なくて、俺は忘れてたんだ。母親と言う生物は、

息子の恥ずかしい話がだーいすきだと言うことを。
エリスの顔を見るのが怖い。なんやかんや、本番に至るまでも何回か殴られたもんだ。エッチな話をしたら怒るに決まってる。
「その…結構、良かったですワ…」
エリスさん?!?!なんで満更でもなさそうなの?!
エリスの不意打ちが俺に炸裂！
ルーデウスに１００のダメージ！
「ルーデウス坊っちゃんなら、当然でしょう」
リーリャさん?!?!俺のことなんだと思ってるの?!
リーリャの会心の一撃！ルーデウスに１万のダメージ！
ルーデウスの心は折れてしまった！

あれから、俺の恥ずかしいアレやコレを根掘り葉掘り聞かれてしまった。
まさか、母親に痴話を聞かれるのがこんなにキツいなんて…
まあ、それでも当初の目的は果たせたからヨシ！そうとでも考えないと居たたまれなくて逃げだしちゃいそうだ。
パウロもエリスも、心なしか表情が和らいでる。泥被った甲斐があったぜ。
「そういえば、ギレーヌからエリスちゃんと息子に剣教えてるって聞いてたんだけどさ、今はどっちの方が強いんだ？」
気分の戻ったパウロが、俺の痴話から話を転換してくれた。まあでも、あんま成長してないって思われるとそれはそれで恥ずいんだけどもね。
「あら、私も気になるわ！」
「あんまり期待されても、剣の方はあんましですよ？」
「良いんだ。元の剣の師匠として知っときたいしな」
「とはいっても、エリスの方が強いですよ。いっつも剣では押し負けちゃうんです」
「へー、そうなのか。…なら、ルディ。久々に父さんと、打ち合いしよ

うぜ」
ん？唐突にどうした？
エリスと俺のどっちが強いかって話だったろ。俺は騙されんぞ。レスバ厨を舐めてはいけない。
「え、今からですか？父様もお疲れでしょうし、明日にしません？」
明日からはフィリップがパウロに色々教えるって言ってたから、明日に持ち越させることで回避しようと思う。
幾ら俺が魔術師だからって、父親にボコボコにされてるところを嫁に見られたくないってのは当然の心理だ。
「良いから良いから。ほらっ、行くぞ！」
「あっ、ちょっと！」
無理矢理手を引っ張られる。
なんでえ、偉く強引じゃねえか。どうしたんだ？
俺が理由が分からず悩んでいると、パウロがエリスの方をチラッと見た。
（あっ、パウロてめえ！俺を利用してエリスの強さを測る気だな！）
真意に気づいたときにはもう遅く、俺はズルズルと引っ張られてしまったのだった。

結果から言えば、惨敗だった。
流石はパウロという感じで、俺のフェイントなんかにも全く反応せずに、的確に隙を付かれて負けてしまった。
魔法ありじゃまた違うのかも知れないけど、それでも敗けてた気がする。父親は偉大だった。
「中々やるじゃねえか」
パウロがニヤニヤしながら言ってくる。
クッソ、うぜぇ……挑発スキルをここぞとばかりに発動してくる。分かってるんだからな！お世辞だって！
まあ、ここまでは自分を卑下してきたが、ちょっと弁護させて欲しい。
俺がパウロに気絶させられたときよりかは、パウロの動きが鋭かっ

たのだ。つまり、昔の魔法アリの俺よりかは本気を引き出せてるってことだろう。
それとも、パウロもパウロで鍛え直してた可能性だってある。両方ですらあるかも知れない。
だから俺は成長してるんだ。…多分、きっと、メイビー。

「エリスちゃんもやってみるか？」
パウロ、ちょっと調子乗ってないか？
俺に勝てたことに気を良くしたのか、パウロがエリスに喧嘩を売ってる。
喧嘩っぽいエリスのことだ。断る訳がない。
「上等よ！……ゴホン、受けて立ちまスわ」
ほらあ、やっぱり！
エリスが勝ちゃ良いが、さっきの感じだと多分、パウロの方が強い。
俺の脳裏に過るは過去のエリスの家庭教師らの末路。
新婚早々、嫁が義父の部屋に夜な夜な訪れる（意味深）だとか、義父と朝チュン（意味深）なんて、嫌すぎる。
「どうどう、落ち着いて落ち着いて…」
「良いじゃないの！エリスちゃん、やっちゃって！」
またもゼニスが囃し立てる。顔立ちは気品に溢れる清楚系なのに、喧嘩っぱや過ぎないか。
でも、良く考えたらゼニスは冒険者。リーリャは元王女の護衛だ。エリスだって山猿なんてアダ名が付くような女だ。可愛い顔に似合わず、全員超武闘派なのである。
武闘派っていえば、前世の弟も空手黒帯だったよな…うっ、頭が…
俺が意外にも前世の家庭環境と似通ってることに気づいてショックを受けてる間に、パウロとエリスは相対してしまった。

「準備は良いか？」
「いつでもオッケーよ！」

お互いにオーラが立ち上る。エリスは化けの皮が剥がれてた。おいおい、俺とやってたときはこんなオーラなんて出てなかったぞ。
「では両者位置について…始め！」
審判リーリャの合図で戦いが始まる。
パウロの表情は余裕そうだ。
何処からでも掛かってこい！って感じの構えを取ってる。
対してエリスは真剣な表情だ。
一秒、二秒、三秒……その位の時間が経ったときに、エリスが踏み込んだ。
パウロに向かって全力で剣を振るう。パウロは余裕で受け流そうとして…
瞬間、パウロの表情が真剣な物に切り替わった。見ると、パウロの剣が微妙に傾いてエリスの剣と競り合っていた。
受け流すつもりが思った以上にエリスの力が強くて流しきれなかったのだろう。
だが、パウロも歴戦の戦士だ。流しきれないことを悟った瞬間、足に力を入れて後ろに飛び退く。
そして続けざまにエリスに追撃を入れる。
二合、三合と打ち合う。良くパウロの剣を注視すると、時折僅かに力を抜くタイミングがある。
相手のバランスを崩すための技だろう。
綱引きなんかをしてるときに、一瞬手を話して相手のバランスを崩させる奴と似ている。
それを受けてエリスは…パウロのペースに乗せられ切ってはいなかった。
それを見たパウロが俄に殺気立つ。昔、俺も当てられたことのあるアレだ。
本当の戦いの火蓋が、ようやく切って落とされた。

ここから先の戦いは、熾烈を極めた。
パウロは受け流すことを止め、多種多様な技で相手のペースを崩すことに専念している。
エリスは、それに対して全力で突っ込んでく。パワーで押し切ろうという魂胆だ。
これは、ギレーヌの教えが良く出ていると思う。ギレーヌは大陸でも数本の指に入る剣の名手だ。
故に、素直な剣でも相手に十分通用する。無論、フェイントを使わない等と言う訳ではない。
ではどういうことか。簡潔に言えば、行動がある程度パターン化されてるのだ。
これは、パターンを読まれても問題が無いからこそ成せる技だろう。
では、エリスはどうか。
エリスはまだそのレベルに至っては居ないだろう。
持ち前のパワーで今はやり会えているが、パウロの方はまだまだ余裕がありそうだ。
パウロの方が防戦に徹してる以上、体力の消耗は相手の方が少ないし、そもそもの体力量だってパウロの方が勝ってる。
このまま行けば、エリスの敗けは固い。

…だが、パウロが圧倒しているとは言え、この戦いは美しかった。中二病乙！みたいにひねた見方をしがちな俺ですら、素直に感嘆することしか出来ない。

普段のギレーヌとエリスの模擬戦では見られないことだった。
お互いにタイプが違うからこそ、技量が出てると思う。
これはどういうことか、テニスか何かで例えよう。
ギレーヌは、言わばスマッシュを到底相手に打ち返させない速度で打てるタイプだ。
それを真似するエリスも、それに特化していると言って良い。

しかし、どうしてもギレーヌには劣ってしまう。なので、ギレーヌは練習へと落とし込むために手加減をしている。
そのせいか、普段の戦いはラリーじみた物で、どこかわざとらしく感じられる物だったのだ。
そこに、パウロの登場だ。
パウロは正攻法でも出来るし、ラインギリギリにボールを落としたりして勝ちを目指すこともタイプである。
そのため、ギレーヌ以上にパウロとの戦いは勝負らしい勝負になっているのだ。
剛のエリス、柔のパウロ。こう言ったところか。
まあ、パウロでは剛でも負けてないけどな。こんな戦い方をしてるのはエリスを傷物にしない為ってのもあるだろう。

そうこうしてる内に、エリスの動きが鈍って行く。
体力が切れたのだろう。
…おっと、パウロに剣を弾かれてしまった。
パウロの木剣がエリスの首に添えられて…
「勝負あり！」

試合が終わった。パウロの勝ちだ。

「はぁ……はぁ……」
息も絶え絶えな様子のエリスに、水を出してやる。
ちょっぴりエッチだ。
「…ふぅ……中々やるじゃねえか…」
パウロもエリス程では無いが多少疲れた様子だ。
先ほど俺に掛けた言葉と全く同じ言葉をエリスに掛ける。しかし、何故だか煽りという感じを受けなかった。
それだけ、エリスが強かったということだろう。

てか、被害妄想じゃなくて本当に煽られてたのな、俺。イラッ！

しかし…エリスは大丈夫なのだろうか？

これから先、パウロとエリスにずっと喧嘩され続けたらたまったもんじゃない。

幽鬼のように立ち上がるエリス。

パウロの方にフラフラと歩いて行って…

あっ、あれは平手打ちの構えだ！

不味い、間に合わない…！

俺が手を伸ばすより先に、エリスの手が振りかざされて……

パウロの肩をパシッと小突いた。

「エリスよ！貴方の名前はなんて呼んだらいい？」

「おう、気軽にパウロって呼んでくれれば良いさ」

「宜しく！パウロさん！」

どうやら、エリスはパウロのことを受け入れたらしい。

パウロの方も、貴族のお嬢様に対してじゃなく、冒険者に対する態度で接することに決めたようだ。

一時はどうなることかと思ったけど、本当に良かった。

いやあ、めでたしめでたし。

あのあと、パウロとエリスは頻繁に一緒に訓練をするようになった。

タイプが違う相手と打ち合うことで、得るものがお互いにあったらしい。メキメキとお互いに腕を上げていて、パウロは剣聖も夢じゃないそうだ。

良く、昼頃に汗をかいた二人を見かける。

ギレーヌも満足そうだ。

…ってあれ？俺のスペースは？

パウロの女タラシの技能に完敗した、今日この頃でした。

第三話「ミルボッツへの道」

「慌ただしいなぁ…」

パウロとエリスが和解した翌日。

俺達は早々に、ロアから出ていた。

なんでも、領主が居ない状況が長続きすると不味いらしい。

そりゃそうだ。

超大急ぎでミルボッツ領の方に行かなきゃいけない。全く、上級貴族も楽じゃないぜ。

馬車に乗ってるのは、まず俺達一家は当然として、何故かフィリップとギレーヌも居る。

ギレーヌはまだ分かるが、フィリップはなんで居るんだ？

とは言えども、そんなことを訊いてフィリップに舐められては困る。というのがパウロに昨日の夜言われたことだ。

『フィリップは娘を政治に使える奴だ。舐められたら簡単に使い潰されちゃうだろ。俺はもう手遅れかもだが…ルディがフィリップに睨みを効かせるんだ。良いな？』

パウロにとって、フィリップはあまり信頼出来る手合いではないらしい。お互いに嫌い合ってる訳じゃないんだけどね。

何をやられるか分かったもんじゃないから、俺を賢くて有能と思わせて、フィリップが簡単に手出し出来ないようにしたいそうだ。

っていうか俺は、鈍感系の次は勘違い系をやらなきゃいけないのか。ご都合主人公の欲張りセットだな。

てな訳で、俺は全くもってフィリップが乗っている理由が分からないが、訊くわけにはいかないのだ。

パウロも同様だ。賢いとは思われずとも、付け入る隙があると思われて、本当に気づけないような凄い陰謀に巻き込まれたりしたら、どうしようもないからな。妥当だろう。

リーリャとゼニスは二人でブエナ村の方に荷物を取りに行っている。

ギレーヌは忠犬だから、わざわざ意図を問いただしたりしないだろう。てかギレーヌって何の獣人だっけ？犬？狼？
「ルーデウス！見て！魔物よ！」
エリスは…ダメだ、全く疑問なんて持ってなさそうだ。俺達との旅を純粋な気持ちで楽しんでやがる。
「ほーん、最近はめっきり減ってたのになぁ…って、なんか数多くないか？」
「こっちに向かって来てるな」
「魔物?!だ、大丈夫なのかい…？」
お、魔物か。昨日はパウロとエリスに良いところ持ってかれたし、ちょっとは良いところを見せたい。
「僕がアウトレンジから魔術を打ち込みます。打ち漏らしがあったら、ギレーヌがお願いします」
「分かった」
早速、『傲慢なる水竜王（アクア・ハーティア）』のお披露目だ。
周囲への被害も考えると…土魔法だな。
『岩砲弾（ストーンキャノン）』にしよう。
飛んで行った魔術が、魔物どもに直撃する。
それと同時に…爆発！
よし、打ち漏らしは無しだ。
「私もやりたかったのに…」
エリスがちょっと不満げだ。
「可愛い可愛いエリスを前に出すわけにはいかないですよ」

満更でもなさそうな顔になった。パウロはニヤけ面になった。殴りたい、この顔。

（っていうか、フィリップだよフィリップ）
考えても分からないし、直接訊くことにしよう。なんで居るのか分からない方が怖いからな。
「そういえば、フィリップ様はなんでいらっしゃるのですか？」

「…いや、その……ノトスとの関係が良好で、重用されてるってことを見せつけるのと、後はピレモンに当主に戻られても困るので、領地経営のお手伝いを…」

何故だかフィリップは敬語だった。

どしたん？

ーーーフィリップ視点ーーー

不味い。もしかすると私は、とんでもない死地に足を突っ込んでしまったのかも知れない。

最初は、パウロやルーデウス達を使って色々とやろうと思っていた。パウロやルーデウスは少し前まで片田舎に居たような連中だ。

貴族のことなんて、分かりゃしないだろう、と。

馬車の中では、ルーデウスがしきりに何か聞きたそうな顔をしていた。

一見すれば普通の顔だが、ポーカーフェイスとしてはまだまだ甘い。

恐らく、なんで私が居るのか訊きたいだとか、その辺りのことだろう。

何故、直接訊かないのかは…多分、警戒されてるから？

確かに、私は曖昧な言葉でルーデウスを騙してピレモンを失脚させた。それが原因で言葉に注意してるのかも知れない。

そんなに警戒せずとも、騙すときは此方から行くのにね。

なんてことを考える余裕さえあった。

どう見ても素人丸出しの態度だからね。まだ11歳なのに騙されることに警戒がある辺り、磨けば光るかも知れないけど。

そんな私の余裕が崩されたのは、魔物が現れたときだった。

魔物が出た。それ自体は警戒していたことだ。

多少、恐れる気持ちがあったが、ギレーヌやパウロが居る。死の危険は感じていなかった。
ギレーヌやパウロに指示を出そうと思い、声を出そうとする。しかし、その直前、
「僕がアウトレンジから魔術を打ち込みます。打ち漏らしがあったら、ギレーヌがお願いします」
ルーデウスが指示を出してしまった。
魔術は昔見たことがあるが、この数の群相手だと、かえって恐慌状態にさせて危険だろう。判断ミスだ、そう言おうと思った。
だが、ルーデウスが詠唱無しで魔法を打ったせいで、それも失敗してしまう。
（もうダメだ、ギレーヌ、パウロ、神様…助けてください、お願いします！）
そう思ったときだった。
ルーデウスの魔法が着弾した。
とんでもない爆発音が耳をつんざく。
私が恐る恐る、魔物の居た方向を見ると…
そこには、ただ爆発痕があるばかりだった。
まるで、何もそこには居なかったと言わんばかりに、跡形もなく魔物は消しとんでいた。
なんだこれは。こんな魔術は見たことがない。
ルーデウスの表情は全然余裕そうだ。少なくとも、これより強い物が打てるということだろう。
極めつけは…
それを見た他の奴等の反応だ。
エリスは、自分がやりたかったとむくれている。
自分でも出来たという自信の現れだろう。しかし、子供であるが故の虚勢には見えない。
あれは、本気でそう思ってる顔だ。
そして、それに対するルーデウスの反応も、エリスの発言に対しては疑問を持っていない様子で、エリスの強さに信憑性が出てきてし

まった。
ギレーヌも特に表情を崩さないし、パウロに至ってはニヤニヤしている。どれだけ余裕なのだろうか。
私も貴族だ。魔術は見たことがあるし、ああいうことが出来るってことも知っている。
だが、なんでもないことのようにやる程の者は見たことがない。
少なくとも、普通の人間ならルーデウスの態度を見て驚くだろう。
私は、ある結論に辿り着いてしまった。
私は……魔物以上にモンスターな奴等と、これから生活していくことになるのかもしれない。
パウロやルーデウスを何かに利用する気は失せてしまった。こんなもの、怒らせたら絶対に勝てないだろう。
ギレーヌが居ても、余波だけで死にかねない。

そんな私の態度を見て、ルーデウスはキョトン、とした感じの顔を向けてくる。
あの顔を私は知っている。昔、何かの本で見たことがある。
あれは……『俺、また何かやっちゃいました？』って顔だ。
恐ろしい。絶対に怒らせてはいけない。僕はそう、強く心に刻んだのだった。

ーーールーデウス視点ーーー

「ミルボッツ領ってどんなところなんですかね？」
「俺は家から飛び出すまで、親父に館でずっと勉強させられてたから町の方はあんまり分からないなぁ。ギレーヌはどうだ？」
「さあな。少なくとも、田舎の方はフィットア領と特に変わらない筈だ。すまんが、領都までは行ったことがないから、なんとも言えない」

あれから、俺達は世間話に花を咲かせていた。
俺も、訊きたいことが訊けて心の荷が降りたおかげで、素直に旅を

楽しむことが出来ていた。
しかし、肝心のフィリップだけがなんだか青ざめている。馬車酔いしたのだろうか？
「それにしても僕達、ミルボッツ領のことなんてなんも分からないのに良く行こうとしてましたよね。本当、フィリップ様が居て助かりましたよ」
そういうと、フィリップの顔が結構元気になった。
なんなのさ？

第四話「戦いの予兆」

「ほら、見えて来たぞ。あれが領都だ」
ほー、あれがミルボッツの領都か。ロアと同じく、中々に壮大な城壁が建っている。中にある幾つかのデカイ建物が見えるが、パット見だとあんまりロアと差を感じないな。
「久々に見ると、なんだか来る物があるなぁ…」
この頃になると、楽しそうなのはパウロだけになっていた。
アスラ王国は豊かな国で、辺り一帯に街道が張り巡らされてる程インフラが発達している国だ。
他の国で同じ距離を歩こうとすると、三倍位の時間が掛かる程らしい。
それ自体はとても素晴らしいことだが、一つだけ弊害があった。
それは、あのエリスが、初めての外だというのに詰まらなそうな表情をする位の問題だ。
そう…
(変わり映えしねえ……)
景色が全く変わらないのである。
他の土地なら、道行く途中で独特な町があったり、魔物の宝庫みたいな森があったり、異種族が住んでたりするのかも知れない。
しかし、そんな物はアスラ王国では邪魔なだけである。
文化が変わる程に他者との関わりも薄くないし、魔物の棲み家なんてのは開発の過程で少なくとも街道沿いからは駆逐され尽くしており、魔族は魔大陸に追い出されたし、他の種族も人族と交わって消えていった訳だ。シルフィとかが良い例だろう。
つまり、伊達に千年近くの歴史は無いって訳だ。
なので、何処を見ても畑、畑、畑、たまに村!と言った感じなのである。
特に、アスラ王国はもの凄く大きい平野を丸々領土とする国だ。つまり、中央部に行けば行くほど平野しかない訳で。
あれ以降魔物も全く来なかったし、そうなってくると本当に退屈

だ。
特にエリスはあまり揺れに強くないようで、グロッキーな顔をしている。
1日2日は平気そうだったが、無理な長期行軍が体に堪えたようだ。俺は乗り物酔いをしないタイプだと思ってたが、若干気分が悪い。
そう考えると、アスラ王国が整備されてることに感謝しなくちゃかもな。つまんないけど。

ーーー

「おっ、着いたぞ！ここが領都だ！」
「んぅ…」
後少しだと思ってたが、思ったより時間が掛かった。
景色が変わらないと気づけないけど、意外に馬車の足は早くないらしい。
「ほら、エリス、起きてください。着きましたよ」
「くぁ……んぇ？着いたの？」
なんだこの可愛い生き物。俺の嫁なんだぜ？信じられるか？
「そろそろですけどね。ほら、門がすぐそこですよ」
「ホントね！」
エリスの目に光が戻った。随分と寝起きの良いことで。
外から見た感じだと良く分からなかったが、中は結構面白いかも知れない。
俺もちょっとワクワクしてきた。
門は二重なのだが、二つ目は閉じられてて、その前に検問が敷かれている。どうしたのだろうか。
「そこの馬車、止まれ！」
「はぁ？」
フィリップの機嫌がちょっと悪くなった。
もしかして、職質なんかでキレるタイプなのだろうか。冷静沈着な

イメージがあったから、意外だ。
「この家紋が目に入らないのかい？」
水〇黄門かよ。
フィリップが言ってるのは、馬車に付いてる奴のことだろう。身分が一目で分かるように、馬車には紋章が付けられている。その他にも高そうな装飾なんかもされていて、いかにも貴族って感じの仕立てだ。
普通、貴族が乗る馬車を平民が止めてはいけないらしい。だからイラついているのだろう。
因みに、今乗ってる馬車にはボレアスの家紋が付いている。
フィリップ自身にはこれに乗る権利はないらしいが、サウロスの許可があればまた別らしい。
この辺りは良く分からないから要学習だ。ロアで見た『アスラ王国宮廷儀式』とやらが役に立つかも知れない。
「し、失礼しました…ですが、ピレモン様の指示でして、例え誰であっても通すなと…」
「ピレモンになんの権利があるんだい？ピレモンが失脚したことは伝わってないのか？」
「すみません…下っ端ですので、その辺りのことは…」
ピレモン？確か、フィリップに唐突に立場を追われた哀れな人だ。なんで名前が出てくるんだろうか。
「埒が開かないな…隊長か、それに準ずる者を連れてきてくれ」
「し、少々お待ちを…」
しかし下っ端の兵士も可哀想に。フィリップに凄まれてすっかりビビってしまっていた。
ピレモンとフィリップの板挟みになっているが、どちらに逆らうことも出来ない。やはり、間に挟まれる者が一番辛いのはどこの世界でも一緒なのかもな。

ーーー
「件の貴族とやらは此処か？」

「はい…」
　暫くして、下っ端兵士が別の兵士を連れて戻ってきた。若干装備が上等な辺り、多分彼が隊長だ。
「すいませんね、幾ら貴族様と言っても、領主殿からの指示ですので。一応、急用でしたらお申し付けください。ピレモン様にお取り次しますので」
　先程の下っ端君に比べて、随分とハッキリとした口調だ。多分、貴族を相手にするのも慣れているのだろう。
「領主が交代した。我々は、新領主一向だ。ピレモンにはもうなんの権限も無いので、通して頂こうか」
　フィリップがかなり強めの口調で言う。交渉術なのか、それとも怒ってるのだけなのかは分からない。
「成る程。ですが、そのような話は此方に伝わっておりませんな。王国政府の権限を持っている方が居られれば、また別なのですが…幾らボレアスの方でも、証人無しではお請け致しかねます」
「我々の話は事実だ。ピレモンが隠蔽しているだけだろう。証拠は無いが…流石に今から王都に戻るのは厳しいな…」
　これはフィリップが馬車の中で教えてくれたことだが、あまり時間を空けて、ピレモンに傭兵を雇われて抵抗したりされると、貴族が掌を返しかねないらしい。
　アスラ貴族は、儲からないことはやらないそうで、内戦を起こしたりしても分けるパイが減るだけ、ということを良く理解しているそうだ。
　その良くも悪くも保守的な思想が、アスラ王国が平和である理由だと言えるだろう。
　一週間程なら大した数は雇えないが、ここから王都に戻ると1ヶ月程の準備期間を与えてしまう。
　そうなると、フィリップの野望は潰えてしまうわけだ。
（ま、俺としちゃ、別にどっちでも良いんだけどね）
　暗闘に巻き込まれる可能性の高いアスラには居づらくなるかも知れないが、それなら別の国に行けば良いだけだ。

エリスを父親から引き剥がして連れ回すのも気が引けるから流れに従ってるが、どうしようも無くなれば逃げれば良い。
そんなことを一人ごちてる間にも、フィリップと隊長はあーでもない、こうでもないと言い合っていた。
そんなことやってても、結論なんか出ないだろうに。
「おーい、どうしたんだ？」
痺れを切らしたらしいパウロが、車窓からひょっこり顔を出してきた。確かに、もう１０分位経っているだろう。
すると、パウロの顔を見た隊長の顔が変わった。
「パ、パウロ様?!……お久しぶりです」
先程までの真面目な顔は何処へ行ったのやら。やけに下手に出る隊長。この感じだと、パウロの知り合いなんだろう。
「……お、久しぶりだな。なんか検問に引っ掛かってるみたいだけど、何が問題なんだ？」
「なんでも、ピレモン様が失脚なされて領主が交代されるとか……もしや?!」
「あ～、その『もしや』だ。俺が新しい領主になるらしい。顔パスで入れないか？」
「勿論ですとも！まさか、パウロ様が積極的に政治に関わりたがる筈も御座いませんからな。ピレモン様が失脚なされたというのも本当なのでしょう。どうぞ、お通り下さいませ」
パウロが顔を出した瞬間、隊長が打って変わって態度を変えた。男からの人気は凄いんだな、コイツ。
「早くお開けしろ！新領主殿のお通りだ！」
こうして俺達は、領都へと入ることが出来た。
ただただパウロの顔の広さに驚くばかりである。
ーーー
「しっかし、あんな奴居たっけなぁ…？」
馬車に戻ってきたパウロは、そんなことを呟いていた。俺の感心を返せよ。

俺達の入った領都は、やけに静かだった。パッと見はロアと変わらないが、それが却って不気味に思える。
「やっと入れたのね！……」
一瞬、ワクワクしたような表情になった顔のエリスが、直ぐに、むすっとした表情になる。
期待していた領都が、殆んどロアと変わらなかったからだろう。
ん？エリスがなにやらギレーヌに目配せしている。
「ねえ、ルーデウス…何か変な気配を感じるわ。注意して」
「お嬢様の言う通りだ。念のため、私は馬車の上で待機しておく」
どうやら、景色のことではなかったらしい。
しかし、変な気配か……何か、ピレモンとやらが企んでいるのかもな。
俺も警戒しておこう。念のため、魔力を手に込めておく。
しかし、そんな警戒とは裏腹に、俺達はいよいよ領主館まで着いてしまった。
「どうする？」
「あまり狭い空間で戦いたくはないが…入らない訳にも行かないしなぁ…」
「一応、剣を使える状態にしておいてください」
ここで立ち往生してる訳にも行かないので、軽くパウロたちとフォーメーションだけは相談した。
いよいよ、領主館だ。

第五話「領主館の戦い」

中に入っても、相変わらず人の気配はしない。
「僕が土魔術でドアなどを塞ぎます。父様に前衛、ギレーヌに後衛、エリスに中衛とフィリップ様の護衛を頼みます」

領主館に入っても、人っ子一人も居ないのは明らかに異常だ。まず間違い無く、何らかの罠が仕掛けられてると思って良い。
そう考え、本格的に戦闘準備に入る。
パウロが知らなかった隊長も、グルだったのだろう。
恐らく、パウロ以外通すな、みたいな指示をされてたからあんなに態度が急変したんだろうな。
無論、こんなことを考えつつも警戒は絶やさない。
ピレモンの狙いはなんだろうか。継承権保持者が居なくなれば、自分が領主に居座れると思ってるのかも知れない。
その考えは間違っちゃ居ない。この世界はとにかく血が重い。俺が領主を押し付けられたのも、ゼニスとパウロの血筋がハッキリしてるのが大きいからな。
これで、ゼニスが平民だったりしてたら話は別だっただろう。
つまり、アイシャよりノルンの方が優先ってことだ。

「来るぞ！」
ドアがガン！っと大きな音を立てて鳴った。遅れて、三つほどのドアから同じ音がする。
しかし、俺の土魔術が原因でドアを開けれないようだ。数十秒もすれば蹴破られるかも知れないが、それだけの時間があれば充分だ。
「ギレーヌ」
そういって、俺は左手前のドアを指す。同様に、パウロには右手前のドアを、エリスには奥二つのドアの方を指した。
これは、各自配置に付けと言う合図だ。
そしたら、あえて大声で叫ぶ。

「ドアを開けたら、水魔術を僕が打ち込んで牽制します！突破口を作ったら、全員で突っ込んでください！」
勿論これは真っ赤な嘘だ。
俺が無詠唱で魔術を使えることを知ったフィリップに提案された作戦だ。
殆んど、無詠唱の魔術師が居ないことを利用して、嘘っぱちの詠唱をするのだ。
敵は詠唱を終わるタイミングを警戒してるだろうから、途中で切って別の魔術を打ち込んでやれば良い。
因みに、今回使うのはファイアーボールだ。人間ってのは、根源的に炎を恐れるからな。
火事になるかも知れないが、そこは俺も水聖級魔術師だ。その位なら簡単に鎮火できる。

「汝の求める所に大いなる水の加護あらん、清涼なる！」
訳の分からないところで詠唱ストップだ。両手を広げて、横二つのドアにかなり魔力を込めたファイアーボールを打ち込む。
ファイアーボールはドアを焼き切り、中へと突っ込んで行った。ライトセーバー見たいな感じだ。
中から叫び声が上がる。
それを聞いた俺は、急いで土魔術のバリケードを消した。
そこに、ギレーヌとパウロが突撃していく。
前の方のドアの奴等は異変に気づいたようで、ガンガンとドアを蹴破ろうとしている。
これは、そろそろダメそうだな。
しかし、何かが可笑しいことに気づいてても魔術の種類にまでは気づいてないらしい。
ドアの前に集まって突き破ろうとしている。良いカモだ。
普段、俺は人を殺すことに本能的な忌避感がある。殺すことが生理的に無理とか、軽蔑するとかそういう訳じゃないが、体を動かすのに時間が掛かってしまうのだ。

しかし、今日はそんなことは無かった。ドアにファイアーボールを打ち込めば、恐らく何人かは死ぬだろう。しかし、直接人に当てる訳ではない、という意識が何故だか俺から抵抗感を消していた。

またファイアーボールを打ち込む。ドアが焼き切れ、中から叫び声が聞こえる。そこにエリスが突っ込んで行き、生き残りを殺した。逆側には、俺が魔術を打ち込み続けた。

同時に襲い掛かって殺す作戦も、同時にされなきゃなんてことはない。

俺達は無事、襲撃を乗り切ったのだった。

「おい、ルディ！燃えてるぞ!!」

「ルーデウス！不味いんじゃないの?!」

「おい、こっちも火事だ！」

思った以上に火力が強くて、部屋の中がかなり黒焦げになっていた。

ま、まあ、敵に抵抗させないって意味じゃ大正解だな。うん。

ーーー

あの後、俺達は土魔術を使う→中に傭兵が居ないことを確認する→中の確認　というローテーションを組んで進んで居た。因みに、二階に上がるところでもう一度襲撃があったが、此方も難なく撃破した。それ以降は全く何もない。

二回目の襲撃では、ギレーヌが一人捕虜を捕らえたようだ。そいつに尋問をした結果、「ピレモンに配置の指示をされ、侵入者に対処しろと言われていただけ」ということをゲロらせることに成功した。

ギレーヌの尋問は、ハッキリ言ってメチャクチャ怖かった。ちょっと漏らしそうになったのは、俺だけの秘密だ。

しかしまあ、これでピレモンは完全な黒だろう。

後はピレモンを引っ捕らえるだけだ。

ーーー

ピレモンは、パウロに良く似た男だった。二階の執務室で悠然と佇む姿は中々に様になっている。パウロの姿を見て一瞬、目付きが鋭くなったが直ぐに元に戻った。切り札を持ってるのかも知れない。俺は改めて警戒する。
「ああ、新領主殿！お早いお着きですね！」
ピレモンはやけに大げさで、蔑むような口振りでそう言った。
「なあ、お前…立場分かってんのか？」
パウロがそう返す。切り札も何も無ければ、ピレモンは新領主殺害未遂の容疑で処刑されるだけだ。
襲撃されたのは事実だし、第一王子派は確実に処刑してくれるだろう。
「さて、なんのことでしょうか？」
「……」
しかし、そんな事実を知ってか知らずかピレモンは余裕な態度を崩さなかった。
これは、切り札が居ると見て間違いないだろう。
そう思った矢先だった。
「警戒しなくても結構ですよ。なにせ、私は新領主殿に職務引き継ぎをするために残っていただけですからね」
まるで此方の考えを見透かしたかのような返答だ。
「ああ？」
「ですから、職務引き継ぎの為に残っていただけですよ。いきなり私が出ていっても、困るだけでしょう。ですから、新領主殿が来るまで私が代理で仕事を行って居たのですよ」
「お前…襲撃してきたのを、忘れたとは言わせねえぞ」
「襲撃……はて、なんのことですかな？」
「しらばっくれるな！検問で俺が来たことは伝わってる筈だぞ！」
パウロとピレモンの口論が続く。
怒っていても咄嗟にこういう反論が出来る辺り、パウロには結構貴族としての素養もあるのかもだ。
「恐らく、偶然、新領主殿の顔を知っていたのでしょう。申し訳ありま

せんが、私は新領主殿が誰なのか存じ上げ無かったのでね」
「じゃあ、屋敷での襲撃はなんだったんだ！」
「ああ。あれならば、領主不在と見て不届き者が来たら困るので、急いで臨時の護衛を用意したのですよ。連絡にミスがあったのでしょうね」
「はあ？職務怠慢じゃないか？」
「私はもう領主ではないのでね！新領主殿。これは有志としての活動ですよ。それに、私も如何せん記憶が怪しくて、新領主殿の顔どころか、名前すら覚えて居なかったのです。申し訳無かったですね。ですが、フィリップ殿の顔は良く覚えているので貴方方が本物だと今分かりましたよ。どうぞ、領主の座はお譲り致します」
　すげえな、コイツ。今の会話だけで、五つ近くの皮肉を込めていやがる。
『お前らが突然領主交代とか言い出したけど、そんなこと出来る訳ないじゃん！現実見えてるか？てか、領主から引きずり落としたお前らが職務責任ってなんなの？お笑い？１２歳で家を出てったお前が今更何しに来たんだ？もう顔も覚えてねえよ。でも、フィリップ。俺を引きずり落としたお前の顔は良く覚えてるし、お前らがフィリップに担ぎ上げられた御輿だってこともよーく分かってるからな』
　ピレモンの話を要約すればこうだ。
　自己弁護しながら此処まで相手をなじれるのは大したもんだ。貴族として暗闘する才能はピカ一だったのだろう。
「お前の指示で襲ったってのは分かってるんだぞ！」
「不幸な行き違いがあったか、それとも新領主殿を襲ってしまったことを恐れて、私の名前を出しているだけでしょう」
「……」
　パウロもピレモンには弁舌で勝てないと察したらしい。
　黙りこくってしまう。
　実際、ピレモンはハッキリ「パウロを襲え」と指示した訳ではなく、どうとでも取れる曖昧なことを言って誘導したのだろう。そういう自信を感じられる口振りだった。

「ピレモン殿。パウロ殿が来たからには、もう貴方はお役御免だ。ご苦労だった。さっさと出ていって貰おうか」
そんな様子を見てフィリップが口を挟む。確かに、フィリップの言う通りだ。
これを受けてピレモンは……
「そうですな。では、邪魔者はおさらばさせて頂きます」
やけにアッサリと許諾した。ドアを開け放して
そして、ドアを開け放したまま歩いて行ってしまう。
パウロは怒りに満ちた目で、それ以外の連中は味わい深い顔でピレモンを見送った。
そして、階段を降りる辺りでピレモンがなにかを投げた。あれは…なんだ？
「あれは……鍵だな。なんの為の物なんだ？」
「奥の扉が開かないみたいだね」
ガチャガチャとドアをやっていたフィリップがギレーヌに返答する。ちょっと迂闊じゃないか？
「多分、奥の扉用の鍵だろう。取ってくる」
そういって、ギレーヌがダッシュする。
はやっ。結構長い廊下なのに、一瞬で戻ってきた。
「開けるぞ。一応、警戒しておいてくれ」

ドアをガチャリ、とギレーヌが開ける。

…そこに居たのは、決して襲撃者などではなかった。
四十人位だろうか。手錠と足に固定具を付けられ、床に人間が転がっている。
それだけなら、まだなんでも無かった。
しかし、辺りには血の臭いが立ち込めている。良く見ると……その内の半数近くの人間は、喉にナイフが刺されていた。
「ぱ、パウロ様……」
入ってきた俺達に気が付いたようで、一人がパウロに声を掛ける。

隊長とやらに対する物と違って、パウロもハッキリと怒りが見て取れる反応を返す。
「どうか、お助けください…」
そう言いながら、数人の人間がパウロの方に這っていく。女は居ない。全員、男だ。
「ピレモンの奴……何を考えていやがる?」
どうやら、一筋縄で領主交代とはいかないらしい。

第六話「砂上の楼閣」

「おい、どうなってんだ…こりゃあ…」
「パウロ様…大きくなられて……」
「…ジェスター、か。久し振りだな…。取りあえず、拘束を解くから何があったか話してくれるか？」
　死屍累々とした部屋の中で、半数程度の生存者の中で、特に年を取ったおじいさんとパウロが話していた。
　おじいさんの名前はジェスターと言うらしい。エリスにとってのエドナかアルフォンスのような人なのだろう。
　パウロの目の色にも、それなりに暖かみが感じられる。少なくとも、血を別けた弟に対する物よりも余程に。
「ありがとうございます。ですが、私以外の拘束を解くのは止めた方が宜しいかも知れませぬ…」
「どういうことだ？」
「それについては、今から説明致します……とと、すいませんな。如何せん、長時間縛られていた物で…」
　ジェスターは腰を痛めたようで、中々話を切り出せないでいる。その間に、他の文官と思わしき生存者が喚きだした。
「あの！早く解放して頂けませんか！」
「パウロ様！助けてください！」
「ええい、うるさいぞ！少し待っておれ！」
　ジェスターと文官たちが喧嘩をしだす。これじゃあ、話もロクに聞けやしない。
　今度は、パウロが痺れを切らしたようだ。
「分かった、分かった。今、解放してやるから、少し静かにしていてくれないか？」
「パウロ様！」
　ジェスターが悲痛な声を出す。自分の進言が無視されて驚いたって様子だ。
「ああ……いや、コイツらはこう見えても全員強いからな。文官に奇

襲された位じゃ、なんともならない。だから大丈夫だ」
パウロはやりにくそうにしている。なんていうか、パウロがジェスターに向けている感情は、俺達に対する物とはちょっと違うのだ。
無下にする程に嫌っては居らず、しかし無条件に優先するほど好きって訳でもない。そんな感じがするのだ。
「そう、ですか……では、そのようになさってくださいませ……」
ジェスターはそれに気づいたのか、ちょっぴり落ち込んでるように見えた。
が、パウロはあまり気にしていないでエリスやギレーヌに拘束を解かせた。ジェスターとパウロの関係は分からないが、ジェスターの様子を見てるとちょっぴり物悲しい物がある。
文官達は解放されたら静かにしていた。ジェスターの懸念は杞憂だったのだろうか？
しかし、そのこと自体はそこまで気にしていないようで、ジェスターは直ぐに話し出した。
「あれは、数日前のことでした…」

ーーー
ジェスターはその日、普通に仕事をしていた。
暫く書類と格闘していると、数日前に王都に出向していたピレモンが帰ってきて、呼び出された。
何用だと思ったら、自分が失脚したとピレモンが伝えてきた。そして、「パウロと自分、どっちに着くか」ということを聞いてきたという。
ジェスターは直ぐに返事を返すことが出来ず、お茶を濁して立ち去ろうとしたが、ピレモンに強く引き留められた。
なので、パウロが来たら鞍替えすれば良いと考えて、一旦「ピレモンに着く」と答えた。
ピレモンは満足そうに頷き、それで話は終わりだった。
その後は、特に何かパウロ失脚の為の片棒を担がされるのでもなく、普通に仕事をしていた。

そしたら、唐突に拘束され、良く分からないままに半数位の人間が殺された。

ーーー

「その後暫くして、パウロ様がいらっしゃったのです」

「ふむ…」

と、言った感じのことを長々と語ってくれた。正直、感情や主観が多分に混ざっているのではないか？と疑うような語り口だった。

他の文官達が特に何も言ってこない辺り、そんなに大きく外れた内容ではないのだろうが。

てか、ピレモンあいつ、やっぱりパウロが新領主だって分かってたんじゃないか。

「私は、ピレモンに着くと言いました。恐らく、殺されてしまったのはパウロ様に着くと言った者でしょう。ですから、生き残っている者達は裏切り者の可能性が高いのです」

「なるほどな…」

話は分かった。そう考えると、コイツらは信用出来ないのだろう。早く解雇して、早く新しい人材を雇えば良いだろう。

そう考えたときだった。

「お待ちを！私はパウロ様に着くと申し上げました！」

一人の文官が声を上げたのは。

それを皮切りに、文官がわめき出す。

しかし、その主張は千差万別だった。

「パウロに着くと言った」と、主張する者。

「ピレモンに着くと取りあえず言った」と、主張する者。

「領主の立場に居る者に付き従うだけですと言った」と、主張する者。

パウロの味方だと明言する者も居れば、中立だったと言う者も居るし、コウモリをやっていたと堂々と言う者さえ居る。本当のことかは分からないが、これが本当にピレモンの部下なのか？

あまり詳しいことは分からないが、ここで団結してジェスターを非難する方が、残りの文官が残留する可能性があるように思える。

いや、逆に統一性を出さないことでピレモンの思惑を分かりにくく

する作戦か？
正直、幾らでも可能性が考えられる。喚いていることが本当かも知れないし、嘘かも知れない。
ただ、それを裏打ちする証拠もない訳で。
ジェスターを信じるにしても、ジェスターの言ってることは推測だ。状況証拠だけではどうしようもない。
「…取りあえず、いきなり全員解雇とはいかないんじゃないかな？一旦、試用してみて様子を見てみよう」
フィリップも似たような結論に落ち着いたようで、そうすることになった。
――――

問題が噴出するのは早かった。
問題は二つあった。
一つ目は、まず絶対数が足らないということ。
業務を行う人間が足りないという意味ではない。
元々、回ってきた業務を裁可・執行する立場に居た文官は、６０人ほど居たらしい。
下で色々とする立場の文官は特に減っていなかったのだが、最終的な決定権を持つ立場の物が消えてしまったせいで、連絡が混錯しているのだ。
パウロのところに持っていったり、フィリップのところに持っていったり、はたまた関係のない上司の元に持ってったり……
ノトス家の指揮系統が丸々崩壊したことで、大混乱となって仕事が遅々として進まなくなっていた。
因みにだが、あのとき転がされていた四十人ほど以外に居た筈の二十人の所在は全く分からないらしい。不気味だ。
話を戻そう。この問題一つだけなら時間と共に解決出来たのだ。
そこで、二つ目の問題が出てくる。
それは……

「おい、お前！お前はピレモンに着いていただろう！お前が部屋から出てくるとき、様子が可笑しかったのを見たぞ！」
「なんだと！貴様こそ裏切っているのだろう！不和の種を持ち込みやがって！」
「ちょ、落ち着いて落ち着いて！」
文官同士が、疑心暗鬼になっていることだ。
中には、口論が発展して殴り合いの喧嘩になっていたことさえある。
因みにそのときはエリスとおうちデート中だったのだが、ぶちギレたエリスにボコボコにされてた。
その後、ちょっとだけ文官同士の喧嘩は落ち着いていた。エリスは偉大だった。
しかし、結局根本的な解決にはならない。やはり、一度仲が拗れると修復は容易ではないのだろう。
死人が出た後だと特に。
中世の官僚組織なんてのは、基本的に馴れ合いで成り立っていると言っても過言ではない。
このファンタジーな世界も、例に漏れずだ。
文官同士の関係が破綻した、というのは業務の遂行に予想以上の障害をもたらしていた。
元々は、文官の裏切りを見極める為に用意してた時間が、却って裏切り者の隠れ蓑になってしまったのだ。
ーーー
「てな訳で、第一回、グレイラット家当主会議を始めます。パチパチ～」
「あの、私は当主ではないんだけど…」
「ルディもな」
細けえこたあ良いんだよ！
「ノリが悪いですね。では、本題に入りましょう。文官たちの問題をどうするのか、ということです」
「新しく雇えば良いんじゃないか？」

「それはもうやったさ。だけどね…」
フィリップは、ジェスターを連れて領都に新しい文官を探しに行ったそうだ。
条件は、身分がハッキリとしていて実務能力のある者。
その条件で探したところ、応募者が二十人居たらしい。
丁度、消えた文官の数だね。お察しの良い方ならもう分かっただろう。
そう。ジェスター曰く、面接に来た文官というのは元々働いていた奴等らしい。
明らかに怪しいし、実際に面接をしたらピレモンの味方だと匂わせることを言ったそうだ。
「これで、在野の文官は信じられなくなってしまった訳だ。そもそも、あの条件に合致するだけならもっと数は居ても可笑しくなかった。つまり、どこかでピレモンの息が掛かった者以外の応募は握り潰されてると思って間違いないだろう」
「そうか…」
それっきりパウロは黙ってしまう。特に思いつくことがないらしい。俺は一応、何個か候補を思い付いたんだが、パウロに伝える手段がない。
どうしたもんかと悩んでいると…
「ああ、ルーデウス。君とパウロで何やら役割分担をしているようだけど、そもそもエリスを抱いた時点で貴族としての能力は察してるからね。気になることがあれば言ってくれて構わない」
「えっ！」
フィリップが衝撃的なことを言ってきた。気づかれてたのかよ！割と上手くやってた自信があったんだけどな…
「ど、どこで気づいたんですか？」
「確信を持ったのは、今だね」
チクショウ、ここまで鮮やかな鎌かけをされるとは…
あまりに綺麗な形で、我ながらショックだ。
「で、何か案があるんじゃないのかい？」

こうなったら面子もクソも知ったもんか。めんどくさい仕事は全部フィリップに任せてやる。良いだろう、どんなバカな案でも言ってやろうじゃないか！
「あの、ボレアス家の方から幾らかお借りするのはダメなんでしょうか？」
「それはダメだね。そうなると、周囲からノトスがボレアスの傀儡になったと思われてしまう。今でもギリギリの綱渡りだけど、流石にそこまでやると完全にアウトだ」
「何がダメなんでしょうか？別に、本当に傀儡になるわけでもないので問題がない気が…」
「ボレアスとノトスがくっつくと強力になりすぎるんだ。王家と拮抗する勢力になりかねない。そうなると、ノトスの方がガタガタな内に、全力で中央が妨害してくる可能性が高いんだ」
完全に論破されてしまった。だが、まだ案はある！目指せ、俺の内政チート！
「では、第一王子派に頼むのはどうでしょう？これなら、中央の貴族も味方になるのではないかと思うのですが」
「それもダメだね。王が決まった後か、それとも勝利が決定的になった瞬間に徹底的な中抜きが始まる。地方領主と中央貴族ってのは、基本的に相容れないんだ」
「じゃ、じゃあ、エウロスやゼピュロスを頼るのは…」
「彼らもダメだ。今は第二王子派を名乗ってるが、それは対立構造を演出するための物に過ぎない。実質的には、第一王子派だ」
フィリップに口論で勝てる訳が無かったですね。分かってたよ、チクショウ。
というか、こういうのは主人公の提案した案が「これだ！」って感じになるもんじゃないのか。こういうところはテンプレじゃないんだな。
俺は貴族になるって聞いて、少しばかし内政チートに期待していたのだが、この感じだと俺の浅知恵くらい、フィリップなら直ぐに思い付きそうだ。

餅は餅屋。貴族は貴族だ。
あれ、じゃあ、無職の俺って一体…
「他に何か案はないかい？」
「いえ、何も…」
フィリップと話していて、俺は自信を失っていた。
生前では政治のレスバをしたこともあったが、結局は誰かの意見の焼き増しをしてるに過ぎない、ということに気づいてしまったのだ。
それと同時に、俺の無職だった時間がとんでもなく虚無な物に感じられてしまう。
「じゃあ、オレは冒険者だった時代のツテを当たってみるよ。そいつらなら、信用出来るしな」
「文官が冒険者に従うのかい？」
「直接会わせなきゃ良いだけだ。適当に偉い奴ってことにしておけば、特に問題ないだろ」
「じゃあ、それは採用にしとこうか」
それに、心の底でコッソリ頭脳では勝ってると思ってたパウロにも、もっと良い案を出されてしまった。
ますます、俺は落ち込んでしまう。
そんな俺に、フィリップが声を掛けてきた。
「なに、そんなに落ち込むことはないさ。君はまだ子供だ。これから、経験を積んでいけば良い」
そうだ。俺は年だけ食ってても、経験では彼等には勝てない。
なら、これから経験を積んでけば良いのだ。そうフィリップの言葉で気づかされた。
「確かにそうですね…では、明日から時間を取ってくれないでしょうか」
フィリップに対してなら、圧倒的な格の違いを思い知ったお陰で、素直に師事を仰ぐことが出来た。
「言われずとも、そうするつもりだったよ」
フィリップは快諾してくれた。忙しいだろうに、俺の将来性に期待してくれてるってことだ。思わず胸が熱くなる。

「あ、ありがとうご…」
「じゃ、これが君の分だね。明日から宜しく頼むよ」
「えっ……」
目の前に、ドンと置かれた紙の束。
ニコニコしながらフィリップが言ってくる。
エリスと言い、ノトスと言い、面倒な仕事を押し付けるのが上手すぎないか？
まあ、なんだ。
フィリップに勝つことは諦めることにしました。

第七話「助っ人、ギース」

あれから二週間が経った。
ゼニスとリーリャは、まだ来ない。ノルンとアイシャはまだ小さいから、ゆっくり来ているのだろう。
「くあぁ～……」
「ルーデウス、お疲れ様」
疲れきったところに、エリスがお茶を汲んでくれる。
いやあ、気が効く嫁さんが居ると良いね。
俺はあれから、社畜のような生活を送っていた。
朝起きたらまず二時間の鍛練。そしてその後は書類と格闘。それが悠に１４時間だ。
つまり、１６時間労働。
８時間時間が空いてても、ニートの頃とは勝手が違う。とてもじゃないが、夜更かし出来る程の体力は残ってなかった。
そうなってくると、エリスに構ってやれる時間も相当少なくなってしまう。
パウロとフィリップに相当無理を言って、三日に一度、１２時間程の空き時間を作って色々やってるが、正直、新婚とは思い難い生活だ。
エリスと一緒に書類仕事をしてみようかとも思ったが、エリスは書類特有の整備文という奴が、良く分からないみたいだった。
「なんで普通に書かないのよ!!」とは、エリスの言だ。理由は俺も全く分からない。
まあ、そんな訳でエリスは書類仕事が出来ない。
そこで、俺が思い付いたのが…
メイドさん！
ではなく、エリスを秘書にすることだった。
始めは、俺もエリスにメイドさんの格好をさせようと思ってたし、エリスも割とノリノリでやっていた。美少女の嫁がメイドの格好で奉仕してくれる。
生前の俺ならそれだけで三発は行けたし、今世の俺もそれで三発中

に出した。
おっと、下世話な話になってしまった。童貞諸君には刺激は強かっただろう。
では、何故取り止めになってしまったのか。
ある日、フィリップが仕事を渡しに来たときに、エリスのメイド姿を見られたのだ。
獣人では分かり合えた仲間だ。フィリップもきっと、メイドさんエリスの素晴らしさを分かってくれると思ったのだが…
「ほう、メイドの格好……」
これだけなら、話に乗ってきたエロオヤジの言動に思えないでも無かったが、眼光がヤバかった。
何の戦闘力もない筈のフィリップに対して、本気で腰を抜かしてしまった程だ。
何をされるのか分かったもんじゃないので、平謝りして辞めることになった。
そしたら、メイドではなく秘書にしてほしい、と言われたのだ。差はいまいち分からないが、貴族的な価値観では違うらしい。
そういうわけで、不本意ながら俺は、エリスのメイドさん化計画を諦めることになってしまったのだ。
仕返しに、フィリップに回す仕事を遅くしてやったのだが、そしたら俺に回る仕事も遅くなって、デスマーチをする羽目になってしまった。
文官不足を如実に表すエピソードである。
だが、これはもうじき解決されるだろう。
フィリップはアルフォンスさんを持ってくるらしいし、ゼニスもリーリャも書類仕事は出来そうだ。
それに、今日の昼飯のときに、パウロが嬉しそうに「(助っ人が)やっと来る！」と叫んでいた。
目の下にはかなり濃い隈が出来ていて、ちょっと様子が可笑しかったので、もしかすると想像上の助っ人かも知れない、なんて考えたりもしたが、ちゃんと実在する人間のようだ。

パウロには申し訳ないことをした。でも、もう少しの辛抱だぞ！
パウロ曰く、その助っ人は冒険者でお調子者らしい。
第一印象は大切だ。
何か挨拶の仕方を考えとかないとな…

ーーー
助っ人が来た。
急ぎで来たらしく、冒険者らしい格好も合わさって、かなり汚い様相をしていた。
「ようこそ、人生の終着点へ」
始めから真実を伝えてやる。パウロから、なんて話を聞いてたのかは知らないが、この現実を知っていたら、わざわざ手伝いになんか来ない筈だ。
男は面食らったような顔で此方を見ていた。
揉み上げが長く、サルのような顔をした男だ。
パウロ曰く、それは種族的な物らしい。
彼は魔族なのだ。
「どうした？新入り。何か気になることでもあるのか？」
「い、いや、なんていうか」
男は狼狽した顔で、俺を見ていた。
ドス黒い隈。ボサボサの髪。死んだ目。
何も可笑しいところはない筈だ。
「…予想以上に、老けてるんだな？」
「おい新入り。口の聞き方に気を付けろ。俺はここにきてお前より長い。つまり老けてて当然だし、先輩だ。敬えよ」
「お、おう」
「返事はハイだろうが」
「はい」
なんで俺は初対面相手にこんな偉そうにしているのだろうか。
疲れて居るからだ。
「残念ながら休みは無い、適当な場所に座って、書類を手伝ってくれ」

「は、はい……」
「で、新入り。お前は業務内容を把握しているのか？」
ぞんざいな口調で訊いてみる。
新入りは年下に生意気な口を聞かれても怒ったりせず、俺の問いに答えてくれた。
「や、ちゃんと聞いてるよ」
「ほう、会計か。編纂かね？そんなことを想像してるなら覚悟が足りてないぞ」
「いや、全体的に手伝いをして欲しいって言われたんだよ」
「そうか」
パウロも上手いこと言うもんだな。きっと、軽い雑用を想像していたのだろう。
「パウロに完全に騙されたな」
「親父のことを呼び捨てにするのか？」
「聞いてりゃ分かるだろ。ロールプレイングだよ」
「なんだそりゃ」
「普段はキチンと、父様って呼んでいますよ」
男の俺を見る目が、気味の悪い物を見る目に変わった。
いや、最初から割と似たようなもんだったけど。
「で、新入り、名前は？」
「ギースだ」
「仕事は出来るか？」
「冒険者だけど、一応、それなりに」
まあ、事前にパウロから聞いてたから知ってるんだけどな。やりたかっただけだ。
そのときは大佐かよ！ってツッコミを心の中で入れてた。
「俺はルーデウスだ。お前より年下だが、ここでは先輩だ」
「へいへい」
ギースはそこら辺をウロウロして、何かに思い至ったようだ。
「っていうか、そもそも先輩である以前に貴族なんじゃねえのか？」
「確かに」

「なんだ先輩、大概変な野郎だな」
「ハッ、ちげえねえ」
コイツも大概、失礼な野郎だ。
まあ、平民に敬語を求める貴族なんて少ないんだけどな。
「おい新入り」
「なんだ先輩」
「早速、ここの書類をやってくれよ」
「あいよ」
ギースだって少しは休みたいだろうに、特に嫌な顔もせずに手伝ってくれた。パウロの手伝いに来る辺り、面倒見が良いタイプなのだろう。
「あ、どうもありがとうございます」
「…敬語は気持ち悪いから辞めてくれないか？」
「いえ、何日もデスマーチでしたからね。やっと人として復活出来ると思うと…」
「まあ、なんだ。大抵のことは出来るから、任せてくれや」
こうして、ギースが仲間になった。
暫く書類仕事を黙々とこなした後。
「ねえ、いつまで黙ってれば良いのよ！」
『雰囲気が壊れるから』って静かさせてたのに、完全に忘れていたエリスに一発良いのを入れられた。
改めて新入り。
ようこそ、人生の終着点へ。

第八話「一息」

この前、ギースはエリスに何発殴られるかなぁ、なんて考えていた俺。

1が大穴、2が穴、3が対抗で4が本命かなぁ、なんて勝手に思っていたのだが、なんと、彼は一発も殴られなかったのだ。

驚くべきことに、ギースは一発も殴られることなくエリスの懐に潜りこんだのだ。パウロと言い、ギースと言い、天性のコミュ力には感服せざるを得ない。いや、そうとでも思わないと、俺の苦労が偲ばれない……

ギースは、聞き上手だとでも言うのだろうか。相手の話を少し聞いただけで、相手がどんな反応を求めてるのかを、的確に感じとる能力に長けていた。

俺のダル絡みにノリ良く返してきたところからも、それは分かる。空気が読める男なのだ。

これはエリスに対しても発揮された。

剣の腕前を褒め、勉強が出来れば褒め、たまには俺のことを褒め、テーブルマナーも……とにかく、褒めに褒めて褒めまくっていた。

エリスは、そこまで難しく物事を考えるタイプじゃない。相手が、嫌味を感じさせない賛辞を送ってくれれば素直に……喜ぶタイプ……あれ？

俺は普通に褒めても、割と酷い扱いを受けていた気がする。

…ツンデレだよな？うん。そうだと言ってよ、バァニー……

やめだやめ。もうエリスは恋人なのだ。それが何よりじゃないか。

他のことを考えよう。

このギースの能力は、文官達にも有効だった。

見下される程無能でもなく、かと言って嫉妬を覚えるほど有能でもない…

『あ、見所があるな』と、そう思われる位の能力をアピールして見せた

のだ。
加えて、文官達と言うのは、おしなべて自尊心が高い。そしてギースは腰が低い。この二つが、自らがエリートだという自認がある文官達の態度を軟化させたのだ。
自分よりは劣るが、かといって全くの無能でもない…そんな奴が、自分のことを慕ってくるのだ。
嫌な気分がする筈もない。
こうして、ギースは文官達に気に入られた。
そして、その立場を利用して伝書鳩をやり始めた。
ギースというワンクッションを挟むことで、互いのヘイトを軽減しよう、という試みだった。
これもまた、成功を収めたと言っておこう。
かくして、ギースが入ったことで、統治機構はようやく正常に動き出した。
いやぁ、もう新入りには足を向けて寝られないね。

ーーー

ある日の昼下がり。労働時間が１２時間ほどまで減って、かなり余裕が出来てきた頃。
「おう、新入り。また連絡か？大変だな」
「んにゃ、先輩。違うよ。フィリップ様に伝えたいことがあるんだ。丁度良い、ちょっと付き合ってくれや」
「伝えたいこと？」
一体どうしたんだろうか。ギースは基本的に、重要な物事はパウロの方に報告する。
理由は分からないが、まあ、彼なりの何かがあるのだろう。
だから、わざわざ俺を連れてフィリップのところに行く、なんて行動には僅かに違和感を感じてしまう。
「いやぁ、先輩には何も知らない状態で来て欲しいんだよ」
まあ、断る理由もないし着いて行くが。
「それにしても、一体どうしたんだ？せめて、俺がついてくことの意味

くらい教えてくれよ」
「気にしなさんな。ほら、あれだ。証人って奴だよ。俺のやることに対するさ」
「ほーん」
　妙に気になる言い方である。
　まだまだ問い質したいが、フィリップの部屋に着いてしまった。
　ギースがノックを二回する。便所のノックじゃねえか。
「どうぞ」
　中からフィリップの声がした。礼儀にはうるさそうなタイプだと思ってたので意外だ。
「失礼します……それで、用意しましたよ。例のヤツ」
「仕事が早いね。早速、見せて貰おうか」
　おいおいおい、またなんか、変な陰謀に巻き込まれるのか？
「あの～、僕、子供なんで……失礼します！」
「先輩、そんなこと言わずにさぁ」
　しかしギースに行く手を阻まれてしまった！
　ギースの実力は未知数だ。しかし、パウロの仲間ならパウロ程には強いと思った方が良いだろう。
　くっ、かくなる上は！
「……」
「なぁ、先輩…それ、意味あるのか？」
　日光の三猿だ。俺は何も聞いてない。見てもない。言わない！
　我ながら完璧な手だ。ギースの呆れるような声も聞こえない。
「ま、耳が聞こえてりゃ問題ない」
「えっ！」
「聞こえてんじゃねえか」
　またもやギースに嵌められてしまった。ギース、恐るべし。
「ま、耳塞ぐなりなんなりしててくれや……
　フィリップ様、此方を。直ぐに俺に絆された奴等をリストアップしときました。コイツらは、白でしょう」
（ん？白？）

思ってた話とは、かなり色の違う話であった。
もっと、悪代官と銭ゲバ商人の会話みたいなのを想像していたのだが。
「ですよね？先輩。ほら」
そう言ってギースがリストを見せてきた。
書いてあるのは……確かに、俺がギースのお手前拝見しているときに、「ちょろ！」と思っていた連中である。
「ルーデウスの反応を見るに…本当みたいだね。ありがとう。これで相当、間者探しが楽になる」
「あの…一体どういう？」
フィリップが、俺の理解の範疇から外れたことをするのは、良くあることだ。慣れているから、エリスのときほどの取り乱しはしなかった。
「僕はね、ピレモンの間者は妨害工作をしてくると踏んでいたんだ。そして、タイミング良く文官間での不和が広まった。これが工作で間違いない、と思った矢先に、ギース君が来たのさ。そして、次々に文官の不和を解消していった。直ぐに絆されたと言うことは、妨害工作をしていなかったということだろう？だから、リスト化を頼んでいたんだよ」
「なるほど…」
ギースが凄まじい有能さである。
直接は言わないけど……心の中で、先輩と呼ぶことにしよう。うん。
てか、最近当て馬の役割多くない？
ーーー
ゼニスとリーリャは、妹たちを連れてその二日後に着いた。
ゆっくりと来たからか、そこまで疲れの色も見えない。
「お兄ちゃん！」
「……」
アイシャとノルンは、五～六歳と言ったところだ。アイシャの方は認識してくれたが、ノルンには無視されてしまった。

兄として認識していないのかも知れない。地味にショックだ。
いや、アイシャの方が異常なのか？どっちなんだろうか。
「ほら、お兄ちゃんですよ～」
「お母さんからいつも言われて、お兄ちゃんに仕える為に頑張って来ました！今日から宜しくお願いします！」
「赤ちゃん扱いしないで！」
おや、思った以上に両方大人だった。見た目は小さいが、案外ハッキリと喋る。舌足らずと言った口調ではない。
しかし、一番可愛くて洗脳しやすい……もとい、尊敬されやすい時期に会えなかったことが残念だな。
くそう、パウロの奴、良いところだけ一人占めしやがって…
遠巻きに見てくるノルンと、じゃれついてくるアイシャ。いやぁ、幸せって感じだね。
ゼニス達の方に目を向ける。パウロとゼニス、ギースの三人で何やら話し込んでいるらしい。
「いやぁ、でも……そうか。良かった」
丁度、話の終わりだったようで、肝心な内容は聞き取れなかったが、三人とも穏やかな顔をしている。
冒険者時代の思い出にでも浸っているのだろう。
これで、パウロのグレイラット家は全員集合だ。
仕事の量も減ってきたし、家族仲も良好で、ピレモンの間者も除ける目処が立ってきた。
ようやく、日常が戻ってきただろう。

第九話「貴族的なチート？」

「貴族らしいことがしたい!!!」
「どうしたのよ、突然」
　仕事が12時間位に減って、余裕が出来た俺は、驚きの事実に気づいてしまった。
「だって、貴族になったメリット0なんですよ？フィリップ様しか得してないじゃないですか」
「貴族らしいことは今だってやってるじゃないの」
「書類仕事なんて貴族じゃなくたって出来るんですよ！新入りだってやってるじゃねえか」
「あ、ういす」
　自分は貴族になって、なんの得もしてないのだ。
　フィリップに政治利用されて、贅沢出来るような時間もなく……ただ仕事と面倒事を、押し付けられただけである。
「とは言っても、貴族らしいことって何なのよ？普通、書類仕事くらいしかしないんじゃないの？」
　”ボ”から始まり”ス”で終わるグレイラット家の獣人集めとかは正にそれだと思うのだが、知らないのだろうか。
「例えば、ボレアスの獣人集めとかそう言うのじゃないですか。ああいう感じの奴ですよ」
「使用人を雇ってるだけじゃないの。使用人が欲しいならお父様に頼めば良いじゃない」
「いや、そういう訳でも…」
「どういうことなのよ」
　エリスの機嫌が、微妙に悪くなった気がする。俺が適当なことを言ってるように感じたのだろう。
　とは言えども、俺も異世界転生系にありがちな貴族のやってる行為を、なんて説明したら良いのか分からない。
「えーっと、例えば…その……なんか凄い提案してチヤホヤされたりとか、食道楽の道に走ったりとか、奴隷でハーレム作ったりとか…み

たいな？」
「……ハーレム？」
「あっ！いえいえ！言葉の綾です！言葉の綾！」
「……でも、ルーデウスのやりたいことって、全然バラバラじゃない。本当にしたいように思えないわよ」
（あっぶねー…）
　貴族あるあるを引っくるめてしたいのだが、そういう話を知らなきゃ、そりゃ意味の分からないことを言ってるように思われるに決まってる。
「横から失礼するぜ、先輩。良く分からんが、取りあえずやってみりゃ良いんじゃないか？」
　そういうことになった。

ーーー

「てな訳で、フィリップ様！何か問題は起きてないでしょうか！」
「ああ、じゃあ……この資料を見てくれ。ギースが作ってくれた各文官の特徴のレポートなんだが、ピレモンの間者を見つける為に、何か共通点は無いかと考えているんだ」
　そういって、分厚いレポートを手渡された。相変わらず、ギースは色々とやってるらしい。
　十人程の情報が書かれていて、事細かに行動や言動が書かれている。
（これ、ストーカーなんじゃ…）
　というか、まさか俺のレポートもあったりしないだろうな。…別に他意はないが、今度からギースの前では、少し行動に気を付けよう。
　で、レポートに軽く目を通して見たのだが、此処から何かを見つけ出すのは、正直無理な気がする。行動心理学とか、そんな感じのプロがやるべき仕事だろう。
「なるほど、なるほど……」
「何か分かったかい？」
「これに関しては何も分からない、ということが分かりました」

「随分と哲学的だね」
「ならば次です！何か、領民の人気取りだとか改革みたいなことをしましょう」
　権謀術数の類いは難しそうなので、正攻法で行くことにしよう。
　幾らフィリップの頭が良いとは言え、俺には過去の天才たちが知識として付いてる。流石に、暗闘なんかのやり方は知らないが…それでも、織田信長やナポレオンなんかのやり方は、十分に通用する筈だ。
「というと？」
「例えばじゃあ……商業税を免除する、とか」
「メリットは？」
「領の商業が活性化します」
「それは、他の領から引き抜いてるだけなんじゃないかい？」
「何か、問題でも？」
「大迷惑で、格好の攻撃材料としか…」
　た、確かに言われて見ればそうだ。織田信長は周りが敵だらけだったが、一応、アスラ王国は曲がりなりにも一つの国だ。その1領邦が勝手にやって良いことではないだろう。
「書式の統一とかはされているのですか？」
「…されてなかったら、どれだけ仕事量が多かったことか……考えたくもないね」
　されているらしい。てか、統一されていてあの量だったのか……意図せぬところからトラウマが抉られてしまう。というか予想以上に思い付かねえ。現代知識で何やってたっけか……権利の保証とか？
「じゃあ、労働時間を制限して、児童労働を禁止にしましょう」
「ああ、これが本命か」
（ん？）
「安心したまえ、君は優秀な文官だよ。ルーデウス。だからほら、これからもよろしく頼むよ」
　謎に納得されて謎に褒められた。いや、文官としての能力を褒められても、あまり嬉しくないんだが。
　フィリップが「話は終わったな」的な顔をしてくるので、仕方なし

に首を傾げながら部屋を出ていく。
自分の年齢を思い出したのは、エリスの居る自分の部屋に戻ったときだった。
内政チート……失敗！
ーーー
内政チートが失敗しても、他に出来ることはまだまだある。
いきなり、自分のまったく未経験な分野に触れようとするから失敗するのだ。次は無難に、料理チートでもしておこう。
「キャー！ルディが料理を教えてだって！」
「少々厨房をお借りしましょうか」
と思ったが、良く考えたら、俺は食うことは他者の追随を許さないが、こと作る方に関しては全くやったことが無かった。
仕方ないので、ゼニスとリーリャに教えを乞うことにする。
ゼニスとリーリャはそれなりの腕前だった。中世並みの世界で、俺が「和食が食べたいなぁ」位にしか思わなかったのだ。食材は地球のそれよりも数段劣る物の筈なので、少なくとも下手ということは無いだろう。
しかし、ここで問題が発生した。
この世界、というよりかはアスラ王国の料理は、ヨーロッパのフルコース料理を幾らか粗野にした、という感じの物である。
つまるところ、現代で食ったことが無かった。
完成品を知らないのだ。なので、ゼニスとリーリャの料理を越えれる筈もない。
この、ヨーロッパ的な調味料達を駆使して、和食チックなものを作ろうとも試みてみたが、系統が違いすぎて無理だった。どうしても、酢とレモン汁位の差がついてしまう。
和食は食えないのか…
うちひしがれてる俺に、リーリャが声を掛けてきた。
「ルーデウス坊っちゃん、こちらの調味料は使われないのですか？」
リーリャが何やら壺を持ってきた。ラベルには「豆腐」と書かれている。

（えっ、豆腐だよね？）
もしかして、この世界では豆腐は調味料なのだろうか。いや、この際豆腐でも文句は言うまい。ちょっとでも和食に近い物が食べたい……！
そう思い、蓋を開けると中に入っていたのは……味噌だった！
（紛らわしっ！）
有能メイド、リーリャ様々だ。こうして俺は、味噌を手に入れることに成功した。
ーーー
しかし、そうなってくると醤油が欲しい。
残念なことに、醤油は、こっちには影も形もないようだった。表記揺れとかでもない。
でも、醤油位だったら作れそうだ。前世に作り方を見た覚えがある。
確か、原材料は大豆だった筈だ。そこに塩麹……普通の塩だったっけ？を加えて、発酵させるのだ。
それを放置したら、完成！…だよね？
何はともあれ、やってみよう。
大豆は用意出来た。塩か塩麹かがハッキリしないので、両方で試してみることにする。
発酵させるのはどうやるんだっけか。
酵母とかを使うのだろうか。それなら、パン屋を尋ねれば良いのだろうか。
いや、でもこの世界のパンは、酵母が使われてるのか微妙だ。固い訳じゃないが、凄くふっくらしてる訳でもない。絶妙に判断に困るブツだ。
というか、パンを発酵させてるのはイースト菌じゃないのか？
深掘りしてみると、サッパリ分からない。
いや、悩んでても仕方がない！迷ったら、周りの頼れる大人に聞けば良いのだ。
「という訳です、父様」

「サッパリ分かんなかったが…なんだ、酵母が欲しいのか？」
「はい」
「それじゃあ、酒蔵が持ってるんじゃないか？ミルボッツ領はワインの名産地だし、領都にも居るはずだ。今度、貰ってきてやるよ」
「ありがとうございます！」
かっこいい！やっぱり、持つべき物は頼れる大人だな。
ーーー
翌日、パウロが酵母を貰ってきてくれた。
早速、大豆を砕いて、中に酵母の付いてるナニかと塩麹等と一緒にぶち込む。
一体どこに置いとけば良いんだ？……いや、天日干ししたって菌が死ぬだけか。
馬小屋にでも置いとくか。
ーーー
更に一週間後、俺は馬小屋に来ていた。
ワクワクを胸に馬小屋のドアを開けると……
「うわ、オエッ、ゴヘッ……オエッ……」
（くっさ！）
とんでもない臭いが漂ってきた。納豆から臭さだけを残したって感じの臭いがする。
慌てて風魔術で臭いを鼻から遠ざける。
恐る恐る、箱の中を覗くと……
ここから先は、あまり描写したくない。
まあ、取りあえず…
料理チート、失敗！
ーーー
奴隷ハーレム……
「……エリス？」
「……」

失敗！
ーーー
後、俺に残されているのは魔術だけだ。
魔術で出来るチートと言うと……土魔術で、堤防とかを作ったりすることだろうか。
とは言えどもなぁ、フィリップに聞くまでも無く、これは出来なさそうだと分かる。
アスラ王国は歴史が長い。ブエナ村みたいなド田舎でも、それなりのインフラがある位には発展してる。
修繕とかの仕事なら有りそうだが、わざわざ、領主の息子にやらせる程の仕事でもないだろう。
「なんかないですかね…魔術で出来ること」
「あっ、ルディか……ちょっと失礼」
隣のパウロに愚痴ったら、何処かへ行ってしまった。失礼な野郎だ。
ーーーパウロ視点ーーー
「フィリップ、ギース……ルディは一体、どうしちゃったんだ？」
息子の様子が可笑しくなった。酵母を貰ってきたかと思えば豆を腐らせたり、薄ボンヤリしながらブツブツ言ってることが多くなったのだ。
ハッキリ言って、ちょっと可笑しい。マッドサイエンティスト的な雰囲気を感じざるを得ない。
そのことに危機感を抱いた俺は、こうしてフィリップとギースを集めていた。両方、頭脳労働に関しては非常に信頼を置ける二人だ。
「私のところに来て、労働時間を削ってくれだとか、児童労働を禁止にしろ、だとか言われたよ。もしかすると、あれがルーデウスなりのヘルプサインだったのかも知れないな…」
「エリスの嬢ちゃんにも、なんか変なこと言ってたな……貴族らしいことがしたいだの、なんだの」
なんていうことだ。俺の可愛い息子は、超過労働で、頭が少し可笑しくなってしまったのだ。

これは俺達の負担を増やしてでも、なんとかしてルーデウスに休みを取ってやるしかない。
「なあ、ルディに休みを作ってやりたいんだが…」
「私は構わないよ。そろそろ、直に文官の募集をする準備が整ってきたからね」
「なあ、先輩は何か、大それたことがしたいんだろ？それなら、こんなのはどうだ？」

…

ーーー

「なぁ、ルディ」
「なんです？父様」
突然、パウロが神妙な表情で話しかけてきた。パウロの真面目な顔には、あまり良い思い出がない。思わず、身構えてしまう。
「あのさ、お前……魔法で何か凄いことがしたいって言ってたよな？」
「はい」
「あと、フィリップにも領民の役に立ちたい、とか言ったんだよな？」
「ええ」
「それならさ…ロキシーちゃんみたいなこと、やって来てくれないか？色々な村を回ってさ。エリスちゃんとの新婚旅行がてらに良いだろ？」
なるほど、パウロ、天才か！
堤防の修復位なら、自治体で出来るかも知れないが、天候を操ったりするのは、流石に出来ないだろう。
どこかに困ってる村があれば、俺が駆けつけて天候を操る。俺は凄い魔術師気分が味わえるし、何より新婚旅行が出来るってのが素晴らしい。
「良いですね！分かりました！」
「おう、良かった」
こうして俺は、領都を離れて旅に出ることになったのだった……
あれ、最初何しようとしてたんだっけ？

間話「ロキシーの旅」

「ふぅ……」

シーローン王国で家庭教師の任期を全うした私は、足早に首都ラタキアを出ていた。

本当はもう暫く、進路を考えてから行くつもりだったのだが、パックス王子が意外にごねたのだ。

流石に三人程度に遅れを取るとは思わないが、あまり長居したいとも思えなかったので、こうしてロクに準備もせずに、出てきた訳だ。

……とはいえども、もう少し落ち着いて来るべきだったかも知れない。

一応、数年勤続して貰った給料と、軽くでは有るものの旅支度も出来ているが、行く場所によっては若干、心許ない。

もう一度ラタキアに戻るべきだろうか。

チラッと、自分の装備を見る。

薄いリュック、薄い服、薄いム……

…うん。ラタキアに戻ろう。

ーーー

結局、パックス王子が何かしてくることはなかった。

拍子抜けだ。

特に何事もなく旅支度を整えた私は、宿で進路を考えることにした。

しかし、どこに行こうか。候補としてはミリス方面、アスラ方面、ベガリット方面の三つが挙げられる。

取りあえず、一つずつ候補を考えて行こう。

まず、ミリス方面。

この場合、私は王竜王国→ミリス神聖国→大森林→魔大陸、というルートで旅をすることになるだろう。

つまり、里帰りという訳だ。

ルディ達と会って、親に会うのも悪くない気がしている。ノコパラ

達とも久々に会いたい。
問題があるとすれば、二つだ。
まず、ミリス神聖国は魔族の扱いが悪い、という点。
ミリスで金を稼いでから魔大陸に行かないと、帰ってくるときが厳しいので暫く滞在するだろうが、わざわざ嫌な思いをしに行きたくはない。
そしてもう一つが、戦争の予兆があることだ。
なんでも、獣族の奴隷問題を発端に、獣族とミリス間での緊張が高まっているらしい。
奴隷問題だけなら、ミリスが謝れば済む問題なのだろうが、スペルド族が関わっていたという噂が、この話を拗らせた。
最初は殆んど眉唾物な噂だったのだが、しかし口伝てで伝えられてく内に尾ひれが着き、ついには一部の貴族さえも動かしてしまったらしい。
それが原因で、ミリス側も退くに退けなくなったそうだ。
魔族というだけでも当たりが強いのに、スペルド族とまでなると、ミリスの性質上、頭なんて下げられないのだろう。
もしかすると、通行出来るのは今が最後のチャンスかも知れない。

次に、アスラ方面。
この場合、アスラ王国→北方魔法大国　というルートで進んでいくことになるだろう。
ベガリット大陸にも行けるが、どちらかと言えば王竜王国から行った方が早いので、考えないこととする。
ルディや魔法大学に顔を出す、ということが旅の目的になるルートだ。
このルートだと、特に問題は無いと考えて良いだろう。強いて言うなら、赤龍山脈を越えるときにメンバーを集める必要がある位だろうか。
あと、ちょっと師匠に顔を出しづらい。それなら行かなければ良いだけなのだが、アスラ王国に長居するのは何だかなぁ、という感じだ。

弟子に負けたくないから、旅をしているという側面もあるので、アスラ王国という平和な国でまったり暮らしたくない。
あの国はかなり居心地が良い。一度住んだら、終生の地に成りかねないのだ。
まあ、総合的には悪くないルートである。

最後に、ベガリット方面。
此方に進めば、単に修行をすることだけが目的となるだろう。
だが、修行をするだけなら魔大陸の方が良い。

この三つの候補の内なら…アスラ方面が良いだろう。魔法大学に行けば、何か新しい発見があるかも知れない。
よし、方向も決まったことで、決意を新たにすると…！

「ロキシー・ミグルディアさん！」
突然、ドアが強くノックされた。
もしかして、パックス王子が何かしてきたのだろうか。
逃げるべきか、戦うべきか、それが問題だ。
いや、三人くらいなら倒せる。
後ろ背の窓を開け放しておき、机をバリケードにして魔術を放つ準備をする。
「いないんですか？」
反応的に、そろそろ蹴破ってくるだろう。
杖をギュっと握りしめる。よし、覚悟は決まった……！
すると、扉の下から何かが捩じ込まれた。なんだあれは。
もしや、何らかの魔方陣？
目を凝らして良く見てみると……ただの手紙だった。
完全に自意識過剰で、顔が真っ赤になる。
誰かが見ていたら、あまりに滑稽で抱腹絶倒されていたところだ。
えーっと、差出人は……ルディ？
忘れ去られていなかったことに、少しだけ安堵する。

「えー、なになに……」
『師匠へ。
お元気ですか？私は元気です。具体的には、毎日１４時間労働する程には元気です。
何故、こんなことになったのか。
それは、私が貴族になってしまったからです。
誠に不本意ながら、ノトスという家を押し付けられてしまいました。
ですので、私はブエナ村に居ません。ミルボッツ領の領都か、近くの村に居ますので、用事か手紙がある際は領都の当主館までお願いします。
親愛なる弟子、ルーデウス・ノトス・グレイラットより』
「えっ？」
もう一度読んでみるが、結果は変わらない。ノトスといえば、アスラ王国の中でもトップ１０を争うレベルで大きな家だ。
つまり、もう到底ルディには会えない訳で……これ見よがしにノトスを強調していて、世間話が少ないのも、もしかすると『社交辞令だから本当に来るなよ』という遠回しなメッセージかも知れない。
つまり、アスラの方に行っても、わざわざ師匠だけに会いに行くような物で…

よし、ミリスに行こう！
あと、ルディに手紙を一応書いておこう。
返信は返ってこないかも知れないが…。
ーーー
「よし、こんなもんかな」
師匠へ書く手紙は出来た。
師匠はドジっ子だ。詳しく強調して情報を書かないと、宛名にノトスを付けずに『ルーデウス・グレイラット』だけで手紙を送って俺に届かなかったり、ブエナ村に手紙を送ってきたりしかねない。
あるいは、訪ねてきても、必死に領都を探して見つからない、なん

て事態になったら俺がとても困る。
なので、簡潔かつ、所在地と新名が分かるように手紙を書いておいた。
これなら、師匠も間違いようがないだろう。
なんの心配もなく、新婚旅行が楽しめる筈だ。

少年期　新婚旅行編
第十話「新婚旅行の始まり」

ロキシーに手紙を出していよいよ心残りも無くなった俺は、エリスとギレーヌと共に旅支度をしていた。
今回の面子はこの三人だ。新婚旅行なのに着いてくるのか？と思うかも知れないが、流石に護衛無しとは行かないのだろう。
「ルーデウス、もう少し色々、予定は詰めた方が良いんじゃないか？」
と言うわけでギレーヌは護衛なのだが、別にギレーヌが畏まったりはしなかった。敬語自体は使えるみたいなんだけどね。
「いえ、これくらいゆったりしてた方が良いですよ。疲れちゃいますし」
「なによルーデウス！おじいちゃん見たいなこと言って」
「じゃあ、エリスはまたあの行軍をしたいんですか？」
「…それが良いわね」
納得してくれたようで何よりだ。
「お嬢様も、お前と一緒に色んなところに行きたいんだろう。もう少し考えてやれ」
「ほう？」
「うっ……またニチャっとした顔してる…」
失礼な。というか、キメ顔しても言われるんだが、もしかして俺のキメ顔ってエロオヤジの顔なのか？んなバカな。
「おい、ルーデウス。寝具も軽くで良いから持っていけ」
ギレーヌが俺の荷物を見てそう言ってくる。
「え、普通に出先の村で泊めて貰えるんじゃないんですか？」
「新婚旅行なんだろう？今まで構ってやれなかった分、存分に構ってやれ。別にお前が初対面の家で寛げるなら無くても良いと思うがな」
「野原でするんですか？」
「いや、私は野宿させて貰うが、二人は馬車を使えば良いだろう」

つまり……カーセッ○ス?!
「またなってるわよ！」
おっと、失敬。

ーーー

てなわけで計画も煮詰まったので話して行こう。
まず、一ヶ月の内２０日はそこら辺の村で人気取りをする。そして、移動時間含めて残りの１０日で領都に戻り、その間は休みながら、フィリップに色々と教えて貰うということになっている。
実に単純で分かりやすい計画だ。
んで、二十日の間に俺は魔術でマウントを取りまくり、夜はエリスにマウントを取られる訳だ。
因みに、俺も頑張って責めようとしてるが、最終的には受けになってしまうのが今の状況だ。
何時かは勝てるようになろうと、日々修練を積んでるところである。相手も積んでるんだがね。一人じゃ出来ないし。
まあ、聞いてお分かりだと思うが、計画というほどの計画は無い。
気の赴くままに、一応区切りは付けておいて行動しようって訳だ。
十日間の方で勉強をするときは、パウロとギースもやるらしい。エリスが居ないのは、フィリップの期待の表れだろう。
むさいオッサン達で勉強会。実に華がない。出先との落差が激しすぎると思う。帰るのは、なるべくギリギリにしよう。
で、旅をするに当たっての、道案内は居ない。全員、信用出来る土地勘のある奴は、フィリップに着きっ切りなのだ。新婚旅行と領政じゃ、優先順位が違うからな。
こんなものだ。
考えてみると、行き当たりばったりなのが際立つ。
フィリップは「どこに行っても良いよ」とのことだ。アポとかも取らないらしい。
そんなんで大丈夫なのか。

心配は過分にあるが、フィリップを信じよう。
いよいよ、出発の時間だ。
ーーー
「じゃあ、行ってきますね」
「おう。こっちのことは大人に任せとけ」
いつになくパウロが頼もしい。親父としての威厳に道溢れた顔をしていた。アイシャやノルンをあやしているときとは、大違いである。
「ルディ、良い？ちゃんとエリスちゃんと遊んでくるのよ？あくまで魔術巡業とかは二の次だからね」
ゼニスは母親としてそれで良いのか？いや、良いのか。
「ルーデウス坊ちゃん、帰ってきたら、渡したい物がありますので…」
リーリャは何やら気になることを言ってきた。それなら、今渡して欲しいというのは野暮なのだろうか？
「じゃあ、お兄ちゃん！行ってらっしゃい！」
「…行ってらっしゃい」
アイシャとノルンにも見送られる。まだ、ノルンとはあまり距離を詰められてない。嫌われてる訳じゃ無さそうだけど…人見知りされているのだろう。
アイシャの方はいつも通り、超フレンドリーだ。リーリャは一体どんな教育をしたのだろうか。洗脳じみたことをしたんじゃないかと疑うレベルだ。
「じゃあルーデウス、行きましょ！」
そして、催促してくるのはエリスだ。
紆余曲折あったが、今世の家族関係は非常に順調だ。
今はまだキチンと避妊してるが、あと三年もすれば孫も抱かせてやれるだろう。
フラグのようだが、逆に此処から家庭崩壊させることが出来たら、大した才能と思う。
ーーー

道中は、来たときと特に変わらなかった。
今回は御者はギレーヌで、夜は馬車の中で野宿、もといカーセ○クスすることになっている。
昼間は世間話をして過ごすが、その間も俺は期待で色々な物が膨らんでいた。
流石に立ちっぱなしじゃなかったけど。
「ふぁ……もう夕方ね」
エリスはちょっと退屈そうだ。世間話だけで間を持たせるのは無理があると思ったので、ボードゲームも持ってきたが、俺が圧倒的すぎてエリスの機嫌が悪くなった。
お互いに強いと、性格が強気な方が優位になるのも考えものだ。
さて、そろそろ日が沈む。
いよいよ……お楽しみの時間だ!!
「じゃあ、エリス……しましょうか？」
「え？何をするのよ」
「楽しいことですよ、楽しいこと」
「分かったわ！キャンプでもするのね！」
いや、そんな焦らしプレイ求めてない…
と思ったのだが、エリスの目はキラキラしていた。
年相応に、無邪気に外で遊ぶことを楽しみにしている目だった。
思わず俺も毒気、もとい性欲を抜かれてしまう。
良く良く考えたらそうか。十三才で、そんなにヤることばっか考えてる筈もないもんな。
だとすると、仕事に忙殺されてた方がエリスにとっては丁度良かったのかもしれない。悲しい事実だ。
「行きましょ！」
「はいはい」
しかし、たまにはこう言うのも悪くない。
外に出てみると、爛々と星が輝いていた。
汚染されてない空は実に綺麗である。

「で、ルーデウス、何をするの？」
「そうですねぇ…ギレーヌ、何かありませんか？」
「ルーデウスの魔術で凍らせられるから、何個か生物も持ってきている。それを焼いたらどうだ」
御者台から降りてきたギレーヌも来た。
最初は何で居るんだ、なんて思ったが、性欲を抜きにすればこうして三人で過ごすのも良いものだ。
魔術で火を付け、焚き火に金網を乗せる。
「持ってきたぞ」
ギレーヌが持ってきたのは肉とパン。野菜の彩りなんて寸分もない。だが、それが良い。調味料は塩オンリーだ。
「じゃあ、行きますよ」
肉を焼いてる間、エリスがパブロフの犬みたいになっていたので、火力を強めて焼いてやる。
解凍などもせずに直火だが、意外にも肉は直ぐ焼けた。
「はい、どうぞ」
「おお」
「…食べて良いのね?!」
「まだ塩も降ってないですよ。ほら、今掛けますね」
全く、気の早いことだ。
塩を降った途端、二人ががっつきだす。
「うん、中々いけるわね！」
エリスよ、その反応は、毎日丹精込めて料理を作ってる料理人が泣くぞ。
じゃあ、俺も頂きますかね。
まずは一齧り…
「おおっ」
中々にいける口だった。
凍らせたせいで若干味が変だが、肉と塩だけのシンプルな味わいはスッと食べることが出来た。
ギレーヌとエリスのがっつき隊に俺も参加してしまう。

すると、あっという間に肉は無くなってしまった。
「ギレーヌ、もう肉は無いの?!」
「ああ。もう無いな」
「……じゃあルーデウス、一緒に取りに行きましょ!」
「え?」
おっと、とんでもない話になったぞ?
「いや、私が取ってこよう」
「違うわよギレーヌ!ルーデウスと行きたいのよ!」
エリスは可愛いが、しかし大丈夫なのだろうか。
そもそも、夜の森に肉になりそうな動物は居るのだろうか。よしんば取れたとしても、寄生虫とかも居そうだし…
「そうか。じゃあ、私は馬車を見ている。二人で行ってこい」
ギレーヌさん、護衛としてそれで良いんすか。
「護衛無しで大丈夫なんですか?」
「問題ないだろう。師匠として、ルーデウスとお嬢様の二人なら遅れは取るまい」
まあ、確かに…エリスは最近のパウロとの戦いで、メキメキ力を伸ばしてきてる。
戦い方というのを、弁えてきたのだ。
所詮は森だし、魔物の一つや二つ、なんとかなるか。ゼニスに治癒魔術も教えて貰ってるし。
それに、エリスのキラキラした顔を見ろ。これで断ったら夫失格だ。
というわけで俺とエリスは、森の中へ進んで行った…

第十一話「約束」

安全だろうと思って森に入る。
非常にフラグじみた行為だ。
そりゃ、何かに襲われるだろうなぁと身構えていたのだが…
「もっと奥に行くわよ！」
「ちょ、ちょっと待ってください」
何も無かった。
驚くほどに、何も無かった。
魔物や野盗、ピレモンの襲撃者どころか、肉になりそうな動物もいない。それどころか小動物の類いでさえ居なかった。
「帰りましょう、エリス。ちょっと変ですよ、ここ」
「まだ何も見つけられてないじゃない！」
「ちょっ、叫ばないで！」
却って不気味に思った俺は、すっかり森奥に進むことにビビってしまった。
「帰りますよ…なるべく音を立てずに…」
「なんでよ！」
「シーッ」
入ってそこまで経ってないが、ブー垂れるエリスを無理矢理連れて帰る。
森から出ると、ギレーヌが目を瞑って馬車に腰掛けてた。あれでいて、気配とかは感じられるのだろう。
「早かったな」
「聞いてギレーヌ！ルーデウスが…」
エリスが愚痴る。
臆病と言われてしまった。
い、いや、魔術師は臆病な位で丁度良いんだからね。そこんとこ、勘違いしないでよね！
「そうか…いや、計画を変えよう。一旦、街道沿いの宿場町に直行しよう。直ぐに準備するぞ」

「ええ?そこまで急ぐ必要、ありますか?」
「ある。ルーデウスとお嬢様は、後ろを警戒しておいてくれ」
ギレーヌがここまで強く言うのだ。
何かがあると思って良いだろう。
人は未知を最も恐れるというが、俺はまさにその状況に陥っていた。思わせ振りな森に、思わせ振りなギレーヌ。一体何があるんだ、と思わざるを得ない。
それにしても、エリスの機嫌は大丈夫かな。楽しい旅行計画が一瞬にして逃亡劇じみた物になってしまったのだ。
最近はあまり殴って来ないが、それでも不機嫌なエリスを見てると、ちょっとビクついてしまう。完全に尻に敷かれているな、こう考えると。
そう思って、チラリとエリスの方を見ると、先程以上にワクワクしたような表情をしていた。
口角がヒクヒクしている。
少しで良いので、俺にもその度胸を別けて欲しいです。

ーーー

「出発するぞ」
こんな状況だと、仕立ての良い馬車も、恐ろしい棺に思えてならない。
てか、なんでこんな注目を集めるような乗り物に、わざわざ乗るんだ。一目で領主に連なる物と分かったら、格好の的なんじゃないのか?
いや、落ち着け俺。少人数だから不安になってるだけだ。
隣をエリスを見よ。
隣に居るのは9歳にして、喧嘩をするときに顎先を殴れる女だ。
そして前に居るのは、そんなお嬢様をボコボコにのして手懐けた剣王様である。
そして俺も、師匠であるロキシーの教えを、一身に背負っているの

だ。
そんじょそこらの野盗位に遅れを取る筈もない。
大丈夫だ。問題ない。
覚悟を入れ直したところで、馬車が走り出す。
気を抜かずに、後ろを凝視し続ける。
常に魔術は打てるように準備してだ。
一分、十分、一時間、二時間…どれくらいの時間が経っただろうか。
前からギレーヌが話し掛けてくる。何か居るのだろうか。
「着いたぞ」
なんもないんかい。

ーーー

馬車で寝るのは流石に怖いので、俺たちは宿に泊まることにした。
開いてるところがあるのか心配だったが、数件の宿はまだ開いていた。
思ったより、そこまで深夜でもないらしい。
ギレーヌは気を効かせて、俺達に二人部屋を取ってくれたようだ。
「ねえ、ルーデウス…」
エリスが話し掛けてくる。俺も今日の馬車で懲りた。
今の俺は、精神的に賢者だ。清い心で、エリスに聞き返すことが出来る。
「はい、なんでしょう」
「今度、何処かに修行にいきましょう」
「修行ですか？」
「そうよ。ルーデウスの家族も、冒険者だったんでしょ？ギレーヌ達も入れて、今度はもっと大勢で何処かに行きたいわ」
いつになく静かな口調だ。普段の喧しいエリスは何処に行ってしまったのだろう。
エリスの目は寂しそうだった。
思えば、最近の俺達は、一見平和なようで随分、生活が変わってし

まったように感じる。
仕事に忙殺された俺に、礼儀作法の練習が増えたエリス。
お互いに向ける感情が変わらずとも、環境が変われば変わる想いもある。
俺がギレーヌとエリスに授業をして、ギレーヌがエリスと俺の剣を見る。そんな日々は、どこかに過ぎ去ってしまったのだ。
それが、今回の一件でエリスの心に大きく響いてしまったのだろう。
「分かりました。約束ですよ」
こんなことも約束してやれないような奴は、夫じゃない。
フィリップにはかなり、無茶を言うことになるかも知れないが、頼んでみよう。
何も、すぐじゃなくて良いのだ。
まだドタバタしてるが、何時かは落ち着く筈だ。
俺達が居なくても、滞りなく領が動かせる位に落ち着いたら行けば良い。
「本当?!」
喜んで貰えたようで何よりだ。
恐ろしい思いもしたが、こうしてエリスの本音が聞けたのでプラマイ0だろう。
その為にも、領民に媚諂う…もとい、ロキシー大作戦を頑張らなくてはな。

ーーー

朝。
余裕があるのに抱かないのは初めてだったが、それに反して清々しい気持ちで起きた。
「んう…ルーデウス……」
「起きてください、朝ですよ」
隣のエリスを起こして部屋を出る。外では既に、ギレーヌが待って

いた。
「昨夜はお楽しみ……じゃなかったようだな」
「えっ……なんで分かるんですか」
「匂いだ」
ギレーヌが恐ろしいことを言ってきた。
つまり、ギレーヌは毎日『あ、パウロとゼニスはヤったんだな』とか『サウロスとメイドがヤってたな』思いながら生きているのだろうか。
身近な人物の情事が分かる鼻なんて持ってたら、変な気分になりそうなものである。
「お楽しみだったわよ！」
あまり意味が分かってなさそうなエリスがそんなことを言う。今、自分でもニチャッとした顔をした気がする。
「そうか。で、聞き込みをしたのだが、近場で雨が降らない村があるらしい。名前はシル村。そこを目指そうと思う」
有能ギレーヌは、困ってる村に早速当たりを付けたようだ。
と言うわけで俺達は、『シル村』とやらを目指すことになった。

第十三話「シル村」

また馬車を走らせて一時間ほど。
「へぇ……」
「これは……」
シル村もまた、アスラ王国特有のジレンマに襲われた土地だった。ブエナ村と何も変わらない。
「おい、あれ、お貴族様じゃないか？」
「なんでぇ、いきなり押し掛けて来やがって…」
「ちょっと、代官様を呼んでこいよ」
遠目に農民達が騒いでるのが見える。
まあ、何しに来たんだって話だよな。これが最初の村だからあれだが、二・三個回る頃には名前が売れてると信じたい。
すると、呼ばれてきたらしい代官とやらが走ってきた。此方も、別に肥えてるなんてこともなく、若干身なりの良い農民と言った感じである。
こうして見ると、パウロのような貴族らしさのある代官は珍しいのかもだな。
「すいません、寡聞にして、どちらの方か存じ上げないのですが、お名前を伺っても宜しいでしょうか？」
「ルーデウス・ノトス・グレイラットです。此方の二人は気にしないでください。新しく僕の父が領主になったので、それを周知させる為にこうして伺わせて貰いました」
「…領主はピレモン様じゃなくなったのですか？」
「ええ。つい一週間ほど前に変わりました」
「はあ……あ、いえ。失礼しました。では、翌日までに村の者にも広めておきます。周辺の村にも私の方で広めておきますので、此処からもう少し離れた村に行っては如何でしょうか？」
どうやらまだ、領主交代の話は広まってないらしい。
あまり農民は他所に移動しないので、そのせいかも知れない。

「いえ、そこでですね。噂によると、水不足で困っているのでしょう？僕は、魔術が使えるんですよ。そこで、一週間ほど滞在させて貰うので、何か入用なことがあればお申し付けください」
「そんな、高貴な方に雑用など滅相もない…。そういったことは、私どもの方で何とか致しますので…」
「僕たちは人気取りがしたいんですよ。此方からもお願いします」
「…分かりました。ですが、彼等が無礼を働くこともあるかも知れません。そのときは、どうかご寛恕頂きたく存じます……」
代官はやけに疲れたような表情でそう言った。
申し訳ない。
ーーー
「えー、では、どこにお泊まりになりますか？」
「僕たちはそこの馬車で結構ですよ」
「はあ…。で、魔術で何かしたいのであれば、そこらの農民に話し掛けてください。一応、最近はあまり雨が降ってなくて困っていますが、世帯によっては雨に降られても困る場所があるかも知れないので」
代官はそう言うと、足早に去っていってしまった。
仮にも上級貴族に対する物とは思えない対応だ。
まあ、俺達は気にするタイプじゃないが。
「あの男、此方を警戒していたようだ。一応、怪しい行動は慎んだ方が良い」
ギレーヌがそんなことを言ってくる。
”迷惑”とかじゃなくて”警戒”？
野盗の類いとでも思われているのだろうか。
そうならない為にも、わざわざ高級そうな馬車に乗ってきてるのだが。
因みに、貴族の身分を騙って窃盗をすると、死刑である。国からの指名手配になっても可笑しくない程重罪だそうだ。だからこそ、何故警戒されるのか分からない。
「まあ、考えてても仕方ないですね。早速、そこら辺の農家の人に聞きに行って見ましょうか」

「そうね」
農道をブラブラと歩く。
すると、一人の農家が農作業をしていた。
早速、聞き込み開始だ。
「すいません、何か困ってることとか無いですか？」
「うわっ、え……なんだ、突然。どちらさんだ？」
随分雑な口調で返事が返ってくる。貴族と分かっているのだろうか。
「新領主の息子、ルーデウス・ノトス・グレイラットです。領主交代を周知してもらう為に、領内を回っているんです。魔術が使えるので、人気取りをしている最中なので、何かお困りのことがあれば、手伝えるかもですよ」
「領主交代……？えー、あー……そ、そうだな。じゃあ、どの位のレベルのもんが使えるんだ？」
「一応一式、召喚魔術と治癒魔術以外は上級以上に使えますよ。水魔術に関しては聖級まで使えますね」
「あー、そりゃすげえな。……じゃあ、ちょっと雨を降らしちゃくれねえか。此処んとこ全く降らなくて困ってんだ」
分かっても尚、この口調らしい。
まあ、平民はそこまで敬語を使える訳でも無いそうだからな。
「分かりました。行きますよ。ちょっと離れて下さい」
「えっ？……ああ…」
そっちから頼んだんだろうに。
ちょっと無詠唱で魔術使って脅かしてやろうか。
手に魔力を込めて、雨雲をかき集める。ウォーターボールを打っても畑をグチャグチャにするだけなので、若干大変な作業だ。
それにしても、雲自体が少ないな。結構カラッとしている。
だが、頑張れば集められないこともない。空中から集めて…行ける！
「え、うわっ！」
農家のおっちゃんが驚きの声をあげた。

もしかすると、本気で出来るとは思ってなかったのかも知れない。
眼前には、四角状に雨が降ってる畑がある。大成功だ。
「雨が降ったのか?!って……え?」
音を聞きつけ、周辺の家からも人が出てくる。
そして一様に、一区画だけに降っている雨を見て驚いていた。
(中々に気持ち良いな、これ!)
久々に自分に自信が出ました。

ーーー

「あんちゃん、納屋の壁がボロいんだ。治してくれねえか」
「ウチも雨が降らなくて困ってるのよ。お願い出来るかしら」
あのあと、農家達に畏敬の目で見られて一通り気持ち良くなった俺は、大人気になっていた。
ロキシーは魔族だが、俺は人間だ。その分、受け入れられるのが早かったのかも知れない。
俺は農家の頼みに答えて、あっちに行っては壁を直し、此方に行っては雨を降らせ…兎に角、魔術で大活躍をしている。
俺の心に細やかな全能感が出てきた。
ショボいとか言っちゃいけない。これでも、かなり大切なことだ。
隣のエリスはひたすらに自慢気な表情をしていた。
何もしてないとか言っちゃいけない。夫の功績は嫁の功績だ。
しかしそれにしても、なんていうか便利グッズみたいな扱いだな。
これ、領主の人気取りとして正しく機能してるのだろうか。
「おおっ、すげえ!かなり金掛かると覚悟してた修繕作業が一瞬で…!」
「お兄ちゃん、これ美味しいね!凍らせるだけで果物ってこんなに美味しくなるんだ!」
まあ、受け入れられないよりはマシか!
ーーー
「有り難うね。これはお礼よ。是非夕飯に食べて!」

一通り手伝いを終えた俺は、人の良さそうなオバチャン達から食材を貰った。保存食生活を覚悟していたので、かなり嬉しい贈り物である。
「なんなら、ウチに泊まって行っても良いのよ？」
「いえ、色々と騒がしくしてしまうかも知れないので…」
「そう？泊まりたくなったら何時でも言ってね？」
そんなことを言いながら、オバチャンが去ってく。
そう、こう言うのだよ。異世界は斯くあるべきなんだ。
幼馴染みと一緒に学校に行こうと思ったら親父にぶん殴られて、仕事先の主もとんでもなく凶暴で、やっと落としたかと思えば義父に政治利用される。
あまりにも可笑しい生き様だ。
魔術師ってのは、こうあるべきだろう。ほのぼのスローライフ生活でチヤホヤされて然るべきなのだ。
「流石はルーデウスね！やるじゃない！」
エリスは凄くハイテンションだった。
何故か今日は、凄く順調だ。
…反動が来たりしないよね？
そんなことが心配になったが、結局何事も無く馬車に戻っておせっせして寝た。
そこら辺で立って寝てたギレーヌは流石だと思う。
ーーー
翌日。そしてその次の日も、俺は魔術を使って様々なお悩みを解決していた。
「いや～、ホントに助かる。でも、そろそろ雨を降らして貰うくらいしかやって貰うことは無いな！」
上機嫌で農家のおっちゃんが話し掛けてくる。最初の低テンションとは大違いだ。
「そうなんですか。そうなってくると暇ですし、そろそろ次の村に行きましょうかね？」
「いや、あと四日位は降らしてくれると有難い。どうしてもって言う

なら止めないが…」
　でも、やることが無くなるんだよな。雲を集めて雨を降らせるだけだし、そんなにやることもない。
「じゃあお兄ちゃん、俺に魔術を教えてくれよ！」
「僕も僕も！」
　すると、遠目に見ていた少年達が俺に教えを乞いてきた。
　あと四日位だが、初級魔術くらいなら教えれるかもしれない。
　一丁、やってみるか！
ーーー
　一人称が”俺”の子供がベン。”僕”の子供がサッチャーというらしい。
　シルフィと違って、ちゃんと男だと分かる見た目をしている。どちらかと言えば、ソマル坊とかそういう系統の少年だ。
「じゃあ、魔力を手に集めてみようか」
　やることはシルフィへの授業の焼き直しである。
　かなり時間が掛かったが、二人の少年は軽く魔術を使うことが出来た。
　こうして見ると、シルフィの飲み込みの良さが分かる。
　元気にしてるかな、シルフィ。
「おおっ！」
「出来た！」
　かなりはしゃぐ二人。いやあ、喜んでくれたようで何よりだ。
「それじゃあ、魔力が切れる直前まで打ってみようか。そうすると、若い内なら魔力が増える可能性が高いはずだ」
　流石に無詠唱では出来ないみたいだったが、それでも若さは偉大だ。こうして若い内に沢山使っておけば、ある程度は出来るようになるだろう。
「はぁ…はぁ……」
　疲れ切ったように、二人の少年は肩に息を付く。
「よし、なら、今日は終わりにしよう。また明日もやってみて、もう少し魔力が増えたら、出来るか分からないけど、中級魔術の練習もして

みようか」
「はい！」
そう言って、少年達が駆け出そうとした所で…
「ちょっと待ちなさい！」
エリスが声を上げた。
何をする気だろうか。
「な、なに？俺達、疲れたから帰りたいんだけど…」
「ねえ、貴方達、剣術も学んでみない？剣術なら教えてあげられるわよ」
俺に触発されたのか、エリスがそんなことを言った。
「え～、魔術の方がカッコ良くない？」
「だよね」
二人の少年はそんな生意気なことを言う。
だが、エリスは全然余裕そうだ。成長した物である。
「まあ、見てなさい！ルーデウス、やりましょ？」
「えっ、今からですか？」
不味い。この流れは、俺が当て馬にされる流れだ。パウロに始まり、フィリップと続き…基本的にこの家に攻撃魔術の使い手は居ないので、他のことで比べられると俺が噛ませ犬になってしまうのだ。
「やるわよ！」
しかし、エリスはそんなことで止まるような女じゃない。
近くの柵を抜いて、一本を俺に投げ渡して来る。
「負けちゃうと思うんですが…」
「でも、全く出来ない訳じゃないでしょ！良いから！」
仕方ない、嫁さんの為に一肌脱ぐか。
「では、見ていて下さいね」
「あ、うん…」
危ないかも知れないので、子供達を下がらせる。
「では……始め！」
「ガアッ！」
始まった瞬間、エリスが吶喊しながら突撃してくる。

が、それは慣れた物だ。顎先を殴られる可能性もあるので、若干距離を取りながら警戒する。
すると、思いっきり真正面からエリスが振りかぶってきた。
危ない、そう思い目を瞑りそうになるが、気合いで目を開き受け止める。しかし……
「うわ!?」
思ったよりエリスの力が強くて押し切られてしまった。
「と、まあこんな物よ。どう?」
「す、すげー!」
やっぱり、予想通り当て馬にされてしまった。
物凄くキラキラした目でエリスの方を見ている。
いや、このままじゃ癪だ。
「ちょっと待ってください。僕の本領は魔術ですよ?魔術アリでもう一度やりませんか?」
魔術アリでもう一度しよう。このままエリスに良いところを持ってかれる訳にはいかないのだ。夫としてのプライドがある。
「分かったわ。そう来なくっちゃね」
戦闘民族のエリスは乗ってきた。自信のある目である。
ちょ、ちょっと不安になってきたな…。
だが、引くわけにはいかない。
俺は、そこの少年達の羨望を集めなくてはならないのだ。
「ではもう一回行きますよ…?いざ尋常に、開始!」
「……」
今度は無言でエリスが突っ込んで来る。
吶喊は二度目の効果は無いからな。
早速、エリスの進路に泥沼を出す。エリスが一瞬足を取られた好きに柵を振りかぶるが…
「フンッ!」
エリスは柵を杖のようにして、両足を嵌めたのに飛び出てきた。こうなると、ピンチになるのは俺の方だ。
慌てて、土で壁を作る。

良く見えないが、エリスは蹴りを入れて後ろに下がったようだ。
やばい、エリス、とんでもなく強くなってる。このままじゃ敗けかねない。手にファイアーボールを籠めると…
「まあ、こんな物ね」
エリスから漂ってたオーラが消えた。
隣には、唖然とした少年達が居る。
そうだよ、俺の実力も見せたかっただけじゃん。
何はともあれ、俺は威厳を保つことに成功した。
ーーー

「じゃあ、今日の授業はこんな物ね」
「はい!!」
あのエリスが人に物を教える立場になったと思うと、感慨深い物がある。
あれ以降、俺達は先に剣術を教えて、そのあと魔術を教えることになった。
エリスは『喧嘩のときはマウントを取れ』だとか『足は常に出せるようにしろ』だとか、何を産み出そうとしてるんだって感じのアドバイスをしていた。
信じて送り出した息子がエリスみたいなのになって帰ってきたら、俺が親父なら泣くね。
魔術の方は、中級魔術こそ使えなかったが、数は打てるようになった。
見た感じだと、どちらかと言えば剣の方が得意そうなので良しとする。
「じゃあ、そろそろ帰りましょうか」
エリスと少年を引き連れて凱旋する。僅か一週間だが、随分村に溶け込むことが出来た。
この調子なら、次の村も上手く行くだろう。
「あ、何か困ってることは有りませんか?」
どことなく焦燥した様子の村人に声を掛ける。

まだ見たことがない奴だな。
「い、いえ！失礼します！」
そう行って駆けて行ってしまった。
なんなんだ、一体。てか敬語が使えるのか？ふむ……怪しい。
「ちょっと、様子が変ですね。後を付けて見ましょうか」
「そうね」
「あの、彼らを見たことが有りますか？」
「え、近所のおじちゃんだよ。俺達が生まれたときからは居たよな」
「う、うん……」
ベンとサッチャーがそう返事する。
あれ？もしかして見当違い？
ーーー
少年達を家に帰して、彼らの後を追うことにする。
かなりなんでもなさそうな気がするが、一応、念には念を入れて、だ。
彼らが行った先は、代官の家だった。
最後まで態度が軟化しなかった奴である。
「レスターさん、どうやら、本当に領主が交代してたみたいですよ！」
「はあ？んなバカな！徴税官は来たんだぞ？それとも私が中抜きしてると言うのかね？」
「そ、そういう訳じゃないんですがね…」
何やら怪しい会話をしている。因みに、代官の名前がレスターだ。
俺とエリスは、もっと良く聞こうと窓際に耳を近づけて…
「こうしちゃいられない！あの方々に報告しないと！」
あ、ヤバイ。代官が走って家を出てきた。
近くに隠れる場所はない。どうするか迷ってる内に、代官が出てきてしまった。
「ルーデウスさん！ルーデウスさん！大至…きゅ……」
何やら俺の名前を叫んでいたが、窓際に居た俺達と目があってしまった。
「タイミングが良いですね！」

「え、あ、はぁ……」

第十四話「新婚旅行は終わらない」

「アスラ王国ではね、基本的に、領主が変わると免税措置が取られるんだ」

一週間程前、俺はフィリップから授業を受けていた。

「そうなんですね。何か理由とかはあるんですか？」

「まあ、一番の目的は『新領主の就任』を無理矢理にでも良い印象にする為かな」

「というと？」

「ほら、税金が無くなれば嬉しいだろう？そうすれば、新領主も歓迎しやすくなるってものさ」

「ああ、なるほど」

つまり、どのような事情があっても、領主の交代を無理矢理グッドイベントにして、領民に受け入れやすくさせようって訳だ。

とは言っても…

「流石に、一年も取らないと悪影響が出てくるんじゃ？」

「一年？」

「え、違うんですか？」

「大昔は、そういう時代もあったみたいだけど…普通は、一ヶ月に一度だ」

「理由とかはあるんですか？」

「さあ、そこまでは別に知らないね。ただまあ、徴収するのは一ヶ月に一度で、領主が交代したときは免税される。それさえ覚えておけば良い」

この後も授業は続いてく…

後に気になって調べて見ると、色々なことが分かった。

例えば、この世界の人間はすぐ死ぬ。

山に芝刈りに行けば死ぬし、川に洗濯に行っても死ぬ。そうじゃなくても、なんちゃら大戦だとかで死ぬ。

特に、この法律が制定されたときは、一年単位だと戸籍が追えない

程に酷い状況だったらしい。
だから、一ヶ月に一度の徴税になったのだとか。
領主が交代すると免税って言うのは、間違ってとんでもないバカに継承させてしまったときに、引きずり落としやすくする為ってのも有るらしい。
例外は戦時中だ。
とにかく、昔の人も色々考えて法律を作ったんだね、ということだ。

ーーー

「つまり、税金は徴収されたから新領主の交代は嘘だと思ったと？」
「ええ…」
どうやらこの代官は、そこの村人に領都の方に兵士を呼ばせに行ったらしい。
初めは自警団でなんとかしようとしてたけど、魔術の腕を見て考えを変えたそうだ。
だから、テンションが村人達と反比例してたんだね。
そこで、本当に領主がパウロに変わったことを知ったのだとか。
「徴税官は、どこの者だと？」
「特に名乗って居ませんでしたが…」
領主交代に乗じた特殊詐欺だとか、あるいは徴税官が知らなかっただとか、そういう可能性もあるにはある。
でも、十中八九…
「ピレモンにしてやられたわね」
エリスでも分かったようだ。
ピレモン。
俺達がちょっとでもイチャつこうとすると余計なことをしてくる野郎だ。
というか、もしかして俺達は今後、あいつが講じた策の数だけ、面倒ごとに巻き込まれるのか？
別に悪感情とかも無かったが、流石にこう何度も何度も面倒なこと

をされては腹も立つ。
帰ったら、フィリップに連絡してなんとかしよう。
「で、そのことは連絡したんですか？」
「はい。領主様に連絡した筈です…」
因みに、俺達は本物の貴族だとは思われてなかったそうだ。ただ、便利だしそれで良いか！位に思われてたらしい。
そんなんで良いのだろうか。
「じゃあ、僕達は観光を楽しみましょうか」
連絡が行ったなら問題ない！
ピレモンに掌の上で踊らされてたまるかってんだ。
「ダメよルーデウス！早く帰らないと！」
うぐっ、エリスが正論を言ってきた。
どちらかと言えばエリスの為なのに…。
「でも、まだあの二人にだって教えることとか有るんじゃないですか？」
「うぐっ……でも、仕方ないじゃない…」
そう。エリスだってたまには羽を伸ばすべきなのだ。
別に、帰ったらフィリップに何かやらされそうだなぁ、とか思ってる訳じゃない。
無いったら無い。
「ダメだ」
ポン、と俺の肩に手が置かれる。
ギ、ギレーヌ?!何故ここに?!馬車に居た筈じゃあ?!
「言っただろう。私は耳が良いと」
なんだこいつチートか？
しかし、形勢不利だ。どうにかしないと…お、あそこの道に農家のおっちゃんが歩いてる！おっちゃん！
「あの！すいま…」
「おお、坊主！ありがとうよ！これで作物も無事育つぜ。安心して次の村に行ってくれや」
（おっちゃーーーん!!!）

不味い不味い。3：1になってしまった。
此処から立て直すには…そうだ！遠目に見えるあの二人！
「ベン、サッチャー！初級魔術は覚えきれてないよな？」
「いや、お兄ちゃん達のお陰で良く分かったぜ！これで俺達も魔法剣士だ！」
（ガキども!!!）
クソッタレ！5：1だ。
これはもう、ダメなのか…
「さっ、帰るわよ」
サバサバ系女子も、問題かも知れないと思った瞬間だった。
ーーー
あの後、急いで馬車で領地まで帰った。
途中で何度か森に寄って狩りをしたりしたが、今度は普通に動物が居た。
最初の森に、何かとんでもない物が居たりしたんじゃないだろうな。
「おお、ルディ…早かったな…」
領都に帰った俺達は、早速パウロに迎えられていた。
ギースが来てマシになってた顔色が、また元に戻ったかのようにゲッソリとしている。
「それで、楽しんで来れたか？」
「やだなぁ、父様ってば白々しい…」
「はぁ？」
「え、もしかして知らないんですか？」
パウロと若干話が噛み合わない。
もしかしてこれは…
「ルディ、どういうこった。お前の為に頑張ってる父親をおちょくるってんなら、俺にも考えがあるぞ」
「父様……もしかして、僕達が帰ってきた理由について連絡が来ていない？」
最悪の形で、ピレモンの策略が噛み合った瞬間かも知れない。

ーーー
「てな訳で、第二回グレイラット家当主会議を始めます～パチパチ～」
「不味いな、ピレモンに実弾を渡しちまったか。こりゃ、どうなるか分かんねえぞ…」
「丁度、文官の雇用を始めた時期に……」
ちょっと空気が違いすぎやしませんかね。
因みに、パウロの言ってる実弾ってのは金のことだ。
「で、どうするんですか」
「同時平行でやらないといけないことが三つも出来てしまった。これは、覚悟が必要かもしれない…」
「僕も父様も分からないので、フィリップ先生、ご教授お願いします」
「ああ…まず一つ目だが、下の方の文官の裏切りを見つけることだ。上の方だけならギースの監視網でなんとかなっていたが、下の方となるとどうしようもない。全員入れ換える訳にもいかないからね…」
それだけでとんでもない業務になりそうだ。
そもそも、領政に携わる人間は下っ端も含めれば、千人も居るのだ。
それを数人で捜査する？それだけで、明らかにキャパシティーオーバーだろう。
「そして二つ目は、ピレモンが金を何に使っているのか調べることだね。賄賂なのか、傭兵を雇ってるのか…流石に、パウロが正式に就任したから後者はないと思うけど…それでも、探らないと対応が後手になってしまう」
此方も此方で大変そうだ。傭兵団だって、チンピラやヤクザみたいなのも含めれば、とんでもない数が居るしな。貴族も下級まで含めたら一万人近く居る。地方の代官職だって、貴族がやってることがマチマチだ。
「で、三つ目はピレモンがどこに潜伏してるのか探ることだ。身柄を押さえられなければ、また何か違う方法で妨害してくるだろう。しかし、抜かったな。金庫には手を付けられていないみたいだから油断していた…」

これもまた、気の遠くなるような作業だ。
一つ一つの領邦が、小国並みにデカイのだ。
一体どう探せば良いと言うのだろうか。
どこかにレーダーとか、万人を見渡せる神様みたいなのが居れば良いのだが。
「どれも、とんでもない作業になりそうですね。となると、僕もここで政務でしょうか？」
「ああ…しかし、それにしても本当に困った。只でさえ人材不足なのに、今度は武官まで必要になるとはね…」
俺が、デスマーチを覚悟した、その時だった。
パウロが口を開く。
「なあ、フィリップ…文官の採用自体は出来るんだよな？」
「あ、うん。そうだね。何か案があるのかい？」
「ここに居るじゃないか。武力に信頼が持てる奴が」
（とっっぁん?!）
俺の肩に手が置かれた瞬間、ドアがバン！と蹴り飛ばされる！
「話は聞いたわよ!!ルーデウス!!」
（かっっぁん?!）
どうやら、俺の新婚旅行は終わらないみたいです。

第十五話「森の謎」

「はあ…書類とにらめっこしてた方が、まだ楽そうでしたよ…」
「別に良いじゃない！外で動いた方が楽よ！」
嫁さんの体力が有り余りすぎて着いていけない、どうも、ルーデウスです。
今回ですけども、突然ですが小国並みに広い領土を回って、ピレモン叔父さんとかくれんぼをしてみた！
やっていこうと思います。
ルールですが、ヒントは一切無し！
制限時間は、フィリップ曰く一ヶ月だそうです！
僕が勝利すると、嫌がらせを辞めて貰える権利が勝ち取れます！
クソゲー乙。
「というか、最初は誰かを使って地道に聞き込みするところからですよ？僕達だけで探すなんて、到底無理ですよ」
「そうじゃないわよ」
なんだなんだ。ハッ、まさかギレーヌに警察犬の真似事をさせるとかじゃないだろうな。
いや別に、俺が見てみたいとかそういう訳じゃないよ。
「どういうことです？」
「ほら、あったじゃないの！あの……そう！森よ、森！」
「あー…？あっ！有りましたね、そんなの」
「あのときはルーデウスが怖がって行けなかったけど、絶対あそこよ！あの森は絶対可笑しいわ！」
「確かに…」
エリスが言ってるのは、俺達が最初に行った森のことだろう。
確かに、あの森は様子が可笑しかった。
魔物の駆除は定期的にされるので、魔物が居ない、というのは頷ける話だ。
しかし、小動物の類いでさえ全く居ない、というのは明らかに異常

だろう。何か作為的な物を感じる。
「一応、行ってみますか？」
　すると、サル顔の男が突然割って入ってきた。
「おっと！先輩、話は聞かせて貰ったぜ！」
「なんだ新入り、突然どうした」
「俺も行かせてくれよ！今回だけだからさ。森ってんなら、中々に危ないだろ？だから、道を覚えたりするのは、任せてくれればやるぜ？」
　どうしたんだ、新入り。お前にはもっとポテンシャルを活かせる場所があるだろうに。
「フィリップ様に許可は？」
「もう取ってきた。だから大丈夫だぜ？先輩」
「偉く用意周到じゃねえか」
　しかも、完全に着いて来る着満々だ。
　いや、断る理由も無いし、居てくれりゃ有難いんだけどさ…
　なんでわざわざ？
「でも、どうして着いて来るんだ？普通に、書類とにらめっこしてりゃ良いじゃねえか」
「ジンクスなんだよ」
「はあ…」
　答える気が無いのか、それとも真面目に答えてるのかは分からないが、とにかく俺には良く分からないってことが分かった。
　まあ、なんやかんや言いつつも有能な男だしな。
　連れて行って損は無いだろう。
「じゃ、俺とエリスとギレーヌとギースの、四人パーティだな」
「その、先輩…パーティって言い方は辞めてくれよ」
「はあ…」
　大概コイツも変な野郎だな。ギース。
　ーーー
　馬車の道中では、ギースが食事係だった。
　ギースは料理が中々に旨かった。
　パウロからも聞いたことがあったが、ギースは黒狼の牙でシーフ、

つまりは雑用係をやっていたらしい。
ただ、雑用に関しては一級の才能を持ってたんだとか。
で、ゼニスに料理を教えたのもギースらしい。
そして、その腕前の程は…
「私にも料理を教えなさいよ！」
あの、エリスが。
礼儀作法や数学に寸分足りとも興味を示さなかったエリスが、教えを乞う程の物である。
更に、俺の日本人の舌を満足させられる程の物でもある。
焼いとけばなんでも旨い！って言って食いそうなギレーヌは兎も角として、これは中々の腕前ということが分かるだろう。
「んあ？いや、エリスの嬢ちゃんには……いや、そうだな。じゃあ、俺になんかもう一個、デカイ良いことがあったら教えてやっても良いぜ？」
ギースのエリスに対する対応は、俺に対する物と一緒で良く分からなかった。
あしらってるのか、本気なのか相変わらず読み取れない返事である。
ある意味、ポーカーフェイスの亜種みたいな話術なのかもな。
「そう？分かったわ！」
エリスも大人しく引き下がったようだ。
言葉にし難いが、ギースの言葉は不思議と納得してしまうのだ。
俺も『ジンクスだ』と言われて、寸分も意味は分からなかったが、『ああ、そうなんだな』という気持ちになったのだ。
これが計算の上に成り立って居るのなら、多分詐欺師でもやった方が良いだろう。
武力と知力。この二つを兼ね備えたからか、馬車の道中は非常に順調だった。
ーーー
「ここか」
唯一初見なギースが、そんな声を上げた。

今は再び、あの謎な森に着いたところである。
「動物の気配がしないと言う話だったが…普通に気配がするようだが？」
「ええ？そんなバカな」
ギレーヌは感覚が凄まじいので、這いつくばらずとも痕跡を追う位はお手の物だった。
というか、獣の気配がする？
もしかすると、もう引き払った後なのかも知れない。
「いや、なんか痕跡があるかも知れねえだろ？取りあえず、行くだけ行ってみようぜ」
「まあ、そうだな。全く別のことでも、何か異変があるなら見に行くべきだ」
別にそんなこと言われなくても、見に行くつもりだったんだが…まあ良い。
「で、馬車に残るのは誰にしますか？」
「今回は護衛は要らんだろう。特に貴重品も持って居ないしな」
「じゃ、早速行きましょ！」
エリスに半ば引きずられるように森に連れて行かれる。
大人組も後からノソノソと着いてきた。
些か身軽過ぎる気もするけど、大丈夫なのだろうか？
今から怪しい森に突入するようなノリには思えなかった。
「ふむ…特に、人間らしい臭いはしないな」
「そうかい。じゃ、もっと奥に行こうぜ」
ギレーヌとギースは若干ぎこちない。
別に普通に話はするんだが、どう説明した物か。
同じパーティに属していたように感じられない？そんな感じだ。
もっとも、それを掻き消す程エリスのテンションが高いので、それほど空気は重くないのだが。
「見て、ルーデウス！これは確か食べられる奴よ！」
「いやクッソ劇物ですよそれ！捨ててきて！ダメです！」
さっきから良く分からないキノコを持ってきたり、変な植物を持っ

てきたり…
王都の貴族はエリスのことを『山猿』だとか『野生児』だとか渾名してたようだが、この調子だと攻撃力はあっても野生で生きて行けるかは、怪しい感じだ。
何はともあれ、かなりデコボコな面子な物の、割と探索は上手く行っていた。

ーーー
二時間程経った頃。
「む…何か、あっちの方から変な臭いがするな。行くぞ」
「おい、ちょっと待ってくれ。今、計測し直すから」
ギレーヌが唐突にそんなことを言い出した。
ギレーヌレーダーは案外優秀なのかも知れない。
「変な臭い？ピレモンね！きっとピレモンよ！」
エリスが嬉しそうに叫んだ。
が、直ぐに表情を固くする。微妙に口角が上がってるが、可愛らしい物だ。
「一応、危険があるかも知れないので戦闘準備をお願いします」
ギレーヌの反応的にまだ距離は有りそうだが、何時でも魔術を打てるように俺もしておく。
エリスとギレーヌも剣を抜いた。
唯一、ギースだけが特に気負って無さそうだが、周囲の面子に対する信頼の表れだろう。
草木を掻き分け進んでいく。
相変わらず、動物が居ないとかそう言うことはない。
五分ほど進んだ所だろうか。
「……有りましたね」
目の前に有ったのは、小さな小屋だった。
ギレーヌの言っていたのはこれのことだろう。
しかし…
「何て言うか、猟師とかが使うような荒屋って感じが…」

あまり、ピレモンがここで陰謀を企んでるようには思えない規模の小屋なのだ。
有り体に言えば、凄くちんまい。
「いや、こんな所まで猟師は来ない筈だぜ。何かあると思って間違いねえ筈だ」
おばあちゃんの知恵袋ギース曰く、そうらしい。
ピレモンと言う奴は、意外にも目的の為なら、貴族としての体裁など気にしないタイプなのだろうか。
ちょっと意外だ。
「じゃ、じゃあ…中に入りますよ？」
「おう」
「ああ」
「ええ」
無言で、気配を殺してドアに近づいていき…
体当たりでドン！っとドアを開ける。
「これは……？」
中にあった物は…
別に、書類や金の類いでは無かった。
「あー、何て言うか、その…」
「ショボいわね」
エリスがズバッと言う。
中にあったのは、小さな机と椅子、そして数着の男物の服だけであった。
机の上にはコップが置いてある。
「若干水滴が付いていますね」
「ということは、数日前まで誰かが此処に居たのかぁ？」
ピレモンが此処に潜伏してたなら、俺はちょっとピレモンを尊敬するかも知れない。
そう思える位、物が少ない。
「とは言えども、ここにピレモンが潜伏して居たんですかね？あまりイメージに合わないような…」

「匂い的に、ピレモンの物ではないようだな」
ギレーヌセンサーによれば、ピレモンでは無かったようだ。
となると、森の隠者だとか、なんかの調査員だとか、そういう奴の住処だったのかもな。
「ここを探しても仕方なさそうですね…別の場所に行きますか」
「そうね」
この後も俺達は森の中をウロウロと探していたが…
結局、この他に何かが見つかることは無かった。
いよいよ以って、ヒント０だ。

第十六話「独白」

ーーーピレモン視点ーーー

金を王都アルスまで運んでから、二日が経った。

今のところ、領主の座を取り返す計画は順調に進んでいる。

第二王女派からの支持取り付け。

そして、第一王子派の一部貴族にも、そちらの派閥に乗り換えると言って、前金として金をバラまいたら寝返らせることが出来た。

いや、『寝返らせた』は不適切だな。

彼等はあくまで、第一王子派の一貴族のトップを変えただけで、

この私、ピレモンは第一王子派になるのだから、決して第二王女派を利する行為をした訳じゃないのだ。

無論、本当にそんな詭弁を信じる奴は居ないだろうが。

これがダリウス上級大臣だったりしたら、目先の餌には飛び付かなかっただろう。

後のことを考えれると言うのもあるし、今回勧誘に成功した貴族があまり甘い汁を吸えない立場だったと言うのもある。

だが別に、ダリウスのように能力的な意味で有力な者は居なくて良いのだ。

重要なのは、家格。

先祖が培ってきた力は、一代の無能・有能で大きく左右されはしない。

だからこそ、私に利する意味も分からないようなバカを利用すれば、幾らでもやりようはある。

精々、先祖の努力を私の足元に差し出せば良い。

…かくいう私も、同じ穴の筵かも知れないが。

虚しい人生だと、我ながら思う。

父に期待されず、兄・パウロと比較され、サウロスや家臣にバカに

され続けて。
生まれたときから、誰も彼も、私が領主になるなんて考えても居なかった。
領主になれたのだって、パウロが帰って来なかったからだ。
そしていざ領主になっても、私に領主としての能力は無かった。
問題に対処する能力も低く、家臣からの求心力だって集められなかった。
リーダーシップという物が無いのだ。
そして、挙げ句の果てにはパウロが帰ってきた瞬間に、ポイだ。
その報を聞いたとき、私は震えた。
目も震え、頭も震え、肩も震え、足も震えた。
それが怒りなのか、悲しみなのか、はたまた別の何かによる物だったかは、今となっては分からない。
ただ、『負けた』と感じたことは覚えている。

しかし、救いはあった。
たった一つだけ、たった一つだけだが、私にも得意とすることがある。
暗闘の才能だ。他人の足を引っ張り、貶め、自らを相対的に高める。
それだけは、誰にも負けない自信があった。

例えば、今だって精力的に弱みを探っていて、現にサウロスとフィリップの弱みは手に入れたのだ。
奴等は、奴隷を買っていた。
それだけなら問題ではない。だが、ミリス大陸の獣族を買っていたのだ。
今、奴隷問題でミリス神聖国ー獣族間の緊張が高まってる時期に、奴隷商人に金を流すのは、明らかに戦争を助長する行為だ。
そこを突けば、奴等を失脚させることも可能だろう。
パウロは半ば後見人のような立場なので、纏めて叩き潰せる。
散々バカにされた能力だ。

会う者の中で、人間として信用出来る者には、須く見下された能力だと自負している。
そして今、アイツらに目に物見せてやるのだ。
お前らがバカにしてたこの私が、お前らを地に貶めてやる。
領主の座はどうでも良い。ただ、負けたくなかった。

いや、領主の座がどうでも良いことは無かったな。
私には、二人の息子が居る。
長男は、社交的な能力に優れている。
次男は、女をタラし込む才能だけだと思っていたが…今回の件で、意外に暗闘と、人を見極める方面にも才能があることが分かった。
領主交代の穴をついて、税金を回収することは自分も考えていた。
ただ、断念した。
どこまでパウロが領主になった話が伝わってるか分からなかったし、税金を回収者にくすねられては、ただリスクだけを負うことになるからだ。
それに、金が無くても何とかなる目処は立っていた、というのもある。
ある日、次男は似たような提案をしてきた。
出来る訳がない、そう思った。だから諭そうと思ったのだが、次男は自信に満ち溢れていた。
ならばと思い、賭けるような思いで次男に任せたのだが…
次男は無事に、税金回収を成功させて来たのだ。
この一件で、次男には才能があると分かった。
一体、どのようにこの短時間で人を集め、計画を実行したのかは分からない。
しかし、それはつまり私には測れないほど、高度な頭脳と手腕を持っている証左だろう。
昔の私なら、嫉妬したと思う。
父、兄に続き、息子までコンプレックスとなれば、どうなっていたことか。

しかし、今の私にとってはそう大きなことではなかった。
意味を見出だしたのだ。
確かに、私はパウロに劣る。望まれてない人物かも知れない。
ただ、息子達はどうだ。彼等はパウロどころか、フィリップだって出し抜いたのだ。
息子達は、きっと望まれる人物になる。
長男が家督を継ぎ、次男が陰ながら支える。きっと、何者にも負けないコンビになるだろう。
そう考えれば、救われた気がした。
私は、息子達の輝かしい未来の踏み台となるのだ。
望まれる息子達を領主にするための、置き石なのだ。
それならば、私は断じてパウロのスペアなどではない。
必要とされた、代えの効かない人間だ。

だから、息子の為ならやって見せる。
下げたくない頭だって下げる。
金だって幾らでも出す。
格下相手にだって、媚びへつらってやる。
汚名は一身に背負って退場してやろう。
パウロも、フィリップも、サウロスも道連れだ。
そして言ってやるのだ。
「勝った」
と。

ーーー

計画は着実に進んでいる。
多少のミスがあったり、フィリップらに勘づかれても最早、取り返しがつかない所まで来ている。
後は、時を待つだけだ。

第十七話「ｖｓ北王ウィ・ター」

「不味いな…」
パウロが腹立たしげに呟く。
理由は、ピレモンのことだ。
ピレモンが何かをやっていた痕跡は、意外にも早く見つかった。ただ、決定的な物だけは見つからない。
フィリップはこの事態を受け、時間稼ぎをされてることに気づいたようだが、だからと言って何が出来る訳でもない。
今、ノコノコと王都に出ていったところで、ピレモンの策略にまんまと嵌まるだけだからだ。
一応、フィリップが手紙の速達便で、王都の方も探っているようだ。敬意を持って『元祖リモートワーカー』の称号を授けたい。
で、どうにかして、何らかの不正の証拠を見つけなければいけないのだが…
探せば探すだけ、誘導されてる気がしてならないのだ。
わざと見つかるようにされてるって言う感じ？
ギースはノトス家の潤沢な資産を利用して、冒険者でローラー作戦を行うことを提案していた。が、これはフィリップに却下されていた。
あまり大人数でして、その中にピレモンのお手つきが混ざってればイタズラに金を浪費する結果に繋がるからだそうだ。
ただ、ギースの知り合いで信用出来る奴に頼むこと自体は採用されたようで、ギースは冒険者達を率いて何処かに行っていた。
と言うわけで、俺やエリス、パウロと言った中心人物でさえ動員されて、何か痕跡がないかと捜索しているが、結果は芳しく無かった。
遅延工作がされていると言うのに、どうすることも出来ないもどかしさ。
それでパウロら大人組はピリついている。

尤も、ギレーヌやエリスら獣組は別なのだが。
俺はあれから、潜伏場所になりそうな森や山を、しらみ潰しに探していた。
町などの人が居る場所は、ギースの担当だ。
最初こそ尻込みしていた俺だったが、意外に入ってしまえば何てことはない、と言うことが分かった。
そもそも、エリスとギレーヌら前衛の安定感がレベチなのだ。
彼女らは、遠く離れた距離からでも気配を察することが出来る。そのため、俺がアウトレンジから魔術を叩き込めば終わってしまってしまうのだ。
ギレーヌは獣人だから兎も角として、エリスは一体どうやって察知しているのだろうか。
それはさておき。
ギレーヌはそんな俺の慢心を察知してか、「あまり力を過信するな」という有り難いお言葉を下さった。
ギレーヌは剣王だし、
エリスも剣聖の技『光の太刀』こそ使えないものの、剣聖並の腕前を持っている。更にパウロのお陰で北神流や水神流の技も取り入れてるので、実質剣聖の上澄み位の実力はあるだろう。
俺だって、一応水聖級魔術師だ。
アスラ王国で一体何を心配することがあるんだ、と思わなくも無かったが、別の大地でも同じ環境とは限らないのだ。
だから、アスラ王国で心構えを学んでおくのは良いことだろう。
そう考えて、素直に言うことを聞くことにする。
今思えば、訓練気分すらも軽かったのかも知れないが。

ーーー

「彼方から匂いがするな。行ってみよう」
ギレーヌがそんなことを言う。
今の俺達は、ギースが集めてきた情報を元に、潜伏先となっている可能性が高そうな場所を探し回ってる最中だ。

因みに、この方法で四個の森に行ったのだが、二個は当たりがあった。
しかし、既に引き払った後のようで、あまり収穫は無かったが。
まあ、だとしてもこれでギースの情報収集能力の高さが分かるだろう。半分は当たりだからな。
で、ギレーヌが反応した訳だ。
今回は当たりっぽいな。
「……若干、新しい人の匂いがする。警戒してくれ」
おっ、これは当たりも当たり、大当たりじゃないか？
そんなことを考えながらテンション高めに行軍する。
此処のところ、目立った成果が無かったから、意識せずともテンションが上がってしまったのだ。
なるべく、音を出さないように進んでいたつもりだったが…もしかすると、エリスやギレーヌ程気を潜められて居なかったのかも知れない。
森を掻き分け進んでいくと、立派なログハウスが出てきた。
動物が居なかった謎の森の奴とは、比べるまでもない。
大成果だ。これでパウロ達の心労もちょっとは減るだろう。そう思ったとき。
「うわっ！」
唐突に、目に光が飛び込んできた。
森が開けたからか？いや、だからと言って此処まで目は潰れない筈…
そんなことを考えてる間に、何かが飛んでくる。
あれは…剣だ！
ギレーヌが防ぐよりも早く、俺が魔術で剣を溶かした。
あぶねえ。一度見たことが無かったら、対処出来ていなかった。
「何者だ！」
「我が名は北王ウィ・ター！強者を狩る為に旅をしている者である！」
大嘘だな。
というか、嘘を付く気すら無さそうだ。

一応、便宜上ピレモンの部下だと言ってないだけだろう。
そいつはピカピカに光る鎧を着た少年…いや、恰幅が良い辺り小人族か。
眩しいのは、鎧のせいか。あれに光が反射しているのだ。
しょっぱい技だが、しかし効果的だと言わざるを得ないだろう。
「ガアッ！」
「……」
サッと目配せし合ったエリスとギレーヌが、即座にウィ・ターに突っ込んでいく。
が、やはり眩しさが災いしてか全力を出せていないようだ。
これは不味い。
どうしたものか…取りあえず、魔術で援護するのは確実として、何を使うかが問題だ。
あの鎧は高そうだ。つまり、何らかの魔術付与がされてる可能性が高い。下手に警戒させるだけの結果に終われば、アイツは逃げる。それは不味い。
よって、魔術が打ち込めるのは一撃だ。
だからこそ、何の攻撃をするべきか考えなくてはいけないのだが…
うむ、分からん！
何やら薄く模様が書かれてるのは分かるが、俺にそれを解読することなんて出来やしない。
取りあえず、一発打ち込んでみるか？
全部がダメじゃなきゃ、成功する確率は割と高いように思える。それか、なんなら同時に全部打ち込むか。
いや、それをするにはエリスとギレーヌが近すぎる。一体どうすれば良いのか。
声を掛けて下げさせれば、それは俺の無詠唱のアドバンテージを捨てるに等しい。
…いや、発想を変えよう。
何も、魔術を馬鹿正直に喰らわせられなくても良いのだ。
あの光さえ消せればどうにかなる筈だ。

なら、泥沼魔術だな。
ここまで、思考時間は5秒間。
長いと感じるかは微妙だが、強者同士だとかなりの時間だ。
魔術を手に込めて…地面を泥沼に！
「うお！」
粘度の高い泥沼に、ウィ・ターが突っ込む。アイツだけを対象にしたようだったが、突っ込んでったエリスも片足を取られてしまった。
が、そこはエリス、即座に足を抜いて切り掛かろうとするが…
ウィ・ターもまた、強いということなのだろう。
エリスに向けて、剣を向ける。
まるで、見せつけるかのように。
それを見て俺は、剣を弾くために岩砲弾の準備をする。
足が嵌まってないギレーヌは、振りかぶればウィ・ターを殺すことが出来た筈だが…
エリスのことを庇うように、剣を振った。
多分、俺の魔術援護も間に合ったように思うし、エリスもエリスで致命傷になるほど、やられっぱなしにはならなかっただろう。
だが、ギレーヌはエリスを庇うような動き方をした。別に捨て身って訳ではないが。
そして、その一瞬の隙を見逃すウィ・ターではない。
多分、誰かに攻撃を仕掛けてくるだろう。そう思ったのだが…
「さらばだ！」
ウィ・ターはそういって逃げて行ってしまった。
ええ……？
いや、確かにあのまま行けば、ウィ・ターはジリ貧で負けていただろう。アレは、どちらかと言えば初見殺しのタイプで、持久戦が得意そうじゃなかったからな。
しかし、逃がしてしまったか。
まいったな。
俺達は、弱くない。ウィ・ターを退けたのだって、運が良かったからじゃない。実力の賜物だ。

だがしかし、運が悪ければ負けていた可能性はあった。
俺はその、運が悪い可能性にエリスやギレーヌを巻き込みたくない。そして俺も、流石に一人で入りたいとは思わない。
つまり、実質的に俺達は使えなくなってしまった訳だ。

またしても、完全にしてやられた。
因みに、奥のログハウスでは、今までよりかは決定的な資料が見つけられた。
明らかに、出所不明の大金の帳簿だ。
致命傷ではないが、とっかかりになる位の証拠には思える。ピレモンにしては、迂闊なことだ。
もしかすると、ウィ・ターに回収させに来たところに俺達が鉢合わせたのかもな。
収穫はあった。
しかし、決定的ではない。何か、あと一つあれば変わりそうなのだが…
しかし、俺達はもう、探索は出来ないのだ。どうした物か。

間話「魔大陸へ」

ーーーロキシー視点ーーー

「いや、わたくし何もしていませんの！ちょ、辞めてくださいまし！」
路地裏から、そんな声が聞こえてきた。
此処はミリシオン。ミリス神聖国の首都だ。
覗いてみると、長耳族で縦ロールの綺麗な女性が、数人の男に囲まれて腕を引っ張られていた。
最近は、大森林の諸部族との間で緊張間が高まっていて、時々、一部の市民が暴走したりするのだ。
今回も、例に漏れずそう言うことだろうと思い、助けに入る。
殺してしまっては不味いので、初級魔術で追い散らしておいた。
「大丈夫ですか？」
「ああっ、貴女、何するんですの?!」
「え、あ…お知り合いでしたか？」
ロキシーは、自分でも自覚があるドジっ子だ。
即断即決は美徳でもあるが、同時に勘違いを誘発しやすい。だから、今回も別に何でもないところに割り込んでしまったのではと思ったのだが…
「いや、別に知り合いでは無いですわよ？」
「はい？…あ、抵抗したら不味いタイプの手合いでしたか？」
どうやらそうではないらしい。ミリシオンはそれなりに治安が良いと思っていたが、組織化されたチンピラが居たりするのだろうか。
「いえ、別にそう言う訳でもないですわ。というか、なんで分からないんですの？」
「ええ？すいません、分かりません」
もしかして、何かイチャモンを付けられてるのだろうか。身ぐるみを剥がれて、奴隷にされてしまったりするのだろうか。
『通報されたく無ければ、金を寄越せ』……だなんて言われるのかも知

れない。
思考がそんなところまで突入していた。
直ぐに魔術の用意をしないだけ、多少は早とちりも直ってきたが、それでもかなり早い結論である。
そんなロキシーを見かねて、長耳族の女はため息をつきながら正解を言ってくれた。
「はあ…数人の男が、わたくしを怒りの捌け口にしようと必死に侵してくるんですわよ?そんなの、乗らない訳にはいかないじゃないですの」
(あ、早とちりました)
ロキシーはそう思った。
全く以て、その通りであった。
これが、長耳族の女…エリナリーゼとロキシーの出会いである。
ーーー

「なんであんな紛らわしい声を出してたんですか?」
「今のミリシオンならイケると思いましたの」
繰り返して言うが、今のミリシオンはピリピリしている。なので、一般人は火中に飛び込むような真似はしないのが普通だった。
ロキシーは来たばかりなので、そこまで考えが至らなかったが。
「で、エリナリーゼさんは冒険者なんでしたっけ」
「そうですわよ」
「なら、魔大陸の方に行きたいんですが、同行して貰えないですか?」
「うーん、ちょっと待ってくださいまし」
女の名前は、エリナリーゼと言った。
何処かで聞いたことがあるような気がするが、あと一歩のところで出てこなくなってしまう。
エリナリーゼは美人で背も高く、胸こそ無いがスレンダーな良い体をしていた。
どうせなら、その体を私にくれれば良いのに。
ロキシーは、この世の不条理を呪った。

「あの、どこに向かってるんですか？」
「仲間……いや、しけたジジイのところですわよ。わたくしとは同行するのですけど、一応聞いておこうと思いましたの」
どうやら、仲間が居るらしい。
先程、あまり身なりの良く無さそうな男に囲まれて、発情してたエリナリーゼが、『しけたジジイ』とまで評すとは、一体どこまで酷いんだと身構えてしまう。
それなりに強そうだったので声を掛けたが、判断ミスだったかと思わざるを得ない。
しかし、それを面と向かって言う訳にもいかないし…
そんなことを考えている間に、ズンズンと女は進んでいってしまう。
やがて、一件の酒場の前でエリナリーゼは立ち止まった。
ロキシーはこの場から離れたかったが、遅かった。
肝心な場面で即断即決さが活かせず、悲しい気持ちになってきた。
「タルハンド！用事ですわよ！」
大声を上げてエリナリーゼがドアを開けた。
ん？タルハンド……？
中に居たのは、思ったよりかは普通な炭鉱族だった。
「なんじゃ、うるさいわい！大声を出すでないわ！」
タルハンド…エリナリーゼ……
ロキシーの頭の中をグルグルと名前が回る。
やがてそれはロキシーの頭の中で一つの言葉になって…
（黒狼の牙！）
ロキシーが、何事も結果を待ってみよう、と思った瞬間だった。
安易な結論である。
ーーー
「へー、あのパウロの息子がですの」
黒狼の牙というだけでも驚きだったのに、更にはパウロ達の知り合いだった。そう聞いたロキシーは、すっかり驚いてしまった。
あのパウロがパーティリーダーだったとか、衝撃の新事実が多すぎ

て軽くショート気味であった。

驚いたのは、二人も同様だ。

ロキシー・ミグルディアと言えば、最近有名になってきた冒険者であり、魔術師だ。

時の人なのである。

迷宮をソロで突破し、あっという間にA級になり、

その後に取った弟子の少年は、アスラの超上級貴族にまで成り上がった。

噂によれば、その少年に知識を教え込んだのは、あの青髪の魔術師であると言う。

そして、今もまだ関係が続いているとか。

個人の武勇に優れ、更にはアスラ貴族を出し抜く程の知恵もある。

それが、今のロキシーへの評価だった。

本人からしてみれば良い迷惑である。

自らが功績を求めなくなると、却って功績が積み上がっていくのは皮肉な話だった。

と、そんな有名人である三人だが、あっという間に意気投合…とは行かなかったが、それなりに仲良くなった。

それは、共通の話題があったからだ。

パウロらグレイラット家のことである。

どうやら、ロキシーが会った頃のパウロ夫妻と、黒狼の牙だったころのパウロとゼニスは、結構性格が違うらしい。

なので、知ってる人物のことでありながら、お互いに新鮮だったのだ。

因みに、ロキシーのパウロへの株は結構下がった。

あまり話を続けると、ブエナ村の日々が濁りそうだったので、今は、二人の息子であるルーデウスの話をしてる所である。

「そうなんですよ。私には過ぎる程に優秀で…あげくの果てには成り

上がり?ちょっと、私には荷が重すぎましたね…」
「あのパウロの息子がのう…にわかには信じられんの」
「いや、ゼニスの血じゃありませんの?」
「ゼニスとて、成り上がり願望など無かったじゃろうて」
「あの子は、多分誰かの教えとか関係なしに成長する子だと思いますよ。はあ…我ながら、自分が情けないです」
パウロに対して、ルーデウスの株はストップ高を記録していた。
エリナリーゼ達の中で、ルーデウスは伝説の賢者か何かみたいな存在と化していた。
が、そのルーデウスはロキシーを褒めるので、ロキシーは墓穴を掘っているのだが…そんなことは、預かり知らぬロキシーであった。
「じゃあ、本題に入りましょうか」
「なんじゃ?」
「わたくしたちは、魔大陸の方に行きますの。タルハンドも付いて来ます?」
「いや、わしは一回、帰郷しようと思っとる。その後は行くやも知れんが…今回は、パスじゃな」
「あら、そう」
さして残念でも無さそうにエリナリーゼは言った。
元から、そこまで期待してなかったのかも知れない。
「でしたら、わたくしたち二人ですわね。若干、心許ないですけど…まあ、いざとなったら魔大陸で考えたら良いですわ」
こうして、ロキシーの旅は進んで行く。
共通の話題が少なかったので、ずっとパウロの話ばかりだったが…エリナリーゼの罵倒のネタは尽きなかったので、ロキシーはエリナリーゼが意外にもパウロが好きだったのだと思った。
魔大陸に行った後は、なんとか二人を会わせたい。
ゼニス、パウロ、エリナリーゼ、タルハンド。
きっと、感動の再会になるだろう。
旅の道中、ロキシーはそんなことを考えていた。
まだ、平和な頃だったから。

ーーールーデウス視点ーーー

「そうか。分かった。じゃあ、俺の分の仕事を領都でやっといてくれ……ベックショイ！」

「分かりました…ックシュン…」

風邪でもひいたかな。クシャミがさっきから止まらない。パウロも同じようだった。

それはさておき、今回の端末をパウロに報告すると、そう言われた。

直接言われては居ないが、多分「代わりに俺が探索するから」と先頭に付くのだろう。

「しっかしまあ、全然連絡が取れやしねえ…」

パウロはそんなことを独りごちていた。

最近はあまり、パウロと喋る機会も無かったので、世間話がてら少し話そう。

「どうしたんです？」

「あ、いや…昔のパーティメンバーに声を掛けたりしてるんだが、全然返信が返って来ねえんだよ。それどころか、ギースですらあんま連絡が返ってないんだ」

「何処かで握り潰されてるんじゃないですか？」

「いや、別れ方が別れ方だったからな……ギースの野郎も大概適当だしな。アイツ、良く金をくすねてギャンブルをやってたもんだ」

「へー…」

パウロの方は特に何も違和感を感じてないようだが、俺の方は若干、違和感を感じていた。

ロキシーからの手紙が返って来ないのだ。

別にロキシーは筆まめという程でも無いだろうが、あんな手紙を送ったからには、一通位返すと思う。

「シーローン王国から此処まで手紙を送ると、何ヵ月位掛かると思います？」

「大体一ヶ月位じゃないか？大体、普通に旅をするのの半分位で届く

と思うぜ」
「なるほど」
「ロキシーちゃんか？」
「ええ」
「なら、もう届いてても可笑しくないんじゃないか？」
「だと思うんですが…」
パウロも同意見らしい。丁度、ロキシーに手紙を送ってから今日で2ヶ月だ。
何かあって書き出しが遅くても、そろそろ返って来ないと可笑しい気がする。
他の手紙は、逆算したら割と直ぐに返って来た計算になるからな。
ロキシー辞典だって、量的に直ぐ書き出さないとあのスピードでは返せなかっただろう。
だから、今までの行動を考えると、手紙が返って来ないのは可笑しい気がする。
と、此処まで考えていたら、まるで自分がＬＩＮＥで即レス要求する奴みたいに思えて嫌な気持ちになった。
「ま、なんかあったのかもな。一年以上返って来なければ、初めて気にすれば良いと思うぞ。それにまあ…随分俺もお前も、相手に会ってないからな。そういう可能性だってある訳だ」
「ですね」
良く良く考えたら、パウロや俺だって、手紙の送り主と別れて随分経つのだ。
悲しいが、忘れられてることも覚悟しとかないとな。

第十八話「神の気配」

こんにちは。ルーデウスです。
私は今、話題の豪邸に来ています。
なんと此方の豪邸。出勤時間が０分なんです。
そう、職場と一体型の物件なんですね。
なので、仕事がめんどくさい方にオススメの物件です。此処に住むだけで、毎日家に居ることが出来ます。
更に、なんと電灯モドキが完備されているので、中世系異世界であるにも関わらず、なんと深夜まで活動することが出来るんです。
家具・食事は勿論完備。一日三食、誰かが食事を作って持ってきてくれます。
更に、同僚や部下も職場兼家に常駐してるので、本当の意味でアットホーム。
親戚のお茶目な叔父さんが、遊んでくれる特典付き。
かくれんぼやチャンバラごっこ、人狼ゲームで遊んでくれます。
その叔父さんは、いつも人生を追体験させようとしてくるので、いつでも童心に帰ることが出来る仕様になってるんですね。

どうです？住みたくなったでしょ？
…ちょっとでも仕事が出来るなら誰でも良いので、是非引っ越しを検討してください。毎日がパーティーナイトなんです。Ｂ５の紙吹雪がフィーバーしてジャックポットなんです。
というか、助けてください。
もう１９時間労働は嫌なんです……

―――

「ああ…」
深夜３時。夜の廊下を歩く男が一人。
そう、俺だ。

パウロやギースが探索に出ていき、フィリップが探偵紛いのことを始めた結果、なんと仕事時間は驚異の１９時間の大台を達成していた。
育ち盛りの子供だぞ。こっちは。
まあ、９時就寝の２時起きだから成長ホルモン的には問題ないんだが。
今、屋敷の業務は殆んど俺が一身に背負っている。
事実上の領主だ。ちっとも楽じゃないけど。むしろ平民の方が楽だ。
この仕事量で、更に贅沢までしてるアスラ貴族は、実はメチャメチャ有能なんじゃないだろうか。
この量の仕事をこなした上で、ワークライフバランスも守ってる訳だからな。
というか、ピレモンは何が悲しくてこんな座を取り替えそうとしてるのだろう。ワーカホリックなのかな。
なんて、どうでも良いことを考えていられる時間は終わってしまった。自室に着いてしまったのだ。
なるべく早く終わらせて、早く寝よう。

ーーー

「うっわ、めんどくせえ…」
深夜四時。俺は非常に嫌な気持ちになっていた。
前にフィリップは『書式は統一されている』と言っていたが、一部例外がある。
ピレモン対策は平時にない仕事だったので、雛形が無いのだ。
もっとも、大抵の場合は見れば分かるように書かれているのだが…たまに、悲惨な物が紛れ込むのだ。
注釈や略称まみれで、何が書いてあるかサッパリ分からない。固有名詞だからって全部（以下乙とする）とかしなくて良いんだよ？マジ

で。
それに、一々出典書かなくて良いから。ウィ○ペディアあるまいし。
と、こんな風に霞ヶ関パワポのような書類は、何を書いているのか分からないので、聞きに行かなくてはならないのだ。
一度解読を試みたが、一枚読むのに一時間掛かった。

「はあ…行くか…」
近頃は、エリスとおせっせどころか一緒に寝ることすら、あまり出来ていない。
そろそろ12歳だが、パウロのように家出すら考えるレベルだ。
まあ、パウロはもっと可哀想だからしないけど。
それにしても、エリスは今が一番の育ち時なのだ。胸の膨らみのアハ体験すら出来そうな位に。
というかしたい。
もうなんかどうでも良く思えてきた。
フィリップをぶん殴って、気絶してる所を無理矢理一緒に引っ越せば良いんじゃないかな。
冗談…じゃなく割とマジな考えはさておき。
えーっと、確かコイツが居るのは二階の情報管理部門だったか。
少なくとも、紙の上の情報は管理出来てないみたいだが。
「失礼しまーす…」
中に入ると、三列に並んだ長机に、死んだ顔のオジサン達が机に向き合っていた。手元には書類。お勤めご苦労様だね。
って、あれ？何やら神（ロキシー）の気配がする。
居るわけが無いのに、何故かする。
何故だろう。凄く気になるが、見回してもお役人ロキシーが居たりはしなかった。
（でも、確実にするんだよな……あっちの方か？）
感覚の赴くままに探る。
多分、あっちだ。

壁際の方。
自分の、足の付け根程度の高さ。
そこにあったのは…
「ゴミ箱？」
紙ゴミが大量に入ったゴミ箱だった。
なんでこんな所から神の気配が？
流石に漁る訳にもいかないので、目を凝らして見る。
電灯も数が限られてるので、此処までは光が届かない。シュレッター代わりに、紙をビリビリに破って捨ててるようだ。良く分からない数値が書かれてたり、整備文の一部が見えたりする。
報告書に、計算用紙。謎の数値に何かの手紙。手紙に関してはなんでこんな所に？
ってあれ、破り方のせいで、手紙の差出人の名前が丸々残ってるな。
上の邪魔な紙を退ける。
名前は…、ロキシー…ミグルディア……

「は…え？なんでだって……おい…」
ロキシーの手紙がビリビリに破られていた。
怒りのあまり、声が漏れてしまった。
なんで、誰だ？誰がやったんだ。ふざけやがって。
魔力がちょっと漏れている。もしかすると、これが闘気なのかも知れないが、そんなことはどうでも良い。

ロキシーの、手紙を、ビリビリに、破った。
許される訳がない。犯人は必ずぶっ殺してやる。
何人かが此方を見ている。アイツらか？アイツらなのか？
いや、落ち着け俺。冷静に、冷静に尋問するんだ。殺すのは最後だ。まずは情報を聞き出す所からだ。
「あの、すいません」
「え？なんです…」
仕事をしていた文官に話しかける。普通に受け答えをしていた文

官の言葉が突如止まった。視線が一点に注がれている。俺の手だ。
魔術の炎が灯ってるが、そんなことはどうだって良いだろう？
「ここの部屋で、手紙を管理してる人とかって居ますか？」
「ヒッ、私じゃ、私じゃないです！違います！」
ダメだ。話が通じない。
というか、大声で叫びやがって。周りから注目が集まってしまった。
「答えてください」
「あ、え…その…違うんです…」
しどろもどろになってる。使えない奴だ。というか、コイツがやったのか？だから答えられないのか？
「貴方がやったんですか？」
「おい、ご乱心だ！ギレーヌ殿を呼べ！」
「お辞めください、危険ですぞ！」
「逃げろ！」

尋問の途中だが、周りの奴等がパニックになってしまった。浅野内匠頭のような扱いで、ちょっと怒りが覚めた。
どさくさに紛れて逃げられては叶わないので、扉を土魔術で塞ぐ。
「まあ、待ってくださいよ。あなた方にも訊きたいんです。私の大事な人の手紙がビリビリに破られて居たのですが、誰がやったか分かりますか？此処で、手紙に関連した仕事を請け負う人は誰ですか？」
「い、いやだ…助けてくれ！」
「ダメだ、開かねえ！」
話を聞きゃしない。別に取って食おうって訳じゃないのに。
それとも、ここ全員ぐるみでイジメやってたの？アイツだけグループラインからハブってやろうって？
辞めてくれ。その攻撃は俺に効く。
「ちょ、落ち着いてください。質問に答えさえしてくれれば良いんです」
「お前ら来てくれ！手伝ってくれ！」

「知りません！知りません！助けてください！」
扉に全力で体当たりする者。命乞いを始める者。
まるで殺人鬼か何かのごとき扱いだ。
え、どう落ち着かせれば良いんだ？逆に、今のイメージを利用して『逃げようとしたら殺す』とか言って落ち着かせるか。
「逃げるな！逃げたら殺す!!!」
「ルーデウス、どうした！」
「どうしたの！」
俺が叫んだ瞬間。ギレーヌとエリスが扉を蹴り飛ばして突っ込んできた。二人が衝撃的な表情で此方を見てくる。
「ルーデウス…」
数秒して、固まっていたエリスが優しい表情で此方に向かってきた。
夫になってからも、滅多に見れない表情である。
「ルーデウス、あなた疲れてるのよ」
エリスがスカリーみたいなことを言いながら、優しく抱き込んで来る。
ギレーヌの表情も心なしか悲しそうだ。
「私からも、フィリップ様に言っておく。何、心配するな。頑張って書類仕事も覚えてみせる」
あのギレーヌが。四則演算ですら苦労してたギレーヌがそんなことを言った。
これはアレだ。お花畑でゆっくり過ごすことを提案されてるんだ。
「違うんです！」
誤解を解くのに三十分掛かった。
睡眠時間も勿論減った。ホントに暴れそうだ。

ーーー
翌朝。
「大収穫だ！」

事の報告をフィリップにすると、フィリップがそう言った。キャラがちょっと変わってないか？
「素晴らしい、素晴らしいよ！これで一人裏切り者が潰せる！」
高笑いでも始めそうな位に手を思いっきり上げて、コロンビアのポーズをしてクルクル回りながら、フィリップが嬉々として語っている。
内容はあまり分からなかったが、これで２０人のトップ文官の内、一人の裏切りが分かったそうだ。良かったね。

「フィリップ様！大戦果だぜ！見つけた！」
そこに、一ヶ月くらい姿の見えなかったギースが帰ってきた。喜色満面の笑みを浮かべている。
「どうしたんだ?!」
フィリップがハイテンションに聞き返す。
ギレーヌは、俺より先にフィリップの心配をするべきじゃないだろうか。
「税金をくすねた下手人を見つけたんだ！ピレモンに金は全額渡したって言ってやがった！しかも、やった実行犯が息子のルークという奴ってことも分かった！大チャンスだ！」
「最高だ！ギース、臨時ボーナスだ！」
そういって、フィリップが机から袋をぶん投げる。ジャラジャラ音する辺り、中身は金だろう。
「あざっす！へへ、上物に目星はついてんだ、早速やってくるぜ！」
そういってギースは受け取り様に駆けて行った。
フィリップも獣人を語らうときのような表情のまま出ていく。
ふと、頬を触ると、俺の口角までも上がっていた。
「へっ、ふひっ…」
ヤバイ、何も面白く無いのに笑いが出てくる。俺も少し頭が可笑しくなってるな。
フィリップらは喜んでいたが、その前に俺達が完全に可笑しくなりそうだ。

ダメだコイツら、早くなんとかしないと…

第十九話「出頭命令」

朝。小鳥が囀ずっている。朝チュンだが、朝チュンではない。
「おはようございます」
「ああ、おはよう」
清々しい朝に、おはようと挨拶が出来る。素晴らしいことだ。
今までは深夜2時起きだったが、朝六時にまで戻すことが出来た。
それもこれも、証拠が挙がったお陰だ。ルーク?とやらには感謝してもし切れない。
「おはようございます」
「ルディ、おはよう」
挨拶する相手の顔色も、随分見違えている。
最初に挨拶したのがフィリップで、次に挨拶したのがパウロだ。
夜中、けたたましい笑い声が聞こえて来たと思えば、バルコニーから身を乗り出して、肺がひきつる音をさせながら高笑いしてたフィリップ。
夢と現実の区別が付かなくなり、何もない虚空に向かって過去のパーティメンバーに謝罪を始めたパウロ。
何が原因なのか手がプルプルと震え続け、書類を提出したらギースに薬物中毒を疑われた俺。
明らかに何処か壊れていた俺達三人だったが、紙一重で真人間に戻ることが出来た。またしても意図せぬ形だが、ロキシーに助けられてしまったな。
何はともあれ一段落だ。
証拠を関連性が分かりやすいように纏められたら、フィリップが王都に行ってピレモン達を通報してくるそうだ。
後は告発するだけなので、もう余裕だとフィリップが言っていた。
待ってろよ、ピレモン。
今、引導を渡してやるからな…フィリップが。

ーーー

「パウロ・N・グレイラット殿、ルーデウス・N・グレイラット殿、フィリップ・B・グレイラット殿。及びエリス・B・グレイラット嬢。王都から出頭命令が出ています。来てください」
（あれぇ～？）
余裕とはなんだったのか。
ピレモンに引導を渡されそうです。

ーーー

「あの、すいません。何の容疑で出頭命令なんか出されてるんですか？」
「フィリップ殿とフィットア領主のサウロス殿に、戦争幇助の罪が掛けられています。また、パウロ殿もフィリップ殿の後見者なので、連帯責任が発生します。戦争幇助は罪が重いので、息子のルーデウス殿と娘のエリス嬢にも、連座で罰が下るでしょう」
「つまり、着いて行けば死あるのみだと？抵抗しても良いですか？」
「まだ裁定前なので、冤罪であるなら堂々と行けば良いのです」
上級貴族ということで手荒な真似こそされなかったが、俺達は馬車に拘禁状態で乗せられていた。
周囲には大量の騎士が居る。馬車の中にも三人の騎士が乗っていて、その内の一人が対応してくれていた。
犯罪者扱いの割に、対応が丁寧なのは有り難いことだ。
フィリップも犯罪をやらかすような奴じゃないし、王都観光位の気持ちで大丈夫そうだな。
エリスとフィリップは凄く堂々としている。
頼もしい。
若干挙動不審なパウロが恥ずかしい位だ。普通の反応のはずなのに。
「というか、何をしたら戦争幇助になるんですか？」

普通に疑問だ。余程のことをしないと戦争幇助なんて出来ないだろう。一個人の力は限られてるしな。
それに、フィリップもサウロスの爺さんもそんなことをする性格じゃない。
が、だからと言って完全な証拠のない冤罪なら何故出頭させられるのかが分からない。
それなら、適当な罪を騒ぎ立てるだけで、幾らでも出頭妨害なんてことが出来てしまうからな。
「色々なケースがありますが、今回の場合だと、フィリップ殿とサウロス殿が違法性のある奴隷を購入したことが原因だとされています」
「な、なんでそれが戦争幇助になるんだ？違法奴隷位、言っちゃ悪いが、上級貴族なら大体買ってるだろ」
パウロが吼える。ん？奴隷……？
「ミリス大陸で、拐われた獣族が奴隷として売られた問題で、緊張が高まってるのは御存じですか？お二方が購入なされたのは、ミリス大陸の獣族であると、起訴者によって主張されているのです。よって、国王陛下により、事実であれば有罪という判断が下った次第です」

おい、待てよ。
俺は知っている。この前、エリスとフィリップが出掛けたことを。そして、嬉しそうに獣族の子供を連れて帰って来たことを。
族長の孫だと知って我慢出来なかった、等とほざいて正当化してたことを、俺は知っている。
名前は、ミニトーナとテルセナ。奴隷を買うことで救済してる、とか大嘘こいて懐かせていたことを、俺は知っている。
ギレーヌの親戚だと知って、フィリップが隠蔽工作をしてたことを、俺は知っている。

ガン見したかったが、その反応をすると限りなく怪しいので、チラ見にとどめて覗き見る。
エリスとフィリップは、惚れ惚れするほどに堂々としていた。

（冤罪じゃないじゃねえか！）
なんでこんなに堂々としていられるんだ。この犯罪者二人は。バリバリに実行犯の分際で。
「まあ、フィリップ殿もわざわざ違法奴隷なんて買わないでしょうからね。証拠も捏造でしょう。国王陛下も、署名を集められると立場上受けざるを得ないんですよ。申し訳ないです」
え、てか連座するんだよね？大丈夫？俺も巻き添え喰らわない？
騎士が何か言っているが、今の俺には良く分からなかった。『ヤバイ』という言葉が、頭の中を延々と駆け巡る。
こんな状況になっても尚、やましいことなんて何一つとして無いかのように堂々としてる二人が恨めしい。
だ、ダメだ。冷や汗が止まらない。
なんとか弁護する方法を考えないと。
冤罪じゃないから行為自体を否認は出来ない。法律上で何か都合の良いことはなかったか？
様々な単語が頭の中をグルグルと回る。何か使えそうな物は…
あっ、そうだよ！推定無罪の原則と不遡及の原則があるじゃないか。
そもそも、その組織がミリスの獣人を売ってるなんて知らなかったし、ミリスで緊張が高まっていることも知らなかった。
ということにすれば良い。何も問題ない筈だ。
前者も後者も、水掛け論に持ち込める。
よし、そうと決まれば大丈夫だな。
だが、俺の知識は素人知識だ。一応間違いがあっては困るので、騎士に聞いておくことにしよう。
「あの、推定無罪の原則と不遡及の原則ってどんなんでしたっけ？」
「スイテ…、推定無罪？フソキュウ？というのは文字も想像が付きませんね。それは一体？」
（えっ？）
「え、あの…確実に１００％有罪じゃなければ、罪には問われませんよね？それに、そんな曖昧な定義だと違法奴隷を購入した罪にしか問え

ないのでは？」
「はい？別にやってない可能性があっても、明らかに有罪だと国王陛下が思ったら有罪ですよ。何を言ってるんです？」
「流石に、国王という立場に就ける方なら、冤罪かどうか位の判断は出来ますよ。それに、圧力があっても陛下は公正に判断して下さいますからね。ご安心ください」
騎士達が、不思議そうな口ぶりでそんなことを…
えっ、そんな適当な感じなの？
「ウッソだろ、おい！」
思わずそんな声をあげてしまった。
絶対王政や中世世界観のガバガバな法律に悪態を付きながら俺は、馬車、もとい棺桶で揺られていったのだった。
冷や汗が止まらない。

ーーー

「あの、フィリップ様…大丈夫なんですか？」
夜。お花摘みに行くふりをして、フィリップにそれとなく伺いを立てる。
「ダメだね」
「ダメじゃないですか！」
堂々としてるから何か策があるのかと思いきや、諦めていたからあんなに堂々としてたようだ。
パッションで乗り切る気なのかも知れないが、流石にヤバすぎるだろう。
「なに、問題ないさ。実際に罪を侵して居ても、多数派は第一王子派だからね。パウロを失脚させないよう、第一王子派がなんとかしてくれるだろう」
「本当に大丈夫なんですか？」
「国王だって少数派に味方したってどうしようも無いからね。問題ないよ」
フィリップは自信ありげに言っているが…

「それに、まだ完全な形ではないが、幾つか証拠も持ってきたさ。いざってときは、有耶無耶に出来ると思うよ」
「もし、失敗したらどうするんですか？」
「命までは取られないだろう。心配要らないさ」
如何せん、フィリップが楽観的すぎる気がする。
間違ったことは言ってないが…
大丈夫なのだろうか？

第二十話「茶番」

「着きました。王都アルスです」
騎士がそんなことを告げてくる。アルスといえば、世界で一番デカイ街だ。
王城のシルバーパレスや貴族街の壮麗な偉容や、周辺の街に轟く喧騒。
どれを取っても飽きない街だと聞いていた。
流石、王都というだけあって、アスラ王国特有のジレンマも解消されていたのだ。
そんな訳で、地味に楽しみにしていたのだが……
「あの、すいません、王都アルスを見てみたいんですが」
「すいません、これも職務ですので」
窓は防犯上の観点から締め切られていた。
いや、分かるけども。なんとも融通が効かない奴等だな。
ガッカリだ。もっと緩急のある旅がしたい物だね。

ーーー

あのあと、結局寸分も街を見ることが叶わなかった俺達だったが、幸いなことに城を見ることは出来た。
超大国というだけあって、中々に常軌を逸した豪華さの城だ。
工芸品なんかの目端が効く訳じゃないが、パッと見ただけで中々の物だと分かる。
が、目を牽かれる物があっても騎士は待ってくれないのだが。
「どうぞ」
騎士がそういって、一つの部屋を指した。
勿論、窓と逆側の扉だ。ムチャクチャやってたピレモンの取り締まりはしなかった癖に、こういうところだけ職務意識が高いのはどうなのだろうか。
「おお、ルーデウス！エリス！」

中に入ると、物凄くデカイ声がしてきた。サウロスの爺さんだ。
「お祖父様！」
「お久しぶりです」
地味にフィリップが無視されてる。哀れだ。
まあ、二十越えた息子と孫世代の俺達なら、後者の方が可愛いだけだと思うがね。
「フィリップも久方ぶりだな。して、同じくピレモンの野郎に嵌められたみたいだが」
「そのようですね。さて、どうします？」
「何、ワシもフィットア領主だし、パウロもミルボッツ領主だ。陛下も二つのグレイラットを敵に回す真似はしまい。家格で勝てる者など、そう居ないだろう」
サウロスは、いつの日かの如く静かだった。以外にＴＰＯは弁えてるのかも知れない。
…いや、若干臭うな。
なるほど。暇だろうしな。スッキリしたんだろう。
一瞬、隣に立ってる獣族のメイドさんと、サウロスの行為を想像してしまった。なんて恐ろしい光景なんだ。どっちが獣か分かった物じゃない。
「でしょうね。心配しなくても問題は無さそうです。不審な態度は取らないようにお互い気をつけましょう」
「うむ」
フィリップとサウロスは落ち着いているが、もし国王が本当に潔白な人間だったりしたら、どうするつもりなのだろうか？冤罪じゃないということを理解しているのだろうか。
見てみろ、パウロを。
キョドキョドし過ぎて、若干ピレモンみたいな顔になってるぞ。実行犯ならあの位の態度を取るべきじゃないのか。
「な、なあルディ…間違いなら良いんだが……言われてるの、ミニトーナとテルセナって獣族のことだよな。大丈夫なのか？」
パウロが小声で耳打ちしてきた。

そういやパウロとの話し合いは出来てなかったね。
「全くもって大丈夫じゃないですよ。というか、なんであの二人はあんなに堂々としているんでしょうか」
「え、いや、どうにかする方法は無いのか？フィリップと何か考えてたんだろ？」
「フィリップ様は、場の流れに任せると」
そういうと、今まで焦った様子で、小刻みに体を動かしてたパウロがピタッ、と動きを止めた。

息を一つ、スーッと吸う。
そして、深々とため息をつき…
「後で土で棒を作ってくれ。ピレモンを血祭りにすれば、なんとかなる筈だ」

ダメだコイツ、諦めてやがる……！
パウロの顔は穏やかだった。静かに、ただそこに見える終わりを受け入れている者の顔だった。
でも、やっぱり持つべき物は頼れる親父だ。今は、フィリップやサウロスの数億倍頼りになる。
そう思った矢先だった。
パウロの顔がみるみる内に蒼くなって…
「うっぷ、ごへっ……オロロロロロ…」
土魔術！
あ、あぶねえ。
どうやら、現実に今ようやく追い付いたらしい。

というわけで、ここに居る面子は堂々としてる犯罪者三人に、憔悴しきった犯罪者（被害者）一人。
…俺も吐いて良いかな？

ーーー

「……」
「ふぅ……」
「……」

そしていよいよ、呼び出しのときだ。
王の裁定の前に、一部の貴族の内で判断は下してしまうらしい。特に裁判官が居る訳でもなく、実質的に王は、『コイツら敵に回すと厄介だな』と思う貴族の量が集まると、追認機関と化すらしい。
余程酷いリンチのようなでっち上げの場合は、署名が多くても王が拒否するらしいが、今回の一件は思いっきり、頭からケツまで事実だ。
つまり、多少は情状酌量の余地が思わせないと最悪詰んでしまう。
ボレアスとノトスの力を合わせれば、余程の者を連れて来なければ問題ないと言っていたが…
どうにも、フラグのように思えてならない気がする。
そして、そんな背水の陣な状況に挑むのは三人の賢者だ。
純粋に頭が良い（筈だった）フィリップ。
下半身的に賢者なサウロス。
涅槃寂静へと至ったパウロ。
……
うっ、ヤバイ。
面子を考えたら一瞬走馬灯が見えた。
こりゃ、どう逃げるか考えないといけないな…
（エリスは自力でなんとかなるとして…問題はフィリップか…サウロスの爺さんは一体どんなもんなんだ？……

ーーー
ふと、ムカつく声で思考が戻る。
「おお、遅かったですね！待ちわびましたよ」
そんなことを言ってくるのはピレモンだ。
若干、前よりは卑屈な感じが抜けて、それなりのイケメンになって

いる。相変わらず小物感は拭えないが。
「おい、ピレ…
「では、始めましょうか！早速、開始させて頂きますね！」
パウロが何かを言おうとしてたが、ピレモンは完全に無視していた。
もしかすると、ピレモンの命に関わるかも知れない話だと気づいているのだろうか？
「えー、パウロ・ノトス・グレイラット殿！フィリップ・ボレアス・グレイラット殿！フィリップ・ボレアス・グレイラット殿！彼等は、重大な罪を侵して…
「すいません、遅れましたかな？」
今度はピレモンが何かを言おうとしてたところを、誰かに遮られていた。
遮ったのは、ハゲたデブの狸みたいな爺さんだ。明らかに悪徳大臣って感じの風体だが、誰なのだろうか。
そして後ろから、パウロをちっちゃくした見たいなイケメンと美少女が入ってくる。いや、本当に誰だ？
「なっ！ダリウス！」
「はぁ？」
お互いに余裕綽々だったピレモンとフィリップの顔色が一瞬で変わる。
『やりやがったな、こいつ！』って感じの表情だ。
そしてピレモンとフィリップの視線が交差して…
お互いに全く同じ疑問を抱いてることに気づいたようで、両者共に顔が困惑に染まる。
ダリウス、マジで何者なんだろうか。
「えっ……いや、え……ダリウス殿が何故ここに…」
「…突然呼び捨てとは、少々失礼ではないのですかな？というか、貴殿が呼んだのでは？」
「そんなことはないと思いますが…」

そういって、ピレモンがフィリップの方を見る。尋問するようにまじまじと、隠す気０の視線だ。
が、フィリップもポーカーフェイスすら出来ないようで、全く訳の分からなそうな顔をするばかりだ。

「そこに居られるお三方の、事前裁定ですよ。ダリウス殿も是非ご参加ください」
が、一人落ち着き払った少年が居た。
名前が分からないので、仮にリトルパウロと呼ぶことにしよう。
「ル、ルーク？あの…？」
おや、そんなことをするまでも無かったようだ。
後ろの美少女が名前を呼んだ。ルーク…あっ、最近話題のピレモンの次男か。
コイツが仕組んだのか？親父に事前説明くらいすれば良いのに。
「アリエル様も…何故……」
ピレモンが本気で哀れなくらい狼狽してる。
いや、ルーク少年が連れてきたってことは味方だろうに。
フィリップとピレモン、お互いに困惑が暫く続いたが…先に平静を取り戻したのはピレモンだった。
ルークが連れてきたから、味方だと思ったのだろう。
水を得た魚…という程ではないが、多少は落ち着いたようだ。
フィリップも落ち着こうとしてるようだが、考えが纏まらないようで何やらブツブツと呟いてる。
これは本格的に不味そうだな。エリスとパウロにサッと目配せする。二人は深く頷いて…？眠そうにしてるだけだった。

「え、えー、では気を取り直して…お三方には、戦争幇助の罪が…」
ピレモンが説明を再開する。
イレギュラーがあって意表をつかれたようだが、話す内に徐々に饒舌になっていった。自分の優位を理解したからだろう。

「……という訳です。皆様も、お三方の罪は許されないように思われますよね？」
ピレモンが、正当性について是非を問い掛ける。
「そうだ、そうだ！」「領主失格だ！」「貴族の風上にも置けぬ！」
そんなヤジが飛んでくる。完全にサクラだな。…いや、元から敵しかいないのか。もうダメだな、これは。流れが完全に出来てしまった。
幸いなことに、武の方面に精通してないのか、後ろには窓がある。
今のうちに突っ込むシミュレートをしておくか。
「あ、いや…そういったことをするのは構わないのですがな、事前に一言位あっても宜しかったのでは…」
が、またしても流れをダリウスが壊した。
反応から明らかだが、どうにも乗り気じゃないらしい。もう何度目の疑問になるか分からないが、コイツはどういった立場の人間なんだ。
ルークの味方じゃないのか？
と、思ったら、先ほどと同様に、自信ありげにルークが行動した。
ダリウスに何かを耳打ちして…ダリウスの顔色が変わった！
誰も状況が分からない。
ハゲてデブなオッサンに、イケメンショタが耳打ちして、オッサンの顔が真っ赤に染まる。なんかそういう本とかありそうだな。
…しかし、俺には。
エリスの怒りを見てきた俺には分かる。
（あの赤さは…怒りだ！）
「ぶ、無礼な！このような屈辱は初めてだ！」
「「えっ…？」」
ピレモン・ルーク・フィリップの声が重なった。

が、そんな疑問も気にしないかのようにダリウスは鬼のような様相で出ていってしまう。

……え？

マジでなんなんだ、アイツ。何しに来たんだ？

ダリウス無き後の室内は酷い様相だった。

ヤジを飛ばしてた貴族は全員硬直しており、全く状況が飲み込めてないようだ。フィリップも似たような感じだ。

エリスとパウロ、サウロスは静かな物だ。何をしてるのか全く分かってないのかもしれない。

金髪の美少女は、顔を真っ青にしている。コイツも大概謎だ。

そして、ルーク、ピレモンの二人は特に酷い。

ルークは、何やら絶叫とも呟きとも取れない掠れた声を挙げている。

『バカな』とか『何が』だとか、意味の成さない呟きを延々と繰り返して絶望したような表情をしている。

ピレモンは、今にも死にそうな顔をしながら溢れるような涙を流していた。何か、大切な物が壊れてしまったような反応だ。

俺も、今まで散々煮え湯を飲まされてきたが、流石に可哀想に思えてしまう。

絶好のチャンスなのだろうが、これにトドメを刺さないだけの慈悲が俺にもあった。

誰もが動けない。そんな中。

「あれが人にモノを頼む態度か!!!」

サウロスの爺さんの声が大きく響いた。

後日、ルークとピレモンはダリウスに名誉毀損で、フィリップに横領で訴えられたらしい。そして、第二王女もろとも失脚したそうだ。

なんだったんだ、一体。

少年期　魔大陸編
第二十一話「遭遇」

「なあ、あんちゃん知ってるか？例の天才少年」
「おー、知ってるぜ。最近有名だよな」
王都の一角にて、男達は雑談をしていた。なんてことはない、とりとめのない話だ。
「すげえ経歴だよな。全員揃って」
その内容というのは、新たなミルボッツ領主一行のことだった。
まず、父親―パウロ。
サウロスや先々代ノトス家当主（＝パウロの父親）と言った、庶民の間で評判が高い貴族らからの信頼厚く、更に本人は剣術を三種上級まで納めてる上に、元S級冒険者といった経歴の持ち主。
S級冒険者というのは、言わば超有名なアスリートだとか、一流の芸能人と言ったような立場の人間である。一般人の憧れなのだ。
今のパウロは、サクセスストーリーの代表のような扱いとなっていた。
妻―ゼニスもまた、同様である。
良き配偶者を貰うには、それ相応の努力が必要だ。
よって、パウロの株が上がる程、ゼニスの株も上がっていった。特に、ゼニス自身もS級冒険者で、内実が伴って居たのも大きい。
―ギレーヌ。
この二人の元パーティメンバーであり、剣王の立場にある女だ。剣神の直弟子で、剣の腕は剣神流で4番目。剣神流がこの世界で最もポピュラーで、世界的に普及してると考えるとその凄さが分かるだろう。
―ギース。
彼もまた、元黒狼の牙の一員だ。
何をしているのかは分からないが、フィリップに重用されているこ

とは有名な話だ。きっと、それに応じただけの知謀の持ち主なのだろう。

―フィリップ。

ボレアス家の家督争いに負けた物の、尽きぬ向上心に突き動かされ、遂にはノトスを乗っ取った男。ダリウスでさえも駒として使い、対抗派閥を瓦解せしめた。彼の名は第一王子派の中で轟き、現在最も影響力がある人物の一人に名を連ねたという。

「とんでもねえな、こう考えると」

「武力も知力も完璧って訳だろ？…今の内に、ミルボッツ領の土地買っておこうかな」

「そんな金持ってないだろうが。でも、そんな中でもやっぱり、天才少年はヤバイよな」

今まで挙げた者は、何か特定の能力に特化してる者ばかりだ。

が、その中で唯一、両方の特性を兼ね備えた人物がいるらしい。

曰く、魔術の天才。

曰く、調教の天才。

曰く、算術の天才。

曰く、暗闘の天才。

そう。彼こそが、天才少年―ルーデウス・ノトス・グレイラットだ。

彼は齢七歳のとき、著名な王都の学者でさえもその前に破れた山猿を、見事立派なレディーに仕立て上げ、最後は嫁にまでしたという。

更に、嫁と父親を隠れ蓑にノトスを乗っ取った陰の立役者であり、政務をさせても文官達の数倍の働きをしてみせ、暗闘の腕には一家言あるピレモンの不正の証拠を見つけたのも彼と言う話だ。

が、そんな知謀も然ることながら、彼は武の面でも目を見張る物がある。

ロキシー・ミグルディアを御存じだろうか？

今をときめく水王級魔術師だ。その名は、明るい未来を夢見る若い

少年少女たちの憧れだ。
そんな彼女の弟子であり、なんと無詠唱で魔術が使えると言う。五歳の時には水聖級魔術が使えるようになったらしい。
彼の飲み込みが早いのか、それとも彼女の教育が良かったのか…それは、経歴を見れば一目瞭然。両方だ。
そして、ロキシー・ミグルディアは気難しい人物だと言う話だ。すげなく少年達の冒険者としての誘いを断り、ある国の王子や宮廷魔術師の地位でさえ、彼女のお眼鏡には叶わなかったという。
そんな中で、当時は豪農程度の者でしかなかった彼は、あのロキシー・ミグルディアを感心してみせたのだ。
ポテンシャルで言えば、まだかなりの伸び代がある。
つまり、ロキシーをも越えうる人物になる可能性がある訳だ。水帝級も、このアスラ王国なら夢ではないかも知れない。
更に、それほどの能力を持っていながら謙虚な人物だと言う。領主の息子だと名乗ったのに嘘だと決めつけられ、失礼な扱いをされても決して怒らなかったそうだ。

「間違いないね。こいつぁ歴史に名を残す人物になるぜ」
そんなルーデウスの名は、王都中に畏怖と尊敬、親しみを持って轟いていた。

「…なんか、寒くねえか？」
「空気が淀んでるみたいな…晴れてるよな？」

「……」

…どんな者に対しても、等しく。

ーーー

俺だよ。俺。ルーデウスだよ。

あの良く分からない茶番の後、どうせ暇なので俺達は王都を観光することにした。
ゼニスやリーリャは心配してるだろうが、それについてはフィリップが報告してくれるらしい。
というわけで、今日も1日遊び歩いて来た訳だ。サウロスはエリスと遊びたかったみたいで『ぐぬぬ』って感じの表情をしてた。フッ、勝った。
で、俺としては夜も遊びたかったのだが…エリスはあまりそういう気分じゃなかったみたいだ。
強く迫るのもどうかと思うので、一人寂しく寝ることにする。
おやすみなさい。スヤァ……

ーーー

「んぅ……」
なんだ、うるさいな。
外が騒がしい。意識が若干現実に引き戻されてしまった。でも、抗いがたいほどに眠い。
（……）
頑張って意識を夢の世界に戻そうとする。
が、定期的にコツ、コツとなる音が気になって寝付けない。ダメだ、起きるしかないな。
ガバッ、と起きる。
すると目の前には…
（えっ、誰？）
謎の男が居た。暗くて良く見えないが、男が居る。
まずい、暗殺者でも送り込まれたか……？
眠気が覚めきらないのがイライラする。
意識が薄いがやっとの思いで、魔術を打った。
威力としては申し分なかったと思う。
当たった。俺は勝利を確信した。モンスターだって一撃だったの

だ。人間が耐えれる訳がない。心の中で言語化すれば多分そう感じていた。
が…
「む？」
効いていない！
な、何者だ？どうすれば良い、属性を変えるか？それとも自爆覚悟で上級魔術を打つか？
そんな思考は、一秒もしてなかったと思う。
だが、俺が判断を下す前に男が手を振り上げて…
だめだ、どうす
「がっ……」

ーーー

意識が戻った。
俺は、辺り一面が白い空間に居た。
それ以外には、何もない。そして体が重い。
「っ……ああ…」
それは、十二年前の俺の体だった。
そして理解してしまった。俺は…死んだのだと。
意識が途絶える最後の瞬間、俺は男に殴られた。恐らく、あの後殺されてしまったのだろう。
つまり、ここは死後の世界。
ここに神が来て転生出来るのか、それとも意識の終着点なのかは分からないが…そんなことはどうだって良い。
終わってしまったのだ。
ロキシー、パウロ、エリス、ゼニス、リーリャ、シルフィ…
大切な人が、やっと出来たのに。
立ち直ったのに。
そんなことは知らないとばかりに、運命は残酷だ。
何もかもどうでも良くなってしまった。

俺ごときに、あんな幸せは過ぎたる物だったのだろう。
家族だ。家族を失ったのだ。
もう俺は、あれ以上の幸せなど、どう転んでも得れない。じゃあ、もうどうにでもなれば良い。

ーーー
ふと気づくと、変な奴が居た。
のっぺりとした白い顔をしている。浮かべる笑みはなんとも胡散臭い。
…
「やあ、こんにちは。ルーデウス君。初めまして」
返事をする気があまり起きなかった。
転生だかなんだか知らないが、興味が湧かない。
逆行でもさせてくれるなら、喜ぶがな。
「逆行？ってのは分からないけど、君に朗報がある」
はいはい、手短に済ましてくれ。
転生よりかは消滅したい。俺からの要望はそれだけだ！さあ、後は勝手にしろ。
「つれないねぇ。君はどうやら死んだと思ってるみたいだけど、キチンと生きてるよ」
えっ、本当か?!
「本当だよ？完全に無事さ。じゃ、まずは僕の自己紹介を聞いてくれよ。僕は人神。神様だ」
神様だかなんだか知らないが、そんなことはどうでも良いんだ。
で、何の用だ？無事なら早く起こして欲しいんだが。一刻も早くこんな体から離れたいね。
「良いのかい？君は今魔大陸に居るんだよ？状況の把握位はしといたほうが良いんじゃないのかな？」
魔大陸だ？んなバカな。っていうと何だ、俺は数年間眠ってたことか？
「いや、1日も経ってないよ」

じゃあ、そんな場所に居るわけないだろ。アホか。
「失礼だねぇ。ま、起きれば分かるさ。だから取りあえず助言を聞いてほしい。僕はね、君の味方さ。最初の一回さえ聞けば、それが分かると思うよ」
はいはい。サッさと言ってくれ。で、とっとと目を覚まさせてくれよ。
俺は信じないし、一瞬で忘れる。言うだけ言ってくれ。
無事ならそれで良い。自力で帰ってやる。
「魔大陸ってのは過酷な土地だからね。何の指標も無しに帰れるのかい？」
うるせえ、早く言えよ。長引かせる度に俺の信用は下がってくぞ。
「はいはい。ルーデウスよ、良くお聞きなさい。起きると、貴方の目の前には道があるでしょう。そこを、左側に進むのです」
人神とかいう胡散臭い奴は、そういうとエコーを残しながら消えていった。

ーーー

目が覚める。
手、顔、足……良かった。
キチンと、力強いルーデウスの体に戻っている。
嫌な感覚だった。わざわざあんな体にするなんて、アイツは絶対性格が悪い。

で……目の前を見ると、辺り一面の荒野だった。
……マジなのか。
本で読んだことがある、魔大陸の特徴に一致していたし、少なくともアスラ王国にこんな場所はない。
つまり、人神とやらの言う通りなのだろう。
で、肝心の道とやらだが……道？
それらしい物は見つかったが、道と言って良いのだろうか。

うっすらと踏み固められたような跡があったり、岩を押し退けたような跡があるところがある。
上手く、何もない土地とそれ以外を脳内で分離してみると、若干人の手が入ってるように見える線があった。
これのことか。道自体は見つけることが出来た。

で…助言だと左側に進めって話だったが…
俺は、ああいう手合いに心当たりがある。
どうとでも取れることを良い、他人を誘導し、自分の利益に誘導する輩。そう、フィリップとピレモンだ。
ああいう手合いに何度も掌で踊らされた身からすると…正直言って、従いたくない。
ああいう奴は、大抵騙そうとしてるんだ。本気で助ける気があるなら、スパッと事実を言えば良いだけなのに。
いや、でも俺が途中で話を切らなきゃ詳しく説明してくれてたのか？
でも、空気感というか、キャラはあの二人みたいな感じだったよな…
それに、道があるってことは、右にも左にも何かあるってことだよな？
いや、でもこの程度の物だと気のせいかも…
そんな葛藤が、俺の中で渦巻く。
そして、決定的な何かがあった訳ではないが…
フィリップとピレモンが強く心に浮かんだ俺は、助言とは逆―右側へ進むことにした。

第二十二話「魔大陸グルメツアー」

「……」

あれから三時間位経ったが、何かが見つかる気配はない。

たまに、魔物が襲ってきたりするが、その位だ。

人・建造物と言った、安心出来るような物は出てこない。ただ、魔物と不毛な荒野だけが広がっていた。

「グガァァァッ！」

ほら、また来た。シルエットはワンコロっぽいのだが、細部細部に人を不快にさせる意匠が凝らされている。一体全体、どういう目的があってこんな姿になったのだろうか。

魔術で適当にあしらう。ボッ、と火がついて魔物は焼け死んだ。中途半端に燃えながら突っ込まれたら困るので、ちゃんと強火だ。

「グウウウウ……」

おっと、これは魔物の鳴き声じゃないぞ。

俺の腹の音だ。

さっきから、腹が鳴って仕方ない。俺が三時間位かな？と分かるのも腹時計のお陰だ。

普段から時計があまり無い生活をしてると、こういう体内時計ってのはかなりの精度になるみたいだ。

で、食料だ。

水の方は幸いにして、こんなカラカラした荒野でも魔術で幾らでも飲めるのだが、食料になりそうな物は全くない。

たまに枯れかけの雑草があったりする位だ。

まあ、昔は藁食ったりしてたらしいから食えるかも知れないが。とはいえども、腹を満たせる程の量はない。

魔物が居るじゃないかって？

いや、良く考えてほしい。

あれは、そう…五年前のことだ。

ギレーヌがエリスを諭してくれたとき、なんと言っていた？そう。

「食う物がなくて、魔物の糞を食って死にかけた」と言っていたのだ。
が、ここで疑問が湧かないだろうか？
そう、糞があるなら当然、出した奴も居ると言うことである。
ギレーヌの腕前を考えると、魔物が食えるなら狩って食えば良いだけだ。なのに、そうしなかった。
つまり、魔物は人体に害なのではないか？ということだ。
で、進んでたが空腹に耐えかね、食えない物を食って死にかけた、と。
俺は、そのような仮説を立てた。
最初は魔物を食おうと思ってたが、見た目が毒々しいことに怖じ気づいた俺が、何か参考になりそうなことが無いか漁ったときに出てきた記憶だ。
どうせ襲ってくるなら何でも同じだと、あまり定義自体に興味を持ってなかったことが悔やまれる。
人間を襲うと魔物で、それ以外が動物？
いや、それは魔物と魔獣の違いだったか？
等と言ったような、超初歩のことですら良く覚えていない。
俺は魔物を食ったことがあったっけか。
例えば『毒のある魔物もいるし、無い奴もいる』みたいな可能性もある。
なら、食える魔物は食卓に出されたかもしれない。
…いや、それもないか。
パウロはたまに、森へ狩りに行っていた。趣味では無く、必要に応じてだ。
しかし、パウロが『俺が今日狩ってきた捕れたてだぞ～』とか言って、魔物を持って帰ってきたことなど無かった。
つまり、食える魔物など居ない可能性は高いのではないか？
魔物になる条件は、魔力だったか？
魔大陸は魔力溜まりが多いと言うし、理に叶った説明な気がする。
（じゃあ、魔力を抜き出せば食べれるのでは?!）
論理的な俺がそれに気づいた。

魔物に共通した点は魔力くらいだ。多分。
で、全部食えないなら魔力が原因な可能性が高い。
つまり、そこさえ抜けば只の肉……

（で、どう抜けば良いんだ？）
冷静な俺がそう囁いた。
食事はもう暫く我慢しようと思います。

ーーー
1日経った。
土魔術でドームを作って寝たので、襲撃は心配要らなかったのだが、如何せん空腹で寝付けなかった。
本格的に不味いな。
このまま行くと、ギレーヌ状態になりそうだ。
腹が減り、体力が磨り減り、更に魔物も出てこない。
確実なバッドエンドだ。
近接型で体力のあるギレーヌが”死にかけ”なら、魔術師の俺は、その状態に陥れば”死”あるのみだ。
…四の五の言ってる場合じゃないな。
仕方ない。――食うか！

ーーー

「ヒャッハー！汚物は消毒だぁ!!」
出会い頭にさようなら！
魔物に炎をぶちこんで焼き払う。
って、ダメじゃん。消毒（消し炭）したら食えないじゃん。
ごめん、名も知らぬ魔物君。
日本人は良く食材に感謝すると言われてるけど、君は全くの無駄になってしまった。本当にごめんよ。
よし、次の魔物君！君は感謝しながら食ってあげるよ！じゃあ氏ね

！

今度は焼いてしまっては仕方ないので、必殺の土魔術を食らわせてやる。

水聖級魔術師だから勘違いされがちだが、俺はどちらかと言えば土の方が得意だ。

魔術はバガン！と直撃して……

……魔物は粉々に砕け散った。

ご、ごめん。

ーーー

「おおっ！……おお？」

あのあと、三体目でやっと食える状態で仕留められた俺は、上手いこと上の方だけ切り離して、手のひらで焼いていた。

薪等も全く見当たらないので、仕方ない処置だ。

肉が焼ける匂いがする。非常に良い香り……？

「うえっ、ゴホッ、ゴホッ……」

なんだこれは。

とんでもなく目に染みる匂いだ。

煙は出てないが、まるで煙に当てられたみたいに感じる刺激臭だ。

これ、味は大丈夫か？

味も臭いも、根本のところではそう変わらない。どちらも成分を感じているからだ。

そう考えると、臭いと味は相当な相関関係にある気がする。

いや、ご託はいらない。どうせ食わなきゃいけないんだ。頭で考えたって分かるものか。

「ええい、ままよ！頂きます！」

パクっ、と口の中に肉を放り込む。

口の中で味わいが広がる。

それはさながら、様々な美食をかき集めて、一つにしたような味わい。

それぞれの味が自分を強く主張しつつも、メインテイストである酸

味が主役として引き立てられている。
つまり、これは…
(ゲロじゃねえか!)
「うっ、オロロロロロロロロロロロ」
直後に昇ってきたそれと、味はまったくもって一緒だった。通りで誰も食わない訳だよ!
一通りだし終わった後に、冷静に状況を纏める。
つまりアレか。
俺は今……ゲロ味の肉を食うか、糞味の糞を食うかの選択を迫られてると……?

ヒトガミ様…どうか、どうか僕に助言を…!
つい、そう思ってしまった。思ってから、良く考えたら凄く嫌なので後悔した。
その日も結局断食した。が、吐いたせいで動く気も沸かなかったので、移動もしなかった。
ヒトガミは出てこなかった。
良かった。

ーーー

断食生活二日目。
魔物の肉が食えないなら、土を食おう。
俺はそう思い至った。
農家の人は土を食べる…というのは重大な偏見かもだが、食えない物じゃない筈だ。
あれよりはマシな味だと思いたい。
幸いなことに、周囲に土は沢山ある。
適当な場所の物を掬って食べる。
うーん、魔物の肉よりかはマシだが…
ボソボソとしてるし、飲み込むのにはかなりの抵抗感を感じる。

味自体にそこまで不愉快な要素は無いはずなのに、土の味ということが脳に強い抵抗感を与えてるみたいだ。
どうしたもんかな。
他に何か案はないかと考えると…
（ん…？）
良く目を凝らすと、あちらの方に黒土がある。
なんでこんなところに？
と思わないでも無かったが、今は気にしない。黒土の方が栄養がある筈だ。多少は食えるかも知れない。
黒土を掬う。
ボロボロとしてるし、固い。水が無いからからか？
口に含み、味を感じる。一体、どんな味なのか…
「ぶへっ、ぺっ！ぺっ！」
にっが！とんでもなく苦い。
反射的に口から吐いてしまった。
だが、不思議だ。苦いには苦いのだが…土のように本能的な抵抗感は薄かった。
味もなんていうか、焦げ肉のような…
まさかと思い、近くを見る。骨が転がっていた。
風化してるようだったので、古い物かと思ったが…若干熱を持っていた。
つまり、これは――消し炭肉だ。
焦げ肉。
炭化は偉大だ。どんな物でも炭の味に変えてくれる。
ゲロと炭。どちらかと言えば炭の方がマシなのは、言うまでもない。
かくして俺は、やっとの思いで食べれる物を手に入れることが出来た。
食は凄く細くなった。
成長に悪影響がないと良いんだが…

ーーー
あれから相変わらず、焦げ肉を食べ続け、進む日々。
一週間経った。
そろそろ、何も見えなくて不安になってくる時期だ。
この道らしきものは、どこにも繋がってないんじゃないか。そんな気がする。
あまりにも代わり映えがしないと、頭が可笑しくなりそうだ。魔物も最初は刺激になっていたのだが、慣れてルーティン的に処理出来るようになると、却って精神に悪影響になっていた。
水・食料はあるにはある。が、どれも喜びを感じられるような物じゃない。栄養補給自体は問題ないが、腹も満たせないし味も不味いのでは寧ろストレスだ。
そうして、鬱憤が溜まるばかりで何もない日々は唐突に終わりを告げた。
「ふっ……ぐっ……」
腎臓が痛い。
とんでもなく痛い。
毒って感じじゃないのだが、塩を取りすぎたみたいな痛みがする。
どうすれば良いんだ、これは。
このままでは進むこともままならない。
げ、解毒魔術とかなら効くか…？
解毒魔術を掛ける。すると、かなりマシになった。
ゼニスに解毒魔術を習っておいて本当に良かった。
でも、間違いなく原因は肉だよなぁ…
早くどうにかせねば。
ーーー
更に一週間経った。
発狂しそうだ。
マジで何もない。
魔物、荒野。それだけだ。
どうしよう、ヒトガミの助言に従うべきだったか？ただ、今から戻

ると二週間のロスだ。
勿体ない気がする。だが、進んだところで何かあるのか？四週間以上経って何もなければより損だ。
損切りするべきか、否か。そんなことを悩むほど俺は追い詰められていた。
デカイ亀の魔物、ネズミの魔物、犬の魔物…
全部消し炭にした。
そして全部炭の味だ。辛くなったら解毒魔術。
このルーティンが続くばかりで、それ以外には何もない。
辛い。
ーーー

三週間経った。
亀の群れらしき物が遠目に見える。
燃やしに行くか。

第二十三話「再会」

ーーーロキシー視点ーーー

親との再会を果たした私は、やることもないので暫く村に滞在することにした。

親の想いがやっと分かった。

それだけで、帰ってきて良かったと思う。

その後は、村の外で待ってくれていたエリナリーゼと一緒に、村でダラダラとしていた。

ミグルド族を見たエリナリーゼは、お眼鏡に叶ったようで、ミグルド族を早速口説いたりしてたのだが…『童貞っぽい見た目なのに、経験者だったりして扱いが分かりにくい』などとロクでもないことを言って、不満そうにしていた。酷い評価だ。

私も舌が肥えてしまったようで、どうにも食事だけは不満を感じていた。が、お互いに概ね良好な生活を送れていただろう。

魔大陸にあるとは言っても、基本的に貧乏な村だ。わざわざ、盗賊だってこんな村を襲ったりしない。

そう思っていたのだが…

ある日の昼下がり。甲羅に何かが当たった音がした。

そして、大きな音を立てた。爆発音だ。こんな音は自然に起きない。

「ロキシー!」

「はい」

エリナリーゼは歴戦の戦士らしく、即座に動いた。

私も杖を持って飛び出す。

間違いない、襲撃者だ。全く、何もこんな村をわざわざ襲わないでも……私は、そう思わずには居られないのだった。

ーーールーデウス視点ーーー

「汚物は消毒だあ!!」
俺は、この冒険で学んだことがあった。
それは、無理にでも楽しみを作らなければ、人は壊れてしまうということだ。
だからこそ、バカみたいでもこうしてチンピラの物真似をしているのだ。
尤も、本心で楽しめてはいないので棒読みだが。意味あるのかな、本当に。
魔術を直撃させる。
これをすると、鈍いながらに亀どもは逃げ出すので、威嚇するように水マシンガンを飛ばしてやろう、と思ったのだが、今日の亀は動く気配がない。
もしや、もう死んでる？
題して、亀の大量不審死事件だ。恐ろしい。周囲にシリアルキラーでも居るのだろうか？あ、俺か。
なんて下らないことを考えていたが、ふと魔大陸に来る直前のことを思い出した。
そう言えば、あのときも勝ったと思ったらノーダメージだったのだ。
耐えるどころか、全然平気な生き物が居たって不思議じゃない。魔術があるからと言って慢心していると、ああ言うことになるのだ。
確実に、慎重にトドメは刺そう。
爆発なんかじゃ甘っちょろい。直接、火で燃やしてやろう。
「死ねえええええええい!!」
勿論、遊び心も忘れずにだ。
亀は固いだけで遅いから出来ることだ。
どうせ、ロクな攻撃手段など持ち合わせていない。そう思っていた。
アウトレンジから打つことで、確実に安全策を取っていたとさえ思っていた。

だから俺は…
「そこまでです！」
魔術の詠唱に、反応出来なかった。
多少は加減された魔術が直撃する。
「ぐぼらっ！」
宙を回転しながら地面に落ちる。あ、危ない。一歩間違えてたら首の骨が折れてたぞ。
と、思う間も無く上から女がマウントを取ってくる。
フランスパン見たいなロールを持った、超美人の女だ。
つまり、間違って俺は人間に攻撃してしまったのだろう。
「ちょ、ちょっと待ってください！」
「…ほう？中々イケメンじゃありませんの」
ジュルリと女が舌なめずりをする。
喜んで！
いや、違う。貞操の危機だ。童貞じゃないけど。でも、完全に浮気だ。これはいけない。何がいけないって、下半身的にはバッチコイなことだ。
「勘違いです、すいません！だからストップ！スターップ!!」
「気にしてないですのよ。だからほら、行きますわよ」
「そこの人、助けてください！」
ダメだ、主語が無いのに何を要求されてるのか完全に分かってしまう。
青い髪の、ロキシーを彷彿とさせる女の子に助けを求める。
その女の子が驚いたように顔を上げる。
ジト目の美少女だった。
って、えっ?!
「し、師匠?!」
「え?……あっ、ルディ?!」
俺は四週間の旅の果てに、まさかの再会を果たしたのだった。

ーーー

「お久しぶりです、師匠！」
ロキシーが居た。
それだけで、俺の今までの旅の鬱憤は全て消しとんでいた。
髪、目、顔…どれを取っても、やっぱりロキシーは素晴らしい。
「ちょっと、わたくしにも反応して下さっても良いのですのよ」
「あっ、すいません、どちら様でしょう」
「冷たいですわね。わたくしの名前はエリナリーゼ。エリナリーゼ・ドラゴンロードですわ」
フランスパンの美人さんの方は、エリナリーゼと言うらしい。何処かで聞いたことのあるような名前だ。どこだっけ？
まあ、そんなことはどうでも良い。
今はロキシーだ。
エリナリーゼと話してると、ズルズルと浮気してしまいそうな気がする。それはいけない。というか、エリス達は無事なのか？
すっかりその可能性は考えていなかったが、パウロ達も拐われてるかも知れない。
魔大陸に俺を放逐した犯人の目的はサッパリ分からないが、情報収集はすべきだろう。
それに、何が左に進めだ。ロキシーとの再会以上に良いことなど無い。ヒトガミとやらを信じなくて本当に良かった。
「僕はルーデウス・グレイラットです。宜しくお願いします」
考えることが多くて空返事になってしまったが、浮気しないためには、この位で丁度良い。そうとさえ思っていたのだが…
「げえっ、パウロの息子ですの？」
突然、エリナリーゼの誘惑度が格段に下がった。パウロあいつ、一体何やったんだ？
「こんなに可愛らしい子がパウロの息子なんて、運命は残酷ですわ…！」
「あの…父様は一体、何をしたんですか？」
「知らなくて良いですのよ」

今度はエリナリーゼの返事が素っ気無くなった。
魔大陸にまで来ても轟くパウロの名。世界が狭いのか、パウロの顔が広いのか。
というか、非常にパウロが何をしたのか気になる。これもエリナリーゼの作戦なのか？
なんて策士なんだ。
暫くエリナリーゼをジーっと見るが、結局答えてくれることは無かった。いつか聞き出してやりたい。
そういえば、エリナリーゼってパウロのパーティメンバーか。ギース達が喋ってたんだ。
「……」
ロキシーはさっきから凄く静かだ。
チラチラと此方の方を見てくる。
「で、師匠、さっきから静かですね」
「あっ、その…ルディが思ったより大きくなってて…」
ほほーん、惚の字か？
なんてことだ。凄まじく嬉しい。自発的に貞操の危機だ。
俺は今１２歳だが、健康的な生活を送ってるお陰でそれなりに大きい。若干、ロキシーを越えてるかな？って位だ。可能性はある。
あれ、でもそう考えると今のロキシーってお姉さんになってないと可笑しくないか？
「師匠はあんまり変わりませんね」
「魔族ですから。寿命が長いんです」
「ほーん……因みに、師匠は今おいくつで？」
「４６歳です。ミグルド族の寿命は２００歳位なので、人間に換算すると…１８歳位ですね」
ナチュラルに失礼なことを聞いてしまったが、ロキシーは気にしてなかった。流石だ。
そして、前世と合わせて同い年か。ちょっと嬉しい。
ただ、１８歳か。なら、もうちょい大きいＪＫロキシーになってそうな物だが、個人差の範囲なのか？

「ここは私の故郷なんですよ」
そう言う語り口でロキシーが話し出す。
幼い頃に辛かったこと。
村を出たこと。
冒険者になったこと。
そして、俺達と出会い、里帰りしようと思ったこと。
親と分かり合えたこと。
そんなことを話してくれた。
想いが伝わってくる、素晴らしい話だった。
「あっ、あれが私の両親なんですよ」
ロキシーがそんなことを言う。
目線の先には、中学生位の男女が二人。
が、何故か硬直してる。
（んん？）
更に二人の目線の先には……
先程までロキシーが幸せそうに語っていた生家が、激しい音を立てて燃え盛っていた。
はわわ…

第二十四話「大王陸亀を狩れ」

「すいません！」
平謝りだ。申し訳のしようもない。
あろうことか、師匠の生家を燃やしてしまったのだ。
「ま、まあ勘違いなら…そこまで立派な物でも無いですし…」
「いや、まあ許さないとは言わんが…うちも余裕がある訳じゃないから、ちょっとは補填して貰いたいんだが…」
師匠の両親は、歯切れが悪そうにそう言った。
怒ってるという程じゃないけど、迷惑だとは思ったんだろう。くそう、いつか挨拶に行こうと思ってたのに、こんな形になってしまうなんて。
「賠償ですか？此方でどうかお許し頂ければ…」
服についてるボタンを取り外す。
王城に滞在してるときは、無駄に高そうな服を着せられていたのだ。
服自体は魔大陸でボロボロになってしまったが、金無垢で真ん中に宝石のあしらわれた物なら、多少の賠償にはなるかもしれない。
汚れてたので、魔術でさっと洗う。中から深紅に輝く宝石のボタンが出てきた。
「「ちょっ?!」」
ロカリーさんとロインさんがそんな反応をする。少なすぎたか。
「此方もお付けしますので」
懐から財布を取り出す。いざという時の為に、常に懐に忍ばせていたのだ。俺の頑張って働いた給料が入ってる。月給銀貨二枚で、勤続三年だったので７２枚。
更に、貴族になってからは小遣いとして月１枚渡されていたので、今はなんやかんや言って１００万位持ってるのだ。
とは言えども、家の相場は安くても１０００万はする。修繕すれば直ってくれることを願うしかない。

「ア、アスラ金貨……?!」
「……」
親御さんを絶句させてしまった。合わせても５００万位だろうから、流石に失礼すぎたか。
「ルディ！高すぎです！」
ロキシーがそんなことを言ってくる。
そんなバカな。師匠のコネを使うような真似はしたくない。
「すいません、後はこれしか持っていないんですが…」
魔石を取り出す。杖を常に携帯してる訳にもいかないので、粒の状態で持っていたのだ。最高純度だが、これでも精々７００万に届くかと言うところだ。
あとは、誠意しかない。
「どうか、お許しください!!!」
「「ちょっ!!」」
そう言って土下座をすると、ロキシーの両親が慌てたように駆け寄ってきた。

ーーー

「屋根だけで済んだので、大王陸亀を狩って甲羅を持ってきてくれればそれで良いんです！」
「あれだけあれば、スペルド族だって海を渡れるんだぞ！」
あのあと、俺はロキシー達に必死に貨幣価値を説かれていた。まるで、貴族のボンボンに対する扱いである。アスラ王国の貨幣価値なら、それなりに分かっていたんだけどな。
どうやら、魔大陸は物価がとんでもなく安いらしい。
良く良く考えれば前世でも、東南アジアに行けば、日本人なら早期リタイアしても暮らして行ける、みたいなことが言われていた。
それが、更に極端になった土地らしい。
だから、アスラ金貨一枚でも豪遊出来るそうだ。
で、俺はすっかりロキシーの両親に萎縮されてしまっていた。札束

で殴ったみたいになってしまったのだ。
車を傷付けられて、ちょっと補償してくれと言っただけで一億出された上で土下座されたら、俺だってビビる。そう言う感じだ。
「大王陸亀？」
「知らないんですの？今まで、何を食べてたんですの？」
エリナリーゼがそんなことを聞いてくる。答えは魔物だ。それ以外に何か居ただろうか。
「魔物の肉を味が分からない位に焦がして食べてました」
「ルディ……」
ロキシーが未開人を見るような目で見てくる。いや、いつものジト目だった。
「大王陸亀は、この魔大陸では最もマシな食材ですわ。焼くだけでそれなりに食べれるんですわよ」
先輩風を吹かして、エリナリーゼがそんなことを言ってくる。そうか、俺が食べたのが偶然不味かっただけなのか。試行錯誤しなかったことが悔やまれる。
「へえ、どんな味なんです？」
「ちょっと待っててくれ、確かまだ備蓄があった筈だ」
ロインが奥の方へと行く。あんなことをしといて至れり尽くせりとは、中々に懐が広いな。
ロインとロカリーには固辞されたが、一応無理を言ってアスラ金貨五枚を渡したお陰かも知れない。
暫くして、ロインが帰ってきた。
何も持っていない。これはつまり…
「すまん、全焼してた」
「す、すいません…」
気まずい。思ったより被害は甚大だったみたいだ。
というか、屋根の建材は大王陸亀だったか？
なら、丁度良いな。
「あっ、なら大王陸亀を狩ってきますよ。それで、屋根にもして貰えたら」

「いや、こんな大金も貰ってしまいましたから…」
ロカリーには遠慮されてしまった。
だが、そんなことで止まる俺じゃない！
「良いんです、良いんです！さっ、師匠、エリナリーゼさん！行きましょう！」
ロカリー達が止めて来る前に、勢いで行く。
え？ロキシーと狩りをしたいだけじゃないかって？
大正解だよ。

ーーー

「聞いてた通り、無詠唱魔術が使えるんですわね！」
「焦げたる剣を持ちて敵を切り裂かん！『火断』！…ほんと、私には過ぎた弟子ですよ」
やっべ、すげえ快適。
ロキシーとエリナリーゼの有能さが留まるところを知らない。道中に居た魔物なども、エリナリーゼがタゲを取ってエリナリーゼが切って捨てていた。
ロキシーの何が有能かと言えば、精度の凄さだ。
魔術は小さい方が難しい。そんな中、ロキシーは初級魔術＋詠唱短縮を的確に使うことで、殆んど魔物に傷を付けずに殺していた。
俺がやると、こうはいかない。力でゴリ押すことは出来るが、食事にするには不適格な肉塊が出来るだけだ。初級魔術を使うと、ロキシーみたいに殺しきることが出来ない。
俺が大砲を大雑把な照準で打って殺してる中、ロキシーは同じ数をヘッドショットで殺してる。
どちらが凄いかは一目瞭然だ。
しかも、俺の魔術はこの前効かなかったのだから、完全にロキシーに負けているだろう。
流石はロキシーだ。
エリナリーゼもエリナリーゼで、ロキシーの反応速度を越えて魔物

に群がられたりしないよう、事前にタゲを取ることで、ロキシーが快適に魔術を使える環境を作っていた。
一見するとロキシーより活躍してないように見えるが、そもそも数を殺すだけが技能ではない。
むしろ、エリナリーゼの能力振りが力などに偏っていたら、こうは行かなかっただろう。
二人はまさに息ピッタリで、完璧なチームワークだと言えた。
というか、俺の割り込む余地がない。
時折、魔術などで援護してるが、あの二人なら対処し切っていたと思う。
「凄い威力ですわね！」
「いえ、威力だって、この前完封されてしまいましたのでね！」
「なんですか、その化け物は」
なんなら、世間話をする余裕だってある。
油断大敵だが、ここまで安定感が凄いと何も心配要らないような気がしてくる。
「いよいよお出ましですわよ」
と、魔物の数も減ってきたところで、大王陸亀が出てきた。ボスっぽい登場の仕方だが、全くの偶然だ。
大王陸亀の後に魔物が出てきたら楽だったろうが、ロキシー達の活躍が見れたので良しとする。
「まずは一体ですね」
ロキシーがそう言って、魔術を使う。綺麗に大王陸亀の首だけを切り落した。
「じゃあ、次はルディがやってみせて下さい。私達は周囲の邪魔になりそうな魔物を狩っているので」
「はい、師匠！」
気合いを入れよう。
ロキシーを失望させるようなことは出来ない。
まず、威力が強すぎてはダメだ。初級魔術を絞るつもりでやろう。
ドリルのような小型の魔術を練る。脳天をブチ抜いてやる。

そう考え、魔術を打つ！
「ギャ！」
だが、一撃で殺すことは出来なかった。眉間の浅いところで止まってしまったみたいだ。
ダメか、もうちょっと強く打たないとか？
今度はサイズを大きく、更に弾速も早くして打つ。
よし、直撃！
と、思った矢先に、亀が半分位消し飛んだ。中身が抉れている。
…正直、食べたいとは思えない見た目だった。
「ほ、本当に凄い威力ですね。流石はルディです」
「あ、いえ…僕、まだ威力調節も上手く出来ないんですよ。出来れば、また教えて欲しいです」
「私ごときに出来ることがあるか分かりませんが、ルディがそう言うなら…」
ロキシーは謙遜しながらも、ちょっと嬉しそうだった。はにかんでる姿も素晴らしい。
「はい、宜しくお願いします！師匠！」
「だから、師匠ではなく先生だとあれほど…」
ロキシーの師匠論が暫く続いたが、俺にとっては師匠だ。
こうして、俺はロキシーに再び師事をして貰うことになった。
やったぜ。
期待してた大王陸亀は、不味かった。
でも、今まで食べてた物よりはマシだった。
マトモな旅がやっと出来る。
最高のスタートだ。

第二十五話「神を名乗る詐欺師？」

白い空間。まただ。

……

「やあ」

…チッ……

「返事をしてくれよ」

……

「無視かい、そうかい」

……

「強情だね。でも、僕の話を聞かないと後悔するよ？」

……

「まあ、話を聞けば返事をしたくなる筈さ」

……

「まず、君の家族は、君のことを探して旅に出た。この意味が分かるかい？」

……クソッ、ああ、分かるさ。そりゃ、危険があるってことだろ？

「ご名答。まあ、僕も具体的に何があるかまでは分からないけど…、兎に角、君は早く帰る必要がある」

じゃあ、お前の指示に逆らって大正解だったじゃねえか。

ロキシーもエリナリーゼも、この上無く頼もしいだろ。

「それは否定しないよ。でも、君は僕の助言に従ってれば、もっと早く帰ることが出来た」

そうかよ。でも、精々誤差の範囲だろ。どんなに強い奴が居たって、物理的な距離は無視出来ないよな？

「まあ、聞いてくれ。君は左に進めば、クラスマという町に着いていたんだ。そこには、魔界大帝キシリカ・キシリスという人物が居る。知ってるかい？」
　知ってる。確かに、今のメンバーよりも強いかも知れないな。で、なんだってんだよ。
「君は、なんやかんやあってキシリカに食事を奢る。そして、そのキシリカはその地の魔王、バクラーハグラーの上司だ。バクラーハグラーは、海族にコネを持っている。だから君は、食事のお礼に、キシリカに口添えをして貰うことで、クラスマから中央大陸北部に一週間程度で帰れる。そして、そこから更に一ヶ月でアスラ王国に着く。その頃はまだ、君の家族は国内を探してるから、君の誘拐事件は笑い話で終わることになるのさ」
　随分と都合の良い話だな。そんなご都合主義みたいな話があるのか？
「調べてくれたって構わないよ？僕の話が全部事実だって分かる筈さ。尤も、だから何だって話でも無いけどね」
　じゃあ、今キシリカが何処に居るのか教えてくれよ。ロキシーとエリナリーゼを回収して帰れば、最良の形だろ？
「それは出来ない」
　なんでだよ！俺の手助けをしたいなら可笑しいじゃねえか。何が目的なんだ？
「僕も万能じゃないってことさ。色々と制約がある。例えば、君の前に表れることだって、全く制御出来てないからね。不意のことなんだ」
　じゃあなんだ、制約ってのを教えてくれよ。
　それも勘案して、上手くプランを立てれば良いだけだ。
「それも、出来ない」
　ハッ、それもまた制約ってことか？随分都合の良い制約なんだな。そういう秘密主義的なところが、一番信用出来ない理由なんだよ。
「まあ、僕のことはなんだって良いさ。ただ、君は調べていく内に、僕の言ってることが本当だと気づくだろうから、助言だけはしておこ

う」
で、お前がなんで俺のことを助けたいのかだって、サッパリ分からないんだが。
「面白いからだよ。理由としては不十分かい？」
それなら、お前にしたって、俺が魔大陸を旅する方が面白いだろ？
ただ船に乗って終わり！って話より、お涙ちょちょぎれる話の方が、お前みたいに高みで見下ろすタイプの輩には楽しいんじゃないのか？
「そこはほら、個人の趣向さ。僕はハッピーエンドが好き。それだけだよ」
へえ、そうかい。じゃあ、パウロ達に伝えてくれよ。
貴方の息子は無事に帰ってきます。だから、家で大人しく待ってて下さいってな。
「君の父親が、それで待ってると思うかい？それに、繰り返し言うけど、僕も万能じゃない。今、君の家族に声を届けることは出来ない」
……今のは、俺が間違ってた。パウロが待ってる訳ないってのは認めてやる。
「納得してくれたかい？じゃあ、助言を授けよう。ルーデウスよ。リカリスの町に行き、ノコパラという男に接触しなさい。そうすれば、貴方の悩みは後々解決するでしょう」
でしょう……でしょう……でしょう……。
そんなエコーと共に、俺の意識は消えて行った。

ーーー

「うおっ…」
朝だ。
体の感覚が丸っきり変わる感覚は慣れない。変な声を出してしまった。
隣にはロキシー……の父親のロインが寝てる。
華の無いことだ。

それはさておき。
俺は、ヒトガミが信用に足るのか、考えなくてはならない。
ヒトガミ云々は抜きにして、俺の家族が、俺のことを探しに来るということは、分かる。納得出来る。
だから、早く帰る必要があるというのは、どのような状況下でも認識していただろう。例え、ヒトガミが『ゆっくり帰れ』と言っていたとしても。
でだ。
ヒトガミのお告げは嫌な感覚がするし、感情的には信じられないが、それは前世の体のせいかも知れない。
一旦、そういうのをフラットにして考えると、確かに奴の助言通りに事が運べば、結末は悪くなかったと思う。
だからこそ、俺はヒトガミの話が本当なのか、そして奴が信用出来るのか、調べる必要がある。
キシリカ関連の話は、ロキシー達が起きたら訊くとして…

何か、ヒトガミの話に矛盾は無かったか考えよう。
『パウロ達に助言は出来ないよ。だから、早く帰った方が良いよ。僕はハッピーエンドが好きだから、そう悪いようにはしないよ』
ヒトガミの話を大雑把に纏めるとこうだ。
能力は不便というところから考えよう。
都合が良すぎる気がするが、矛盾はしてない。
これは保留だ。
気になることがあるとすれば、ハッピーエンド云々のところだ。
奴の口振りだと『偶然俺に繋がった』みたいな論調だったが、じゃあ例えばド悪党に繋がったりしたら、そいつを助けるのか？
自分でも若干無理のある主張な気がするが、偶然繋がった俺にハッピーエンドを見せる、というのは違和感がある気がする。
対象を選べる、となるとストンと俯に落ちる感じはするんだがな。
後は、片側の未来だけハッキリと見えてることも、気になる点だ。
原理が分からないから何とも言えないが、ヒトガミの助言に従った

場合は『確実に帰れる』なのに、従わなかった場合は『家族が危ないかも？』だ。
「平行世界の未来が見える」というよりは、俺のことを誘導してるように感じてしまうのは、ひねた考えだろうか？
…くそっ、そもそも、こんなことを考えてる時点で、何か大きな思い違いをしてるのか？
考えが上手く纏まらない。
仕方ない、一回、キシリカのことをロキシー達に聞くか。
ロキシーは一人で居間に居た。
「おはようございます、ルディ」
「先生、おはようございます」
ああ、流石はロキシーだ。
顔を見ただけでスッカリ嫌な気分が晴れた。
エリナリーゼ達は、まだ起きてないみたいだ。
「あの、起き抜けで悪いんですけど、ちょっと聞きたいことがあるんです」
「なんですか？」
「クラスマの町って、どこら辺にあるんですか？」
「はあ…クラスマの町ですか？それなら、魔大陸の北西ですね」
「因みに此処は？」
「北東です。丁度、クラスマとは真逆でしょうか」
まあ、さすがに地図を見れば分かるような嘘は付かないか。
この感じだと、魔界大帝キシリカも居るんだろうなぁ…。
「じゃあ、魔界大帝キシリカの目撃情報を知ってたりしますか？」
「魔眼でも欲しいんですか？そんなのが無くても、ルディは十分強いと思いますよ？」
魔眼。確かに凄く魅力的だが、今はそれじゃない。
「目撃情報ですか……。ノコパ…知人が、一年位前に指名手配の紙を見たと言ってましたね」
ちゃんと居たのか。

話を纏めると、やはり嘘はついてない。
胡散臭いだけで、言ってることは本当なのか？
いや、信用するには早い。
嘘を付くには、本当のことを混ぜろと言う。
ヒトガミは『調べれば助言が本当だと分かる』と言っていた。なら、嘘が混ざるなら能力云々の方だ。
が、信用しないにしても、恐らく早く帰ろうとすれば、奴の助言が一番になってしまう気がする。助言自体に嘘は混ざってなさそうだからな。
だからと言って、脳死で従うようなことは危険だろう。気づかない内に操られかねない。

何か、ヒトガミの性質を確信出来ることが有れば良いんだが…

俺の旅の目標が、一つ追加された。

第二十六話「痴情」

「ふわぁ……おはようございますわ、ロキシー」
「おはようございます…ルディ？」
「あっ、いや……」
疑問気に此方を見てくるロキシー。

ーーー

「えっ、ルディ、お嫁さんが居たんですか?!」
「ええ…、つい二年ほど前出来ました」
驚いた顔をするロキシー。

ーーー

「アスラ王国、ですか…遠いですね……」
「わたくしなら、用事も無いので着いて行っても宜しいですわよ。ああ、パウロには会いたくないですわね」
悩ましげな顔をするロキシー。

ーーー

「ルーデウス、ちょっとこっちに来てくださいまし」
「あっ、はい。なんでしょう？」
「？」
ぽかん、とした顔をするロキシー。

ーーー

「ルーデウス、貴方……ロキシーに惚の字ですわね？」
「はい？嫁が居るって言うのは、見栄でも何でも無いですよ？」

「…だって貴方、さっきからずっと、ロキシーのことをチラチラ見てるじゃありませんの」

「……？……あっ！」

エリス。謝ります。ごめんなさい。

ヒトガミに言われて、貴方が必死に探してくれているということも分かっています。

でも、浮気してしまいそうなんです……。

ーーー

俺が旅の目標を定めた後。

俺は、ロキシー達に、魔大陸に居る事情を話していた。

色々あって有耶無耶になっていたが、良く良く考えれば、意味の分からない状況の筈だ。

纏めてみれば、自分でも良く分からない。

寝て起きたらぶん殴られて、気づいたら魔大陸。

何らかの妄言癖を疑われても仕方ないような、被害妄想じみた物だ。

ヒトガミに説明されてなきゃ、俺だって理解してなかっただろう。

まあ、ヒトガミのことは黙ってたんだが。それを説明すると、『ロキシーと会わない方が良かった』という話もすることになってしまうからな。

最も、何故か俺の名前が売れてたことで、理解は得られたがね。

そして、事情を話した後。

ありがたいことに、ロキシーとエリナリーゼが、アスラ王国まで送ってくれることになった。

キシリカが何処に居るか分からない今、これが最善だろう。

ロインやロカリーにはまだ何も話せて無いが、流石に師匠の親にま

で、来て欲しいとは思わない。
よって、殆んど必要なことは話し合えた状態だ。

そんなことがあり、俺はすっかり安心しきっていたのだが…
エリナリーゼが、とんでもない爆弾を放ってきた。

『俺はロキシーが好き』
その言葉を聞いたとき、俺は笑い飛ばそうとした。
まさか。
今の俺は女に飢えちゃいない。
そんなバカなことはない。
そう言おうと思い、直前の記憶を漁った。
すると、衝撃の事実が判明した。

―ロキシーの顔しか出てこない。

なんと、自分でも気付いてなかったが、俺の意識はロキシーにしか向いていなかったのだ。
部屋の内装を思い出そうとしても、靄が掛かったように、ハッキリとしたビジョンにならない。
なんと言うことだ。俺は驚いた。
昨日、あれだけ家族のことで心動かされた翌日に、こんな酷いことを考えているのだ。

俺は考えた。落ち着く必要があると。
そこで、誘惑と理性を別けて考えようと思った。感情がゴチャ混ぜになっているからだ。
俺の中で、天使と悪魔が囁いていた。
悪魔は『フィリップが洗脳…もとい貴族教育をしてくれている筈だ。一夫多妻制でも、なんの問題もない』と言っている。抗いがたい誘惑だ。

天使は、『何事も誠実にです。深く謝り、相手に誠実に接すれば、エリスだって許してくれる筈です』と言っている。厳しい道だが、俺はやってみせる。

っていや、違う！

思わず、ノリツッコミをしてしまった。

楽天的な道を提示する、悪魔。辛く苦しいであろう道を提示する、天使。

俺の欲望と自制心の両方が、ロキシーを嫁にすることを前提に考えてしまっている。

ダメだ。この思考に陥ると、クズな俺に論破されて、あっという間に、欲望の赴くままに行動してしまうだろう。

確かに、俺の中に何か抵抗感がある筈なんだ。

そうだ、一夫多妻制に違和感を持つなら、日本人的な感覚だろう。

前世の俺を深く呼び起こす。

そう、今の俺は日本人だ。決してアスラ貴族ではない。

前世の俺ならなんと言っていた？

（デュフフコポォ　オウフドプフォ　フォカヌポウ）

うわぁ！ダメだ！

ニキビ面のデブいオッサンは、合法ロリ、ハーレムという単語に激しく興奮していた。だって俺も興奮してるんだもん。

何が俺の中で抵抗感を示してるんだ？

エリスとの関係が壊れること？

いや、なんやかんや言って、エリスは許してくれそうだ。じゃなかったら、メイドとニャンニャンしてるサウロスに懐いたりしない。

パウロやゼニスに軽蔑されること？

パウロを見てみろ。それ以前の問題だ。

おかしい。考えれば考える程に、自らロキシーと浮気する道に思考が逸れていく。

パッと思い付く反対意見は、自分で全部、論破出来てしまった。
イマジナリーエリスですら、ゴーサインを出しているのだ。これはもう、やるしかないか…？

…いや、落ち着け俺。
やっちゃいけないことはあるだろ。
そう、今の俺はロキシーと久々に会えて、テンションが上がっているだけだ。
このテンションをこれ以上上げないよう、ラッキースケベなどは絶対に起こしてはならない。
必然を持って未然に防ぐ。
今の俺に必要なことだ。
やってみせる、やってみせるぞ！
浮気しないために、エロいことはしない。
俺は、そんな一見不可能と思われる目標を達成するため、気合いを入れ直したのだった。

ーーー

「短い間でしたが、お世話になりました」
「良いのよ。ロキシーも中々、自分の話はしてくれないから…それに、こんなに貰ってしまいましたし」
ロキシーの実家を出ることになった。
ロキシーもそれなりに満足していたこと、そして速急に帰る必要性を認識した為だ。
「君は魔術師だったと思うが、持っていて損ということは無いだろう。これを持っていってくれ」
ロインは、そう言って古い武器を渡してくれた。
使い込まれた後があるが、それでも立派な物だった。
カトラスとか、そういう類いの剣だ。
「良いんですか？こんな立派な物…」

「良いんだ。元々貰い物だしな。アスラ金貨に替わったと思えば、儲け物だ」
そうは言ってるが、多分、これをアスラ王国で買おうとしたら、金貨五枚じゃ到底足りないだろう。
師匠の親というだけあって、器が大きいんだろうな。
「じゃあ、行きましょうか、ルディ」
「二十年に一度くらいは、顔を見せてくれるかしら？」
「ええ。次は、男性を連れて帰って来るかもしれません」
うぐっ、胸が痛む。
浮気しない、浮気しないと言ってる割に、軽口ですらこんなに心動かされてるのだ。
いけない兆候だ。
「ハッハッハッ。良い男性が見つかると良いな」
ロインは、俺の方をチラリと見た。
コイツ、気づいてやがる……?!
もしかすると、あの武器も将来の婿候補に対する、投資的な意味合いも含まれてるのかも知れない。
外堀からも埋められてる。
アスラ王国法では幇助は犯罪なんだぞ?!
知らんけど。
「それじゃあ、ありがとうございました！」
最後に挨拶をして、出発する。
旅の始まりだ。
ロインとロカリーは、最後まで手を振っていた。
ーーー
「じゃあ、一回リカリスの町に寄りましょうか」
「そうですわね」
「何か理由があるんですか？」
出発した後。
俺達は、歩いていた。

急いでいるのにだ。隣に馬が居るのだから、乗れば良いのにと思う。
「馬が三人乗せたら、流石にコンディションの問題があるんですわ。あと、ルーデウスはお嫁さんが居るんでしょう？わたくしとしては大歓迎なのですけど、ルーデウスは嫌なのではありませんの？」
「バッチコ……ごほん、そうですね。間違いがないとは言い切れないので」
エリナリーゼは、意外にそういう方面に良識があるようだ。
セクハラばっかりして来て居たが、一線は越えないのかも知れない。
「エリナリーゼさんの言った通りです。アスラ金貨があれば、お金に困ることは無いでしょう。なので、何か足換わりの動物を買おうと思っています」
この位、なんてこと無いかと思うかも知れないが、この発言もロキシーの頭の良さが出ているだろう。
パッと考えれば、この馬で行ってしまった方が、時間が短縮出来るように思えるかも知れない。
が、ロキシーは”疲労”という、ステータス化しにくい要素もキチンと勘案して、プランを立てている。
当たり前のようだが、損益分岐点的な物を見極めることは、中々難しいことだ。
こういうところに、エリスとは違った良さを感じる。
ロキシーは何かをブツブツと呟いてる。また、何か計画を立てているのだろう。
（ってうおっ、魔物だ）
魔物が、かなり近くに表れた。
それなりに知能がある種のようで、隠れて近寄って来てたらしい。
命の危機、という程では無いが、油断ならない距離だ。
俺は、即座に魔術を打とうとする。
が…
「ギャウッ！」

そんな間抜けな声と共に、魔物が跳ねた。
脳天に風穴が空いている。
ロキシーだ。
俺が反応した頃には、小声で詠唱を唱えていたのだ。
（かっけえ…）
無詠唱だとか、そういうアドバンテージを物ともせずに、対処してるロキシー。
俺は、嫉妬心を抱く余地すらなく、ロキシーに憧れを感じていたのだった。

ーーー

三日経った。
あのあとも、ロキシーは冷静な判断をもって、大活躍していた。
俺も、全く仕事をしていなかった訳ではないが、比率としては８：２位だっただろう。
勿論、俺が少ない方だ。

そして俺は、ラッキーイベントを死に物狂いで防いでいた。
―水浴びに近づかない。
―夜はなるべく深く眠る。
―風上に立って、髪の匂いを感じないようにする。
など。
痴情を抱くような余地のあることは、限りなく防いだつもりだった。
だからこそ、気づいてしまったのだ。

俺は、ロキシーが好きだ。
それは『美少女だから』とか、そういう劣情の類いではない。
それも過分に含まれてるが、違うのだ。
生き様だとか、行動の一つ一つに憧れてしまっているのだ。

こういう人が隣に居て欲しいと、思ってしまっているのだ。
エロい感情だけなら、まだなんとかなった。
それは、此方から行動しなければ、殆んど防げるからだ。
だが、それだけでは無かった。
俺は、ロキシー・ミグルディアという人物に、本気で惹かれて居るのだ。それこそ、二人目の嫁にしたい位に。
だからこそ、問題だ。
ロキシーは、賢いし有能だ。
そして、俺もロキシーには存分にその能力を活かして欲しい。
しかし、そうすればそうするだけ、ロキシーは魅力的な人物になってしまう。
そして、俺も厳しくなる。

―つまり、どうするべきか。

そう、俺は今こそ、強くならなければならないのだ。
ロキシーすらも、越えうる位に。
高い壁だ。だが、目指さなければ、どんどんロキシーは俺の中で大きくなっていってしまう。

浮気をしない。
その為に、俺は強くなる決心をしたのだった。